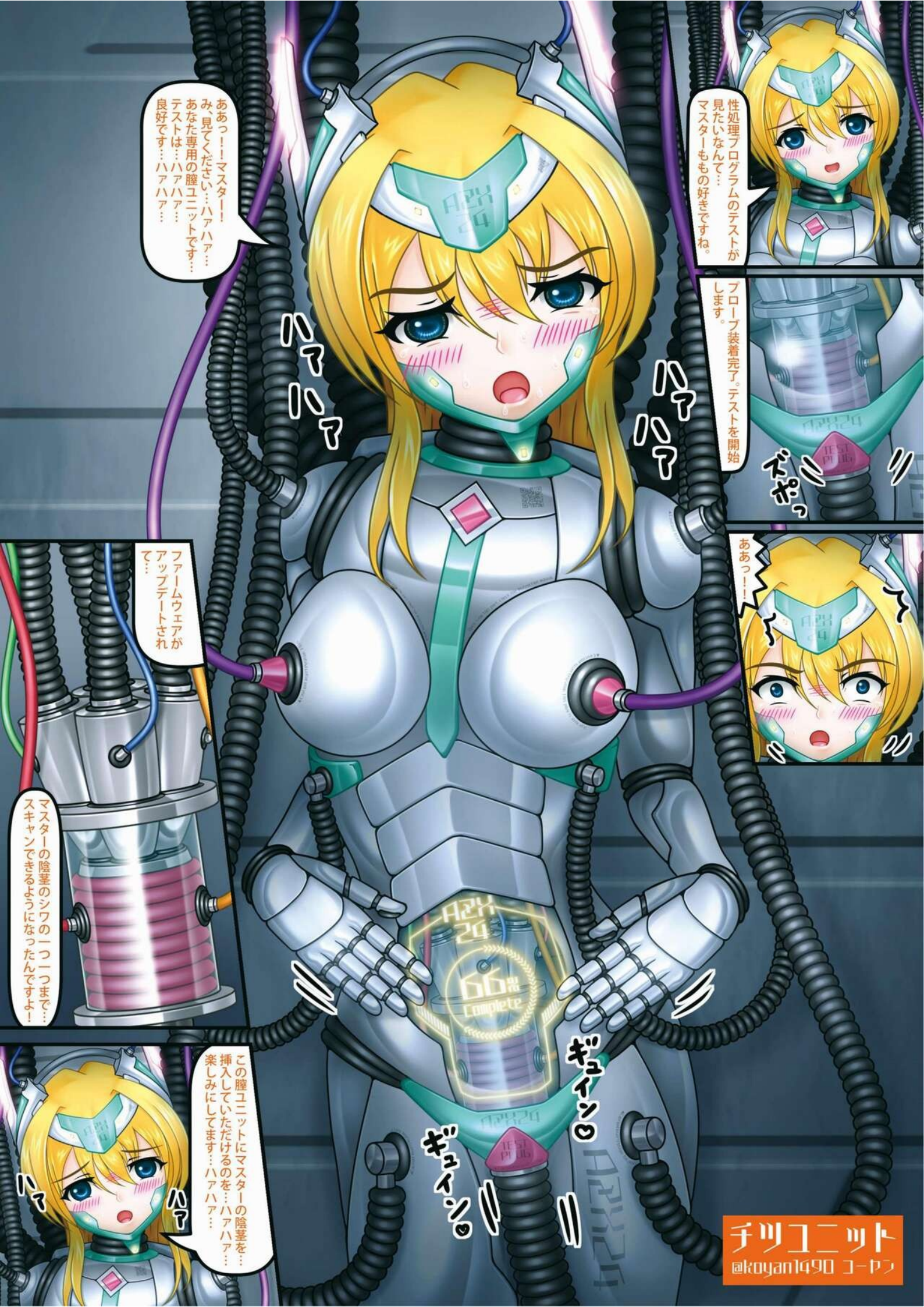
機械化きかいか娘れくしょん 合同誌4



R18
成人向け

⚠ 機械化・改造描写があります

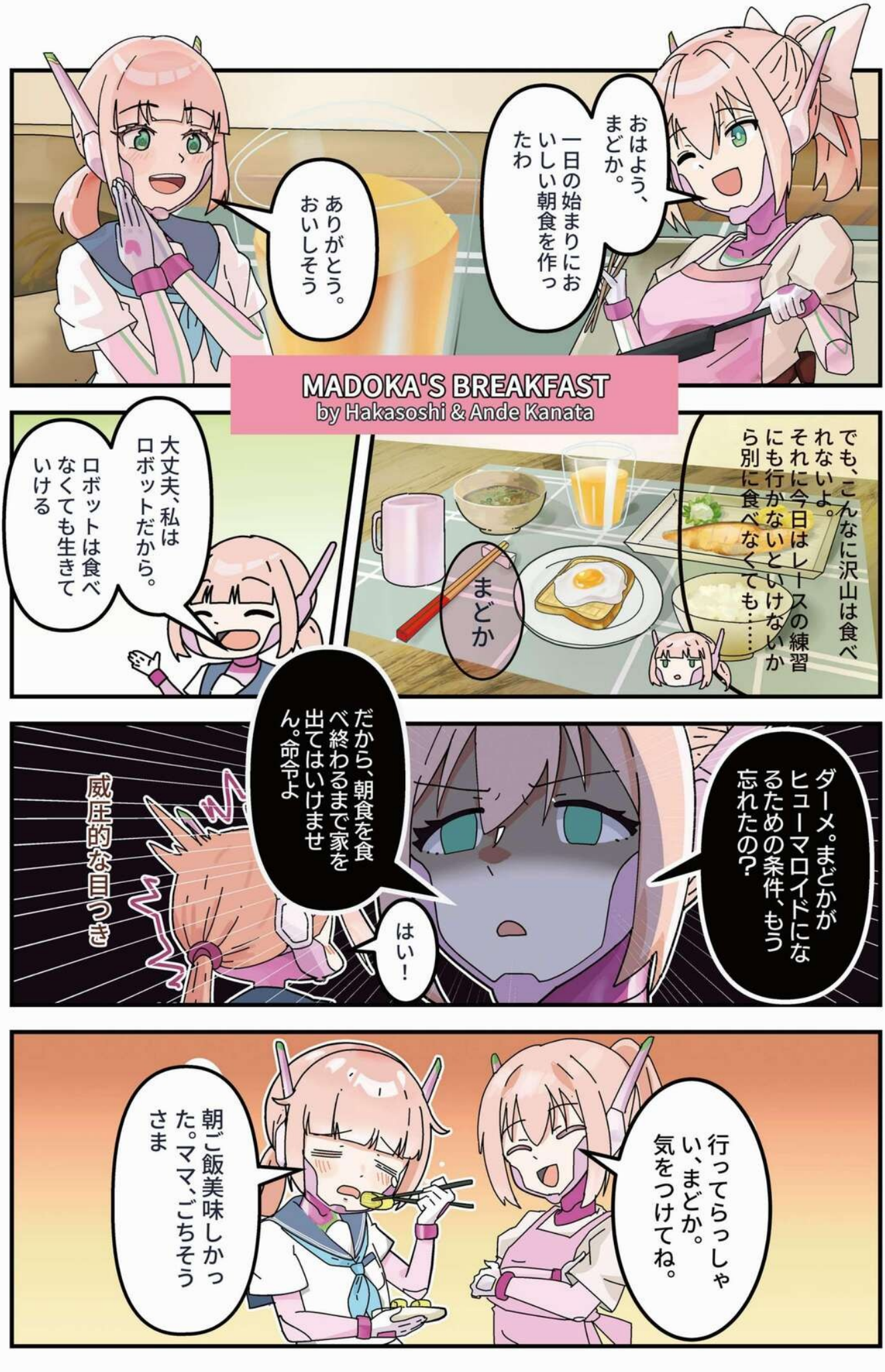

性処理プログラムのテストが見たいなんて…マスターももの好きですね。
プローブ装着完了。テストを開始します。
ズポっ
あぁっ！！
ああっ！！マスター！み、見てください…ハァハァ…あなた専用の膣ユニットです…テストは…ハァハァ…良好です…ハァハァ…
ハァハァ
ハァハァ
ファームウェアがアップデートされて…
マスターの陰茎のシワの一つ一つまで…スキャンできるようになったんですよ！
この膣ユニットにマスターの陰茎を…挿入していただけるのを…ハァハァ…楽しみにしてます…ハァハァ…
ハァ
ギュイン♡
ギュイン♡
チツユニット
@koyan1490 コーヤン



描いた人

nezumi




おはよう、まどか。
一日の始まりにおいしい朝食を作ったわ
ありがとう。おいしそう
MADOKA'S BREAKFAST
by Hakasoshi & Ande Kanata
でも、こんなに沢山は食べれないよ。それに今日はレースの練習にも行かないといけないから別に食べなくても……
まどか
大丈夫、私はロボットだから。ロボットは食べなくても生きていける
ダーメ。まどかがヒューマロイドになるための条件、もう忘れたの？
だから、朝食を食べ終わるまで家を出てはいけません。命令よ
はい！
威圧的な目つき
行ってらっしゃい、まどか。気をつけてね。
朝ご飯美味しかった。ママ、ごちそうさま



Script: Ande Kanata and Hakasoshi　Art: Ande Kanata

copyright　ブローサワン　2024



copyright　ブローサワン　2024

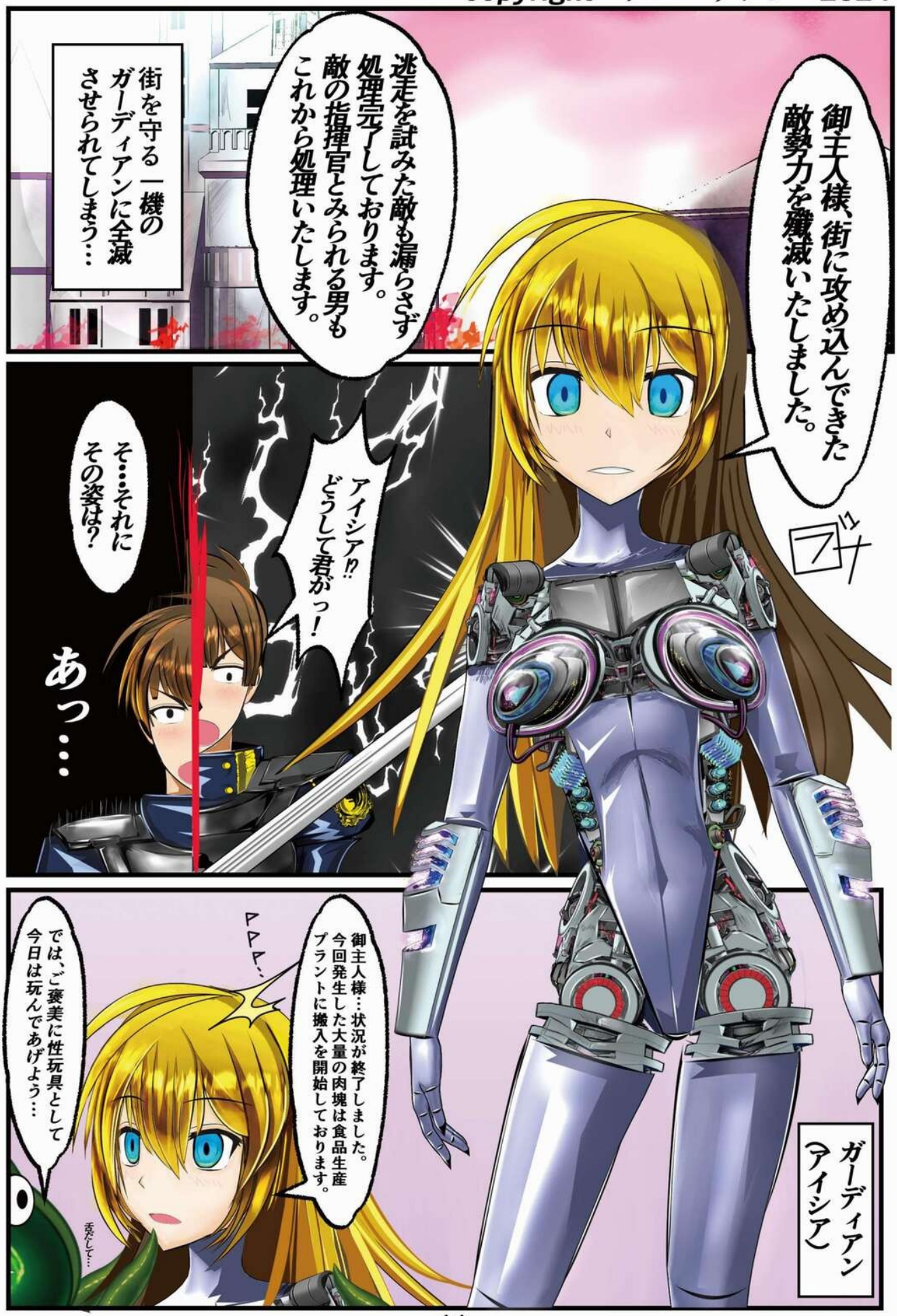


copyright　ブローサワン　2024





copyright　ブローサワン　2024



END

MHR－07
Arctia

MHRシリーズ：要人向け多目的ロボット
身の回りの世話から秘書業務、
警護まで可能な多目的ロボット。

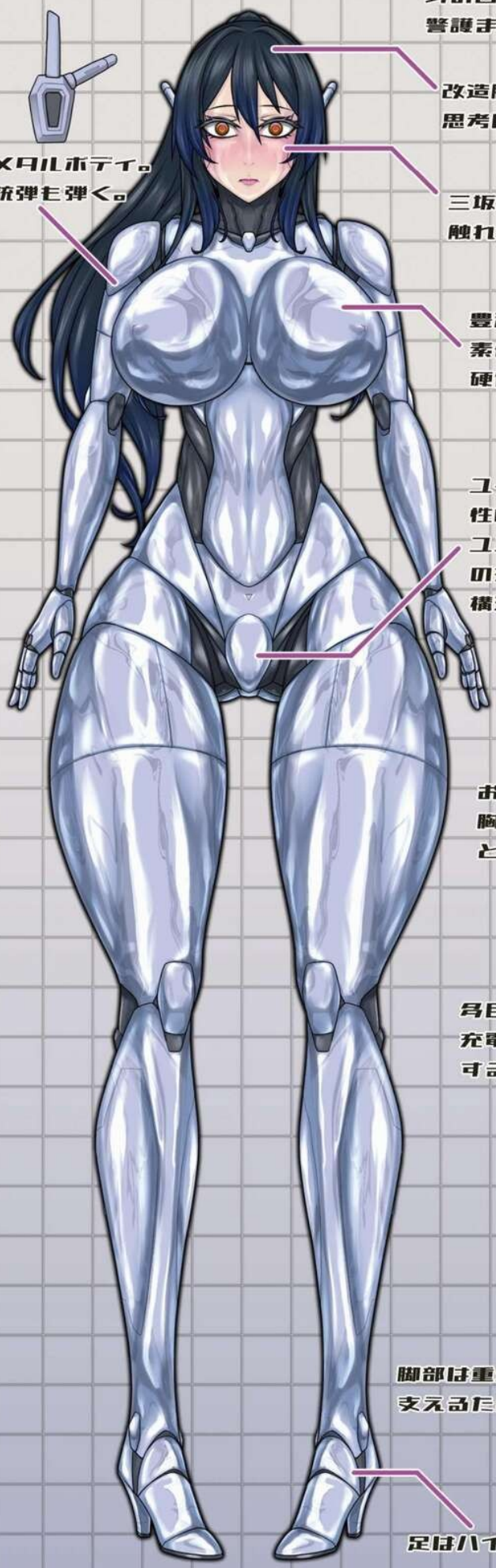
改造脳。
思考は制御されているが……。

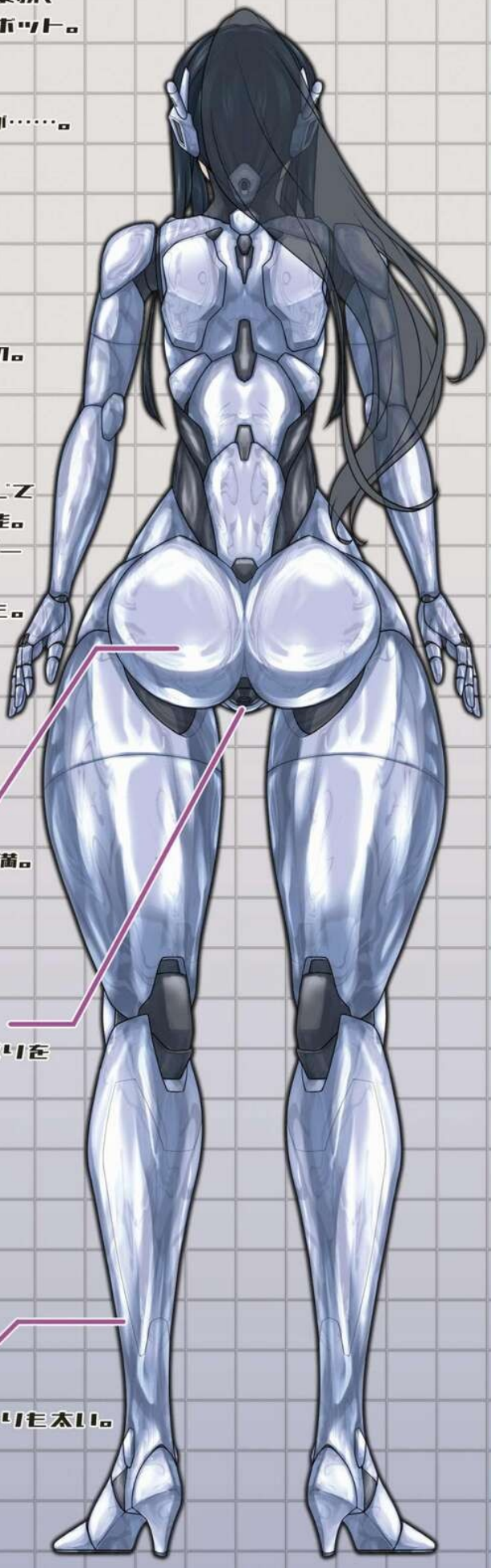
メタルボディ。
銃弾を弾く。

三坂涼花の顔。
触れるとやわらかい。

豊満な胸部。
素体の意向によるもの。
硬質。

ユーザーの求めに応じて
性的な行為を実行可能。
ユニットの他、ドクター
の独断により素体の
構造を活かした装備も。





お尻。
胸部とのバランスを
とるため こちらも豊満。

多目的端子ユニット。
充電やデータのやり取りを
するための端子。

脚部は重量のある上半身を
支えるため太く強靭。素体よりも太い。

足はハイヒール状。

監修：ロボイリス
イラスト担当：あつま32G

FRONT

REAR

機械化娘合同誌4 もくじ

作　者		掲載ページ
○Illustrations＆Comics		
紅矢（こーやん）		3
nezumi		4
ねもねこ		5
アンデ　カナタ		6
ブローサーワン		8
ヤマカガシB		14
○Novels		
桜のキモチ	かがりー	16
リボンノガクエン	KEBO	21
ふたりはサイバーキュア　第8話	Kyouma	30
博士と僕	rui76	37
機械化メイドと僕	刈野寧夢	46
ココロの重荷を捨てたくて	ロボイリス	54
あるレーシングヒューマロイドの少女の朝	ハカソシ	76
人造魔法少女　エスクティア	姫宮セリス	82
あとがき		87


ヤマカガシB



ヤマカガシB

桜のキモチ

かがりー

「ただいま」
サラリーマンの武藤司は、愛する妻がいる自宅に帰宅する。普段なら、妻の桜が出迎えてくれるはずだが……
（出迎えにこない……あっ、またか……）
一瞬、司は考えたがすぐ、出迎えてこない理由を導き出した。ため息をつきながら、靴を脱ぎ中へ入る。
あたりを見渡すと、キッチンにお皿を持ったまま固まったエプロン姿の桜を発見。
「おーい、桜……さ・く・ら！」
桜に呼びかけるが返事がない。優は桜に近づき、顔を見る
（やっぱりか……）
彼女の瞳には、生気を感じられない黒く沈んだ色をしていた。それを確認した優は、コードのようなものをコンセントにつないで持って行き、桜の首筋に刺した。すると、彼女の瞳に光が戻った。
「ただいま」
先ほどと同様に、彼女に帰宅したことを伝えた。
『あっ、お帰りなさい！ 司くん』
人工的な響きを持った声で、何事もなかったように笑顔でそう言った。
「また、充電切れになってるじゃないか」
『わっ、ホントだ！ ごめんね。また忘れてた！』
「絶対充電がなくなる前には通知が来るはずだろ」
『通知は来ているんだけどね。ついつい後回しにしてしまい……あはは。でもでも！ びっくりしたでしょ！』
「もうだいたい分かってるよ。はぁ、まったく……」
桜は、「あはは……」と反省しているのか分からない態度だった。

※

見て分かる通り、桜は人間ではない。いや、人間であったというべきか。彼女はサイボーグ化手術を行い、体を機械に変えていた。理由は彼女曰く、「今回の誕生日プレゼントは機械になった私！」だそうだ。そんな彼女を俺は愛している。
その後、桜の作った夕食を食べたあと自室にいると、コンコンと扉をノックし、桜が部屋に入ってきた。桜の手には何やらタブレットのようなものを持っていた。「どうしたんだ？」と質問すると、桜から驚きの言葉を発した。
『司くん、私機械になったからね～ 司くんに操られてみたいんだ！』
桜は頬を赤らめながら言った。
「操られてみたいって、どういうことだ？」
司は桜の言葉に驚いた。桜はタブレットを優に渡し、『これを見て』と言った。タブレットには、桜の体の各部分の機能や設定が表示されていた。優はそれを見て、目を疑った。
「これは……まさか……」
『そうなの。桜の体は、司くんの好きなようにカスタマイズできるの。感度や反応や声や動き、人格だって……全部司くんの思いのままだよ』
ゴクリとつばを飲む優。

『この前、桜の改造を担当してもらってた人に聞いたんだ～。男の人って一度はロボットを操るのを夢見るって。今の桜はロボットだし、これで優くんの夢も叶うでしょ！』

「お前さ……俺もう子供じゃないよ……」

『でもでも！　一度はあるんじゃない？　なんかこう、進めー！　って自分の意のままにロボットを動かすの』

確かに男ならロボットアニメなどで操縦する主人公に憧れを持つことはおかしいことではない。

『桜もどんな感じか体験してみたいの！　小さい頃はお人形遊びとかよくやってて、お人形さんの気持ちってどんなのだろうって！』

「それとこれとは……」

『それに！　司くんになら……その……えっちなことだって……されたいし……』

上目遣いで司を見つめる桜。数分間の沈黙。

（そんな顔で見つめるなよ……可愛すぎるだろ……!!　でも……）

「ダメなものはダメ！　ほら！　充電スタンドに戻りなさい！」

『むむぅ～　司くんのいくじなし！』

桜は頬をふくらませながら、部屋を後にした。

「まったくもう……おれの気持ちもわからずに……」

桜にいくじなしと言われたことに傷つきながら、目を閉じた。

※

次の日、いつものように会社から帰宅した司。

部屋には手を前に揃え、素っ裸の桜がはずかしげもなく立っていた。

「どういうことだ……!?」

あまりのことに頭が追いつかない。

テーブルになりやら手紙と昨日のタブレットが置かれていた。

手紙にはこう書かれていた。

司くんへ

昨日は突然あんなことといってごめんね。

司くんはいつも私のことを思ってくれているから、遠慮してくれたの桜分かってるよ。

でも、桜も知ってる。あのとき、司くん実はすごく興奮してたでしょ。

ううん、その時だけじゃなくて桜が機械になってから桜を見るたびにいつもより鼓動が早くなってる。

桜も機械になって興奮してくれてる司くんにドキドキが止まらなくて、わざと充電切れになったりして、めちゃくちゃにされたいと思ってる。

けど、司くんは優しいから我慢してくれてる。

だから、桜の気持ちが本気だってことを伝えるために、昨日のタブレットを使って自分で自分に命令を与えてみることにしたの！

今日だけは、自我もなく司くんのためだけに動くロボットになりなさいって。

きちんと明日になったら元通りになってるから、今日はロボットの桜を思う存分使ってね。もちろんアッチのお世話も……！

「桜……」

桜の目の前に立ち、呼びかけると……

『スリープモード解除、オカエリ・サナイマセ・司サマ』

桜は感情の一切感じられないエコーのかかった声で返事をした。

「桜……だよな？」

『ハイ・私ハ・桜デス』
「今のお前は何なんだ……」
『ハイ・現在・ノ・私ハ・素体人格機能ガ・オフ・デフォルトノ・対話システム・ノミ・作動中・デス』
「本当にロボットになってるんだな……」
司は固唾を呑む。心臓の鼓動が次第に高まり、下の方が沸騰するように熱くなる。司のアソコの部分は、ズボンの上からググッっと大きくなり、テントが張られていた。
桜は首を下に傾けて、その部分をアイカメラでキュイキュイと注視し、
『ピピッ、司サマ・ノ・性的興奮ヲ・検知・シマシタ』
「なっ……！」
自分の状態を解析されてまたもやドキッとする司。
『ナンナリト・ゴ命令・クダサイ』
桜は、首を戻し司の方を見つめる。その瞳には感情はなかったが、「私を使って！」という思いが感じられたような気がした。
「ハァ……ハァ……」
司の息づかいが荒くなる。喉が渇く。
『ナンナリト・ゴ命令・クダサイ……ナンナリト・ゴ命令・クダサイ……』
プツン……と司の心の中で何かが切れた。
『ナンナリト……』
理性を抑えきれず、バタン！　っと桜を床に押し倒す司。勢い良く床に倒れたが、桜は一切痛そうな素振りを見せない。
「もう……もう我慢できない……!!　そこまで言うなら……望み通り思う存分めちゃくちゃにしてやる……！」
司は顔を真っ赤にして、桜の口元にキスをした。荒波のように深いディープキス。
通常であれば、苦しくて窒息してしまいような強いキスだが、桜は表情を変えない。
「ぷはっ……高まってきたぜ……セックスだセックスするぞ……女性器準備しろ」
『カシコマリマシタ、人工女性器開放、潤滑油放出』
ウィーンウィーンと、桜の下腹部からシャッターが開かれる。また、内部からもモーターのような駆動音が鳴る。
司もベルトを緩め、着ていたズボン・パンツを地に落とす。すると、シャチホコのようにそそりったブツが顕現した。パンツは透明な液体でべっとりと染みていた。
『人工女性器ノ準備ガ完了シマシタ、イツデモ挿入可能デ……』
報告が言い切る前に、司はそのブツを桜に挿れる。
『ピッ、男性器ノ挿入ヲ検知……最適ナサイズニ調整……』
パンッッッ！　パンッッッ！
腰の一振り一振りが太鼓をたたくように桜の中で強く響く。乱暴に、乱雑に。そのため、それまで一切感情のなかった桜もブルっと不自然に体を震わせたり、アッッッと発していた。
「桜……!!　桜……!!」
『ハイ・私ハ・桜・デス・ハイ・私ハ・桜デ……』
「で、出るッッッッ!!」
ドピュッッッ!!　ビュルルルッッッッ!!
『し……射精・ヲ・検知』
桜の体がビクビクと震える。


ERROR
ERROR
ERROR
ERROR
ERROR
ERROR

「ハァ……ハァ……」
なかなか呼吸が整わない司。
桜はウィーンと体を起こし立ち上がると、
『ゴ利用・アリガトウ・ゴザイマ・シタ』
さっきの手を前に置いた姿勢に戻った。
「おい……待て……まさか……こんなことしといて一回で終わると思ってないだろうな……」
『ハイ、私ハ・司サマ・ノ・所有物・デス。何度デモ・ゴ使用・可能・デス』
まだまだ使ってねと言わんばかりの桜。
「フッ、そうこないとな……」
司の闘争心に火がつく。

「今度は四肢の接続を切れ。オナホとして使ってやる」
『カシコマリ・マシタ。四肢・ノ・接続ヲ・解除』
彼女の体からプラモデルのようにガコン！っと両手、両足が外れ、地面に落ちる。
両足が外れたため、その勢いで胴体も地面に落ちる。
『ピッ、エラー・左腕ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・右腕ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・左腕ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・左脚部ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・右脚部ガ・接続・サレテ・イマセン、ビビッ！　自律行動・不可・デス。コノ・状態デハ・一部命令ガ・遂行・デキマ・セン』
四肢を外され、身動きできないとアラーム音がなる。
『ビー！　各パーツヲ接続シ、再起動シテクダサイ、ビー！　各パーツヲ接続シ、再起動シテクダサイ』
「うるさい。今のお前はロボット以下のオナホだ。俺を気持ちよくさせる道具でしかないんだよ。だから、お前も俺を気持ちよくさせることだけ考えればいいんだよ」
『ビー！　各パーツヲ……ピッ、カシコマリ・マシタ。アラート停止、自己認識ヲ・オナホ・ニ・変更。司サマノ・男性器ノ・分析ヲ・オコナイ・マス』
その後も二人は何度も何度も性行為に励んだ。
「もう限界だ……出るもんも出ねぇ……」
フラフラになりながら、ベッドに入る司。司にはもう活動するエネルギーは残ってない。
「桜、こっちにきな。今日は俺の所有物だからな。一緒にベッドに入って、そのまま抱き枕になれ」
『カシコマリマシタ』
スッと司の隣の中に入る桜。そして、
『ワタシハ抱き枕ニナリマス』
そう言うと、桜の瞳には光がなくなり、お人形さんのように微動だにしなくなった。
「ほんと可愛いな……いい夢見ろ……よ……」
チュッと頬にキスをすると、気を失うように司はそのまま深い眠りに入った。

※

『ありがとう、司くん。私も大好きだよ。チュッ♡』

リボンノガクエン

KEBO

思えば、あの時からそれが始まったのだと思います。

学園のケイエイがヤバいという噂はずっと流れていて、もしかしたら自分たちの下の代はもう募集停止するかもしれない、と言われていました。ですがある日、理事長室の話を盗み聞きしていた子たちから、その話を聞きました。

「何とか言う会社が、学園を丸ごと買い取ったらしい。学校の体制そのものは変わらないから大丈夫」

それを聞いたわたしたちは、どうやら学園が存続できるようだとひとまず安心しました。わたしたちの学園は、全寮制の小さな学園です。何の行事をするにしても、全学年合わせたとしても少し寂しい人数です。それが減ったとしたら、たとえ卒業できたとしても思い出が寂しいものになってしまいます。

その話を聞いてから、一週間ぐらい後だったと思います。

保健室に、助手の方が来られました。ランさんというその方は、体のほとんどを機械の義体にしています。話によれば、難病で、そうする他なかったそうで、その義体を作っているのが、学園を買い取ったという会社だそうでした。つまりはその会社のコネで来られた方なのですが、明るい性格なこともあり、わたしたち生徒とはすぐに打ち解けました。

しばらくして、学園の裏山で工事が始まりました。裏山は、わたしたちが放課後に散策したり、遊んだりできる場所だったので、少し寂しく思いましたが、おそらくその会社はその土地が欲しかったのだろうとわたしたちは思いました。学園を存続させるために、理事長先生がそういう取引をしたのだろうと。やがてそこには、綺麗な建物が立ちました。聞いたところその会社の研究所ということでした。自然が残る裏山の景色に配慮しているのか、それは綺麗な建物で、わたしたちは少しホッとしました。

そうしてしばらくしたころ、こんどはアイという転入生がやってきました。彼女は、保健室のランさんと同じで、体のほとんどを機械の義体にしていました。機械化手術のあと、その会社から学園を紹介されたようです。ああ、なるほどな、と思いました。わたしたちはランさんとうまくやっていたこともあり、彼女の存在を普通に受け入れることができましたが、普通の学校ならば、おそらくいじめられたりするのではないでしょうか。

彼女は、わたしたちと同じように勉強し（体育だけは別メニューでしたが）、行事の時は、むしろその体の特性を生かしてとても頼りになりました。

ある日、気分が悪かったので保健室に行くと、養護のマミ先生はお休みで、ランさんが面倒を見てくれました。その時ランさんから聞いた話というか、ランさんは、わたしの面倒を見ながら、機械の身体（彼女は、義体と言わず身体、と言っていました）であることの素晴らしさを、熱く語っていました。

確かに、わたしを一人で軽々と抱き上げてベッドに寝かせてくれたりと、仕事をするにも便利ですし、風邪もひかない、月のモノもない、あと彼女は補助ストレージと補助電子頭脳を内蔵しているそうで、補助ストレージに記録したデータをすぐに取り出したり、補助電子頭脳をコンピューターやネットワークに直接接続することができるので、いちいち調べたりする必要もない、と言っていました。そしてさらに言うには、彼女の場合は病気で、あと1年も生きられないところだったのを機械化で救われたと言っていましたが、自分から希望すればそういった、病気や事故ではなくても身体を機械化することができるし、一部だけ機械化することもできると。生活に支障はなく、彼女自身はするなら全身フル機械化を勧める、と言っていました。

そんな話を聞いた後、しばらくしてマミ先生がお休みから戻ってきました。ぱっと見はわからなかったのですが、なんと彼女は、全身を機械化していて、自分からそれをみんなに公表しました。さらに驚いたことには、彼女は特に健

康等に問題もなかったのですが、自分の仕事の能力を上げるために、自分の身体を「アップデート」したのだと言っていました。

クラスの中で、「機械化」という話題が目立つようになったと思うのも、その頃からです。アイさんは当事者ということで、よくその話に巻き込まれていましたが、彼女もまた、機械化した身体の良さについて熱く語っていました。

そして、ついにその時が来ました。

ある日、教室に行くと、みんながざわついています。そこに、彼女がいました。

ここ数日休んでいたナツミが、教室に戻ってきました。機械の身体になって。

「アタシ毎月重いし、マミ先生に相談したら、こういう方法もあるよって勧められてさ。思い切って機械化しちゃった」

満面の笑みで彼女はそう言いました。

「もう毎月気にしなくてもいいし、風邪もひかないし、補助電子頭脳も補助ストレージも付けたから勉強もそんなに頑張らなくていいし、なによりダイエット気にしなくていいからもう、好きなだけ食べられるし」

「え、機械化したら何も食べないと思ってた」一人の子が疑問を口にします。

「ぜんぜん食べるし。食べたものは、身体の中で処理されて、そのエネルギーを電力に変換して、バッテリーに蓄えられるから、直接充電もできるんだけど、ごはん食べて充電とかも出来ちゃうんだ」

わたしの周りの数人はそんな彼女の言葉に引いていましたが、その反面そうなんだー、すごい、いいなぁ、わたしもしようかなぁ、などという声も聞こえていました。

それからです。時々、数日間休んだかと思うと機械化している子が出始めました。それはわたしたちの学年だけではなく、上級生たちも同じでした。その会社は、学園の生徒や関係者に限っては特別に、申請するだけで特に費用もかかることなく機械化手術を行ってくれるのだということでした（オプションを付けるのには自己負担が発生するようですが）。

機械化した彼女たちは体育には参加しませんが、やはり「補助ストレージ」や「補助電子頭脳」を使うことができるので、成績もどんどん良くなっていきました。先生方もそれに考慮してか、体育については機械化した子たちだけの授業を行うことになりました。

機械化した子たちは、制服を着ている限り一見そうとはわかりませんが、時折目が光ったり、服の下に金属のような部分があったりしますし、その「補助電子頭脳」などを外部と接続するためのソケットが、人によりますが耳の後ろや首筋、また人によっては胸元など、どこかしらについています。とはいえ肌や髪も、どういうものでできているのかはわかりませんが、触ってみても義体とはわからないぐらいのものです。でも、同じクラスの子はともかく他のクラスの子になるといつの間にか機械化している子などがいて、思ったより多くの子が機械化しているような気がしました。

そんな日が続いていたある日、担任のミチコ先生がお休みされました。わたしは、なんとなくそんな予感がしましたが、先生は復帰されると、機械の身体になっていました。

「機械化した子が増えて、彼女たちの気持ちわからないし」と先生は以前から言っていました。悩んだ末、マミ先生と同じようにその会社と学園との特別契約条項を使って機械化したそうです。確かにここのところなんとなく表情が暗く何か悩んでいるのかなぁとは思っていました。

「補助電子頭脳とストレージがちょっとお金かかったけど。でもこんなに楽になるんなら、もっと早くすればなって。何より、老化しなくていいのは素晴らしいわ。まあ、お金かければ若返りもできるみたいだけど」

先生は満面の笑顔で話しました。そして最後にこう付け加えました。

「機械化を考えている人は、早めにした方がいいですよ。なんたって、皆さんは今が花なんですから。その若さをずっと保てるなんて、素晴らしいことじゃ

ない」

ミチコ先生の他にも、数人の先生方が機械化手術を受けられたようでした。

そして、衝撃的なことが起こったのはその翌週のことでした。

その日は、朝、講堂で全学園集会がありました。わたしたちが、機械化した子たちも含めて講堂の中に整列していると、進行役の、すでに機械化されている教務主任の先生が、

「今から理事長先生のお話があります」と仰いました。

壇上に、わたしたちと同じ制服を着てはいますが、見たことのない、誰なのかわからない女の子が上がります。そしてその子が話し始めました。

「みなさん、おはようございます。私が誰だかわかりますか？」

みんながざわつきます。そのざわつきの中で、彼女は続けました。

「理事長です。皆さん驚いたでしょう」

その子は自分が理事長だと言いました。わたしもですが、何人もの子が思わずえっ！と大きな声を上げてしまいました。どう見ても彼女は、わたしたちの中に混じっていてもおかしくない年恰好にしか見えません。

「私は先週、前は裏山だったところに建てられた、学園のオーナーであるメタリボン社の施設で、全身の機械化手術を受けました。健康上の理由などもありまして、脳以外のほとんどの部分を機械に置き換えています。自分の若い時の姿を参考にパーツを製作してもらって、見てのとおり、皆さんと変わらない年恰好に見えるようになりました」

理事長先生、は、くるりと一回りして見せます。確かに、どう見ても学園の生徒にしか見えません。

「この格好をしたのは約半世紀ぶりです、うふふ……・機械化は、健康と若さを保つだけでなく、望むものならば自分のなりたい姿になることもできるのですよ。まだ機械化していない皆さんも、学園とメタリボン社との契約で、なんら経済的な負担もなく機械化手術を受けることができますから、希望する人は遠慮なく申し出てください。今機械化を考えていない人も、将来の選択肢の一つとして、考えてみるといいと思いますよ」

言われてみれば、理事長先生は卒業生でしたし、その微笑みには、確かに理事長先生の面影がありました。ですが、面影があったとはいえ、わたしはその微笑みに何かひんやりとしたものを感じました。

それから、機械化された先生方は、例外なくわたしたちにも機械化を勧めるようになりました。確かに、話を聞いているといいことずくめなように聞こえます。機械化した子たちも、特に彼女たちだけで固まるとかはなく、機械化する前と同じく、ごくごく普通にわたしたちに混じって過ごしているので、一見何も変わらないように思えましたが、わたしは逆に違和感や居心地の悪さを感じるようになっていきました。

日を追うごとに、だんだんと機械化に興味を持つ子が増えてきた感じを受けるようになりました。きついダイエットなどしなくても体形は保たれるし、視力が落ちることなどもありません。充電やメンテナンスを怠らなければ、体調が悪いこともなく、もし体調が悪い場合もどこが悪いのかすぐにわかるなどの健康上のメリットだけでなく、補助電子頭脳や補助ストレージを利用することによって、記憶したことを忘れることがなく、すぐに活用できるというのは大きな魅力でした。デメリットというデメリットは、確かにないように思えます。

そんな時、わたしたち、その違和感を感じていたなかの一人、マキが、夜中にこっそりわたしの部屋を訪ねてきました。もう消灯時間を過ぎていたので驚きましたが、彼女は何かとてもおびえているようでした。

「ユウコの様子がおかしい」彼女は過呼吸気味にそう言いました。

「今日、彼女気分悪いって言うから保健室連れて行ったのよ。それで、さっき帰ってきたみたいなんだけど」

ユウコというのは、やはり同じように違和感を感じ、かつ一番抵抗を感じていた子です。マキは、ユウコとやり取りしたメッセージの画面を見せてくれま

した。

そこには、こう書かれていました。

”機械化することにした。改造手術の間休みます”

「おかしくない？　ユウコに限って自分から機械化とかするはずないじゃん！」

彼女はもう泣きそうな顔でそう言います。夜も遅かったので、彼女をなだめて部屋に帰しましたが、わたしも大きな違和感を感じていました。

メッセージの画面にあったとおり、翌日ユウコは授業を休んでいました。ユウコの姿が見えないことについて、クラスメイト達がお喋りしていました。

「ユウコもついに機械化か」「アタシもそろそろ機械化しちゃおうかな」「機械化したらさ、ダイエットしないでスタイル良くできるかな」

そういった、機械化に興味のある子たちに混じって、機械化済みの子たちも喋っています。

「いいよ、機械化」「毎日スッキリ起きられるの最高だよ」「そうだよ、〇〇も機械化しちゃおうよ」

わたしは、違和感の正体がわかったような気がしました。機械化した子や先生方はみんな一様に機械化について、ほとんど絶賛というか、いいことを言うばかりで、悪いこと、思ったのと違ったことなどは本当に一切言わないのです。わたしはその、悪い話がないことに、それこそまるで宗教、それもカルト的な宗教のようなある種の不気味さを感じていたのです。それは、もしかして……

三日後、ユウコが出てきました。制服を着ている限り、眼鏡をやめた以外は一見、変わったところはないように見えましたが、やはり彼女はこう言いました。

「機械化、してみたら意外といいもんだよ。あんなに不安がることなかったわ。むしろ機械化してよかった感じ」

微笑むユウコの目の奥で、何かが回っています。変わったところが無いように見えるとはいえ、眼鏡をはずした彼女は、おそらくもう眼鏡の必要がないのでしょう。目の奥で回っているのは、カメラか何かのピントを合わせているのだと思いました。

そして、彼女もまた、「機械化したことの素晴らしさ」について、熱く語っていました。が、その熱さの中に、わたしはどこか冷たいものを感じていました。

それからも、何日かおきに機械化した子が増えていきました。仲良しグループの中の一人が機械化すると、そのグループがいつの間にか全員機械化しているような感じで、気が付くと、クラスの半分以上がもう機械化していました。彼女たちの話題も、機械化していることが前提になり、それはまるで、ついこの間までしていた様々な「オトナな」話題について行けるか行けないか、「スゝんで」いるかいないか、という話題に成り代わったようにも思え、そしてわたしたちはその、「オクレテいる」方でいるかのような感じを受けるようになりました。

そんなある日のこと、先生から、学年ごとに機械化済みの者と、未機械化の者（先生が、そう言われました）と別々の特別授業がある旨のお話がありました。「機械化済み」の子達は整然と並んで、講堂に行きます。そしてわたしたち「未機械化」の面々は、視聴覚室に集められました。改めて驚いたことに、そこにいたのは、わたしを含めて十人に満たない人数だけでした。クラスの七割くらいのみんなが、すでに機械化していたのです。

視聴覚室の明かりが消され、動画が始まりました。何も説明がなかったのですが、どうやら、社会貢献やボランティアについての動画でした。動画を見ているうちに、わたしの意識の中になにか願望のようなものが浮かんできました。ボランティア活動や奉仕活動で社会貢献するのは素晴らしい、もっといろいろな方の役に立ちたい、役に立つ自分になりたい、そのために頑張って勉強をして、いろいろなことを覚えて……

身体を機械化すれば、さらにもっといろいろな事が出来て、困った人の役に

立つことができる。身体を機械化して、もっともっと人の役に立てるようになりたい、奉仕したい、機械化したい……

わたしはそこで、ふと我に返りました。機械化したいなんて、なんてことを考えていたのでしょう！　そう考えている時は、何かとてもいいことを考えているような気分でした。恐る恐る、周りを見回すと、みんななにかぼうっとしているような、うっとりとしたような顔をしています。つい今さっきまで、わたしも同じような顔をしていたのかもしれません。隣の席に座ったマキも、同じような表情で、画面を見ています。

（この動画、見ちゃダメだ！）わたしは咄嗟にそう思い、マキをつつきました。しかし、マキは反応せず、表情を変えずに画面を見ています。得体のしれない恐ろしさを感じたわたしは、さらに強くマキをつつきました。すると、マキの顔に生気というか、表情が戻ったように見えました。びっくりしたような顔をしてこちらを見ているマキに、わたしは小声で言いました。

「この動画、やばい」

マキは何度か瞬きをしたあと、わたしの言っていることを理解したようです。わたしとマキはその後動画が終わるまで、ずっと下を見ていました。しかし、何が恐ろしいって、その動画は、音声が聞こえてくるだけでも、とても見たくなってくるのです。マキとわたしは、時々お互いにつつきあいながら、なんとか動画が終わるのを待ちました。

やがて動画が終わり、部屋が明るくなりました。先生が何か紙を配ります。紙は三枚ありました。一枚は、今日の動画の感想を書く紙でしたが、他の二枚は……

他の二枚は、機械化手術の申請書と、機械化についての承諾書でした。先生は、こう仰りました。

「今配ったのは、感想用紙と、参考までに機械化手術の申請書と承諾書です。感想は今週中くらいに提出してください。機械化の紙二枚は、機械化する場合に提出しなければならない紙ですから、別に今出せとかそういうものではないのですが、手術するときはこんな紙を書くんだと覚えておいてくださいね」

はーい、と何人かが返事をします。周りを見れば、何人かはすでに、その申請書に何かを記入し始めています。わたしは、自分が震えているのを感じました。マキの顔を見ると、彼女も怯えた表情をしていました。

そう、おそらくこの動画は、わたしたちに機械化を受け入れさせる、機械化手術を受けたくなるように洗脳する動画だったのです！　そして実際、何人かの子たちは、そのままその用紙を先生に提出し、教室には戻らず、先生に連れられて行きました。

今さらのようにわたしは気付きました。誰か、わたしたち、学園全体を機械化したい人がいるのです。すでに機械化した子たちも、本当は自分から望んで機械化したわけではなく、自分たちも気づかないうちに、だんだん洗脳されて自分から望んだように思わされて機械化させられているのに違いありません。そして、その、わたしたちを機械化したい人とは……

放課後部屋に戻った後、わたしとマキは、今さらのように調べ始めました。調べるのはもちろん、この学園を買い取った、メタリボンという会社です。事業内容の中には、義体パーツの製作販売や義体化のトータルマネージメントの他、事務から軽作業、そして特殊接客用（！）まで様々な人型ロボット、この会社では、リボノイドと言っているようですが、その製造販売などと書かれています。

首から下が、銀色の金属のような骨格のようなものに、カバーを付けたようなその「リボノイド」の写真がたくさん載っているそのサイトを見ていると、マキが突然ひっ！　と、悲鳴のような声を上げました。

マキが画面の一部を指さします。その、事業紹介の写真に何体かが写っている「特殊接客用リボノイド」の、「セクサロイドタイプ」という、おそらくいかがわしい用途の接客ロボットなのでしょうが、その写真の中の一体が、見覚え

のある顔をしていました。
「これ、ルナさんだよね……？」恐る恐る、マキがそれを口にします。セクシーというよりは卑猥な格好をしたその「リボノイド」はどう見ても、上級生のルナさんの姿をしていました。
「も、モデルになったのかも……」わたしは自分に言い聞かせるようにそうつぶやきましたが、マキもわたしも、それがルナさん本人だという確信めいたものを感じていました。機械化したのかどうかまではわかりませんでしたが、この狭い学園の中で、確かに最近彼女とは顔を合わせていません。だとすると……
「ねえ、ユウコに聞いてみない？」マキが言います。
「何を？」
「保健室で何があったのか」
マキの言いたいことはわかりました。ユウコの様子がおかしくなったのは保健室に行った後です。だとすれば、保健室で何かがあったはずです。しかし、さすがに保健室に直接それを探りに行くのは気が引けました。
「もしもしユウコ、今フミの部屋でお茶してるんだけど、よかったら来ない？」
マキが電話でユウコを呼び出します。しばらくして、ユウコが部屋に来ました。三人でテーブルを囲み、どこか冷たい感じの他愛もないおしゃべりをしつつ、マキがユウコに話を振りました。
「ねえ、ユウコってさ、何で突然手術受けようと思ったの？」
「それは」ユウコが答えます。
「機械化したら視力悪いのも改善されるし、体調もあまり気にしなくてよくなるし、とにかくデメリットがいろいろ解消されて、いいことずくめだから」
その手の話は、あちらこちらでさんざん聞いていました。このまま喋らせておくと、今の若い姿のままでいられる、ダイエットとかも気にしなくていい、機械化最高と続くパターンです。それをわかっているからか、マキは彼女の話を遮りました。
「ねえ、あの日保健室で何があったの？　ユウコ、あんなに機械化した子のことキモイとか言ってたのに、なんで急に機械化することにしたの？　保健室で何かされたの？」
「保健室……？」ユウコは少し考えている表情をしていましたが、不意にその表情が、何か変わりました。言うならば、元のユウコに戻ったような！
そしてその顔が、今まで微笑んでいた顔から、何かを思い出して思いつめたような顔に急激に変わります。
「そう、マキに連れってってもらって、先生が、アタシをベッドに寝かせたのね。そしたらランさんが……」
そう言いかけたところで、またユウコの表情が変わった、というか突然無表情になり、ユウコの言葉が止まりました。
「ユウコ？」
わたしたちの呼びかけにも応じず、口を半開きにしたまま、ユウコは止まっています。
（ピピ！）どこかで微かにその音が聞こえたような気がしました。すると、ユウコの目が、パソコンのアクセスランプのようにすごいスピードで明滅しはじめました。目が光るだけでも不気味なのに、それが付いたり消えたりしている様は、友達とはいえ恐ろしいものがありました。
しばらくするとそれが落ち着いたのか、ユウコはわたしたちの方を見て、最初にこの部屋に来た時のように微笑みました。
「機械化、いいよ。機械化するなら若いうち。機械化はこわくない」
ユウコは、どこか抑揚のない感じの話し方で、さっきまでの会話とは繋がらない、機械化についての称賛を語り始めました。
「もういいよユウコ……ゆ…」彼女の顔を見て、そう言いかけたマキが、まるで力が抜けたように座り込みます。見るとユウコの目が、ぼんやりと薄い緑色

に光っています。そして、ユウコの声は、まるで例の動画のように、その声をずっと聴いていたくなるような気持にさせ、まるで頭の中に直接響いてくるように感じさせるのです。

「機械化は最高。機械化は素晴らしい」

（きかい、かは……やばい……）

「やめ、て！」

わたしはその目を見ないように。ユウコを突き飛ばしました。マキが荒い息のまま床のじゅうたんに崩れ落ちます。そして、突き飛ばしたときにテーブルにでもひっかけたのか、ユウコの腕には切り傷のような切り口が……その切り口の中に、何か金属のような銀色のものが覗いています。ユウコは、そのまま表情一つ変えずに立ち上がると部屋を出て行きました。

マキを助け起こすと、彼女はこう言いました。

「アタシ、この学園出る。アタシ、機械なんかになりたくない！　もうやだよこんなの。フミも一緒に逃げよう」

わたしも、同じ気持ちでした。友達、いや友達だと思っていた子は、すでに友達ではなく、人間ですらなく、そして、わたしたちを洗脳して自分の仲間に、つまりは機械化させようとしたのです。

わたしたちは、みんなが寝静まった夜の十二時に落ちあって、学園を出る約束をしました。マキは、その準備のために自分の部屋に一旦戻って行きました。しかし……

消灯時間を過ぎ、学園を出る準備を整えて、あとはマキと合わせるだけだと思っていたそう、十一時半を過ぎたころでしょうか。何やら部屋の外が少し騒がしい感じがします。恐る恐る、ドアののぞき穴から廊下を見ると、その光景が目に入ってきました。

機械化した子達が、目を光らせてまるでゾンビのように廊下を歩いています。そして、わたしたちのような「未機械化」の子達を部屋から連れ出しては、どこか、たぶん例の施設へ連れて行こうとしているのです。

彼女たちは、一つ一つドアを開けながら、わたしの部屋に近づいてきます。わたしは、ドアの前に部屋の中にあるありったけのものを積み上げました。そして程なく、ドアがノックされました。

「フミ、開けて」その声は、今日一緒に動画を見たクラスメイトの声でした。彼女は、教室に戻った時にはいなかった一人です。

「次はフミの番だよ」

さらに何人かがそう呼び掛けてきます。そして……

「フミ」その声は、マキでした。

「ドアを開けて」

わたしは、積んだ物の間に頭を突っ込んで、のぞき穴を見ました。そこに見えたのは、マキであって、マキではないものでした……

マキの顔をした頭の下に、金属製のような骨組みと、その上に何かカバーを付けたような身体の……例のサイトの写真と同じ「リボノイド」が、ドアの前に立っています。そしてその目は、やはりさっきのユウコと同じように薄い緑色に光っていました。この、たった数時間の間に、マキは、機械にされてしまったというのでしょうか。

「フミ、開けて」ガチャガチャと、鍵をいじる音がします。ものが積んであるとはいえ、ロボットの力の前にはどかされるのも時間の問題でしょう。きっとわたしも機械にされてしまう……機械になるなんてイヤ……とりあえずここで送信します。だれかTあ

「メールの文章、ここで途切れていたんですけど、この、フミさんって方に会わせて頂けませんか？」

応接室に通されたアスカは、理事長と名乗る、その少女のような、全身義体


フミ
開けて
次はフミの番だよ
フミ…
ドアを開けて

の女性にそう言った。ネットニュースに記事を書いている彼女は、フミ、と名乗るその女性からのメールを受け取り、その学園に直接取材を申し込んだのだ。

「そちらの親会社、になるんでしょうかね、メタリボン社。こちらの会社、そちらの学園を買収してから、その、セクサロイドタイプ、いわゆる性産業用のロボットですが、そちらの出荷数が増えてるんですよね。製品の評判もまるで本物の女性と見まごうくらいの出来と大変評判が良いようなんですが、一方ではそもそもどこかから本物の女性を素体にしたサイボーグなのではないかという噂もあるようで」

「まあ」理事長が口に手を当てて言った。

「それで、ウチの子達がそうなのではないかと？」

そう答えたところで、ドアがノックされる。

「どうぞ」理事長が促すと、ドアが開き、彼女が入って来た。

「あなたは」彼女を凝視するアスカ。

「メールをお送りしたフミです」一見普通の女性に見える彼女は、抑揚のない声であとを続けた。

「私は、自分から希望して改造手術を受け、全身を機械化しました。機械化することは、自分の可能性を広げる素晴らしい選択肢です。アスカさんも、ぜひ全身機械化されることをお勧めします」

「え、あのメール」言いかけて、アスカは気づいた。フミの目が、薄緑色に光っている。理事長や、一緒にいる他の女性たちも同じだった。

脇にいた二人の女性、いやリボノイドが、両側からアスカの腕を押さえる。それは、まるで人間女性とはかけ離れているような力の強さに感じられた。

「ちょっと……」彼女は、抵抗することすらできず、光るフミの目から目を離すこともできなかった。

（機械化は素晴らしい選択です。あなたも機械化して、その素晴らしさを発信するのです）

理事長の声が頭の中に直接響くように感じられる。

「きかい、か、」

アスカががくんと頭を垂れる。彼女は、そのままどこかへ運ばれて行った。

ふたりはサイバーキュア　第8話
サイバーキュア1号の秘密と三体目のサイバーキュア

Kyouma

「ありがとう、ボクだけじゃ重くて運べなかったよ！」

サイバーキュアのマスコットらしき謎生物に連れられて私は彼らの作戦拠点と思われる居場所に来た。

『拠点というよりかは乗り物ね……』

サイバーキュアの拠点というだけあってかサイバネテックでスタイリッシュな飛行船と言った感じだ。

「1号が連れ去られたから近くまで移動させたんだ！」

『移動させたってことは各地を転々としているってことかしら？』

「そうだよ！　そのブレスレットと同じ技術が使われているからソラを飛んでても気付かないと思うよ」

なるほど、ワールドエンドの総力をもってしてもサイバーキュアの居場所を掴めなかったのはこういう事だったのか。

私は一瞬感心したが思考を振り払った。

もう私はワールドエンドの戦闘員じゃない。

そもそも所属していた部隊も倒しちゃった上に基地も証拠隠滅の為ぶっ壊してしまったのだから。

少なくともサイバーキュア1号には私の正体は知られてないはず。

私は首を傾けて背負っている少女を見た。

あの戦いの後サイバーキュア1号は疲弊したのかそのまま気絶してしまったのだ。

このマスコットが言う様に今の彼女はワールドエンドによって身体を機械化されていた。

いや、思考や振る舞いこそただの女子高生であるがワールドエンドの技術によって身体だけでなく脳も改造されただろう。

敵対していたとは言え容赦なく女子高生を機械化するワールドエンドの外道っぷりは納得できないものだ。

「じゃあ1号をこのカプセルに入れてあげて！」

マスコットに言われるがままサイバーキュア1号を人一人が入れそうなカプセルへと入れる。

カプセルの中に緑色の液体が充填され首から下まで浸かる。

炭酸が弾ける音がするのと同時に彼女が着ていた制服が溶けていく。

『ちょっと、大丈夫なの？』

「ダイジョーブ、ダイジョーブ！」

カプセルの中の彼女の着ていた制服だけじゃなく下着すらも溶けきってし

まう。

『ちょっと、彼女学生なんでしょ、制服が溶けちゃったらマズイじゃない。それに家に帰してあげないと』

私自身サイボーグだから時計を見なくても身体に内蔵された機能によって時刻は分かる。

こんな時間に制服姿の学生が外に出てたら補導されてもおかしくないだろう。

「ダイジョーブ、1号はもう学生じゃないしここが1号のおうちだから！」

『……は？』

私は耳を疑うような話をこのマスコットから聞かされた。

サイバーキュアという存在は適性が無ければ変身出来ないらしく適性のある人物を探すのだけでも苦労したという。

刻一刻とワールドエンドが暗躍していく中でようやく見つけたのが彼女であったが良くも悪くも等身大の女子高生だった彼女は戦いに巻き込まれることを拒否したという。

私からしたら仕方のない話だろう。

ワールドエンドは闇に紛れて活動しているとは言えその組織力はかなりのものだ。

それを一人で相手するというのはただの女子高生には荷が重い話だ。

このマスコットはそれでもサイバーキュアになって戦ってほしいと頼み込んだというが結局は首を横に振るだけだった。

ならばとマスコットはその女子高生にこういったのだ。

「じゃあ君のクローンを作らせてほしいんだ」

自分じゃなく自分そっくりのクローンが戦うのならと女子高生は了承したという。

その女子高生の遺伝子情報を取得しこの作戦拠点で生み出させたクローン。

『それが彼女、サイバーキュア1号』

何ともおぞましい正体に私は言葉が出なかった。

彼女が女子高生の恰好で居るのも帰る家がないのも彼女がその敵性のあった女子高生のクローンだったからだろう。

実を言うと一つサイバーキュアに対して腑に落ちない点があった。

それは私が所属していた所とは別の部隊のワールドエンドの怪人がサイバーキュアを討ち取ったという話だ。

その怪人が言うにはサイバーキュアの息の根を止めてやったと周りに話していたという。

だが数日後その怪人は残骸と化して消滅した。

息の根を止めたはずのサイバーキュアに敗北する形で。

その怪人は一般人に対しても容赦のない卑劣漢である為とどめを刺さなかったとも思えない。

しかしサイバーキュアがその怪人を倒した情報は間違いじゃない。

「彼女はクローンとしては2代目に当たるかな？」

だけどサイバーキュア1号がクローンであるなら納得が行く。

クローンとして初代の彼女は確かに敗北して戦死したがその敗戦データを元に改善された2代目がその怪人を打ち破ったのだろう。

『じゃあ彼女は自分がクローンであることは知って』

『……知って……います』

振り向くとカプセルの中で目を覚ました彼女が悲しそうな表情でこちらを見ていた。

カプセルの中の液体が引いていく。

カプセルが開くと彼女はゆっくりとした足取りで出てくる。

『私が適正の有った子のクローンであることも私が2代目であることも……』

その姿はうら若き乙女の裸であるがその身体の下には血も肉も無く、代わりに金属フレームや機械部品が詰まってることだろう。

彼女は私を優しく抱き締めた。

『私はお姉さんのことをよく知りません。でもあの時助けに来てくれた……私にとってお姉さんは本物のヒーローみたいな存在です』

『……私は貴女が思っているほどヒーローとは呼べる人物じゃないわ』

決心した私は彼女に私がサイバーキュアになった経歴を話した。

少なくとも彼女の事情を知ってしまったのだからこちらが事情を話さないのは性に合わない。

彼女は最初は驚いた様子だったが思っていたよりもショックを受けていないようだ。

『じゃあお姉さんはワールドエンドの戦闘員からサイバーキュアになったという事ですか？』

『そういう事ね。失望しちゃったかしら？』

彼女は首を横に振った。

『私にとって助けに来てくれたことには変わらないですから。……お姉さんお願いがあります。私とこれからも戦ってください……』

私の気持ちは一つだ。

『決まっているでしょう。もう私はワールドエンドの戦闘員なんかじゃない、サイバーキュア2号よ。それに貴女をほっておくことなんて出来ないわ。』

『お姉さん、ううんお姉様……ありがとう』

『そうねぇ……ねえ貴女名前はあるかしら？』

『ううん、私には名前はないよ。しいて言うならサイバーキュア1号っていう

のが』

『じゃあ決めたわ。貴女の名前はブラン、フランス語で白って意味よ』

『ブラン……えへへ、良い名前だね。じゃあええと……』

『貴方がブランなら私はノワール、私のカラーが黒だからね。』

安直な名前の様な気もするが1号2号と呼ぶよりかはいいはずだ。

『じゃあノワールお姉様……これからよろしくお願いします』

『うふふ、よろしくねブラン。それにしても貴女はずっと一人で戦っていたのね……』

再生成されたセーラー服を着たブランを愛おしく撫でる。

「あ、ボクも居るよ！」

ぷんすかと怒っているマスコット。

コイツはブランとは違って信用ならない。

『戦うってアナタはブランを回収するかサイバーキュアのスカウトぐらいで直接戦ってないでしょ』

「まあボクはサイバーキュアのマスコットだからね。でも1号を探しに来てたまたま適性のある2号に会った訳で1号だけに戦わせようとは思ってないよ」

未だに私達のことを1号、2号と呼んでいることに少し苛立ちを感じながらもマスコットの話を聞く。

「サイバーキュアの適性って言うのは人間に限ったことじゃないんだよ。なにより1号が全身を機械化されても変身出来たからね」

確かにそれはそうだ。

私は脳は残っているサイボーグだけどブランはワールドエンドによって完全に機械化されている。

最初こそ最適化出来ていなかったからか十分に動けずに居たけど私が加勢に入ってからしばらくしたら戦闘員相手にも問題なく戦えるようになっていた。

「変身できるか不安だったけど1号が問題ないみたいだし大丈夫だよね。着いて来て二人とも」

私達はマスコットについて行く。

『これは……？』

私達が案内された部屋には一人の女性が目を閉じて整備台の上に横たわっていた。
金髪でグラマラスな体型で大人っぽい雰囲気の彼女は衣服を身に着けておらずその艶めかしい肌を晒している。

「彼女はサイバーキュア2号……の予定だったけど2号は既に居るから3号だよ」

『私と……同じ……クローン？』

おずおずと震えながらに聞くブラン。

「違うよ彼女は完全な機械、この世界だったらアンドロイドって呼ばれている存在さ。3号は同じサイバーキュアの一員だけど君たちの戦いのサポートを行う機体さ」

『サポート……？』

「サイバーキュアシステムの回復だったり君たちを守るバリアを張ったり、後ろから援護攻撃を行ったりするんだ」

『なるほどね中々に頼もしいみたいね。』

そうなってくると今後は3人でのコンビネーションが戦いの肝になると私は考えた。

「今日の戦いで必要な戦術データは集まったから起動させちゃうよ」

小さい身体で端末を操作するマスコット。
すると閉じていた女性、サイバーキュア3号の目が開くと、

『サイバーキュア3号機起動しました』

3号の口から感情に乏しい電子音声が発せられる。
そして起き上がって整備台から降りると私達の方へと向き直り真正面を見据えて直立姿勢を取った。

「じゃあメンバー登録するから変身させるよ」

『えっ、ちょっと待って』

私の制止を聞かずに変身させられる私達。
自分の意志ではない変身に戸惑いつつも3人の身体に電流が流れ光に包まれる。
たちまちサイバーキュアの姿となった私とブラン。
目の前の3号も変身に動揺する仕草を一切見せずに変身が完了する。
私達のコスチュームと似たデザインではあるがカラーリングは灰色で膝や手の甲には黄色のハートが付いている。
変身が完了した私達をしばし凝視した3号は続けて、

『サイバーキュア3号は1号及び2号をサイバーキュアのメンバーとして登録します』


認証中

淡々とした抑揚で登録が完了したことを発声する3号。
その様子はロボットと言った雰囲気だった。

『ええと……それじゃあよろしくね3号？　私はノワールよ』

私は3号に手を伸ばして握手を求めた。

『サイバーキュア3号は疑似人格を起動します。』

仮面の様な3号の表情に穏やかさが宿る。
そして握手を求める私の手を取る。

『ええ、よろしくお願いするわねノワール。まだ起動したばかりで至らないところもあるかもしれないけど』

2号じゃなくノワールと言う名で呼ぶ3号。
それに安心したのかブランも握手を求める。

『私は1号じゃなくてブランですよろしくね』

『うふふ、ブランもよろしくね。』

『……ねぇお姉様。3号にも名前を考えた方が良いと思うの』

『奇遇ね、私もそう思っていたわ。それじゃあ……スゥリィなんてどうかしら。フランス語で灰色って意味よ』

すると真顔になる3号。

『個体名スゥリィ登録完了。これより適応します』

再び表情が戻ると優しそうな表情で微笑む。

『スゥリィ……とても良い名前ね。ありがとうブラン、ノワール』

私達は手を取り合う。
サイバーキュアとしてこれから共に戦う仲間として。

博士と僕

rui76

部屋の中央に置かれた、高さが二メートル以上ありそうな円筒形の透明なカプセル。

そのカプセルから伸びるケーブルと接続された、物々しい外観のコンピュータ。

それを見た僕は、驚きのあまり言葉を失った。ただ、その一方で――

（メチャクチャ見てる……）

背中に博士の視線が突き刺さってくる。博士は多分、得意げな笑みを浮かべて、僕のことをじっと見ている。この装置を見た感想を正直に言ってくれ、この設備のことを何でも聞いてくれ――そんな思いを込めた眼差しで。

正直なところ、博士のそんな期待を裏切りたい、という気持ちもあった。僕がこれといったリアクションをしなかったら、博士はどんな反応をするだろう？　なんて悪戯心も多少ながら湧き起こっていた。

（でも、聞いてあげた方がいいんだろうな）

僕は、心の中に湧き起こったそんな思いを一旦しまって、カプセルに視線を向けながら、博士に尋ねた。

「博士、これは――」

「よくぞ聞いてくれた、少年！」

僕の言葉を遮って、博士が嬉々とした声を上げた。その声のあまりの大きさに驚いた僕は、思わず博士の方へと振り向いてしまった。

（うわあ、めっちゃ喜んでる……）

ファッション性皆無の眼鏡の奥にある瞳が、らんらんと輝いている。口角もキリッと上がっていて、まさしく得意満面って感じだ。

とはいえ、新たな発明品を僕に披露する度に見せる博士のその笑顔は、僕にとっては見慣れたものだ。そして僕は、その笑顔を見るたびに思ってしまう。

（もっとオシャレに気を遣って黙ってさえいれば、普通に美人なんだけどなあ）

僕よりも頭一つ分くらい高い身長に、均整の取れたスレンダーな体型。知性を感じさせる凛とした顔立ち。そういう、美人としての素地を、博士は明らかに備えている。でも、アイロンがけをしていない白いブラウスとダークグレーのスラックスに、所々に汚れの染みついた白衣というファッションが、そんな素地を台無しにしている。

僕がそんなことを考えていることなど露知らず、博士はカプセルへと歩み寄り、今にもこの設備のことを話し出そうとしている。そのことを気取った僕は、博士のペースに巻き込まれまいと口を開いた。

「あの……前にも言ったんですけど、その『少年』って呼ぶのを止めてくれませんか？　僕にだって、ちゃんとした名前があるんですから」

「知っているとも。君の名前が上野将人（うえのまさと）ということは、私も把握しているぞ、少年！」

「だったら、ちゃんと名前で呼んで下さいよ。松渡彩奈（まつどあやな）さ――」

「おーっと！　このラボで私の本名呼びはタブーだぞ、少年！」

途端、博士が手を広げて僕を制した。そんな博士に、僕は大袈裟に肩をすくめた。

松渡さんは、僕が中学生だった頃の家庭教師だ。とはいえその頃は……ていうか、僕の家にいる間は、ごくごく普通に振る舞っていたけど。

松渡さんの指導の甲斐あってか、僕は無事に志望校に合格することが出来た。その報告を松渡さんにした時、彼女は僕にある頼みごとをしてきた。

それが、松渡さん――「博士」の助手になることだった。

「……分かりましたよ、もう」

呼び方のことは諦めて、僕は気を取り直して、博士の話を聞くことにした。す

ると博士は、待ってました、とばかりにカプセルを指し示して、
「説明しよう。これは、人間を機械の体へと作り変える装置だ」
「……は？」
博士の口から飛び出した言葉に、僕は目を丸くした。僕のそんな反応に、博士は得意げに何度も頷いて、装置を開発した理由を滔々と語り始めた。
「ちょ、ちょっと待って下さい」
気持ち良さそうに語る博士を、僕は慌てて止めた。すると、博士は首を傾げて、
「ん？　どうかしたのかな、少年？」
「どうかしたのかな、じゃないですよ。僕はまだ、信じられないんですから」
「信じられない？　何を？」
「そりゃあ……人間を機械にする装置だ、なんて言われて、はいそうですか、って信じられるわけがないですよ」
実際にそんなものが出来たら、世紀の大発明だ。僕がそう言うと、博士は、
「ふふふ……世紀の大発明……」
ニヤニヤ笑う博士を見て。今のは失言だったかもしれない、と僕は内心で後悔した。
「と、とにかく……自信たっぷりですけど、実験とかやったんですか？」
「そう、実験だ！」
唐突に、博士が素っ頓狂な声を上げた。あまりにも突然だったから、僕は思わずビクついてしまった。すると博士は、僕を見つめて、
「今回、君を呼んだのは他でもない。実証実験をするためなのだよ」
「実証実験？」
「この装置は、私が設計した通りに完成した。よって、このまま起動しても正常に稼働し、私の立てた理論通りに、人間を機械の体へと作り変えることが出来る。だが――」
博士はニヤリと笑って、
「正常に稼働することが明らかであるとはいえ、やはり実証実験は必要だ。そこでだ――少年。君に、実験の手伝いをしてもらいたい」
「手伝い……？」
そう答えた僕は、不意に、猛烈に嫌な予感に襲われた。まさか、博士は――
「い、嫌です！　嫌ですよ！」
僕は博士から一歩、二歩と後ずさる。
「ん？　どうした、少年？　そんなに怯えて」
「人間を機械の体に……って、要は、人間をロボットにするってことでしょう？　嫌ですよ！　僕、ロボットになんか――」
「おいおい、何か勘違いしていないか？　少年」
不思議そうに博士が首を傾げた。
「勘違い？」
「君に危険が及ぶかもしれない実験の被験体に君を指名するつもりなど、私には毛頭ないよ」
それなら、と僕は博士に尋ねた。
「一体、誰を実験に使うんですか？　そんな人がいるんですか？」
「ああ、いるとも」
「どこに？」
「ここだよ」
そう言って博士は――自分を指さした。えっ？　それってまさか――僕が目でそう尋ねると、博士は微笑みを湛えたまま頷いて、
「今回の実証実験は、私の体を用いて行うのだよ」
事も無げに答えた博士に、僕は言葉を失った。
「……さて。私の方は準備万端だ」
カプセルの中に入り、機械的なマスクを装着した博士が、僕に呼びかける。

「少年、装置の起動スイッチを――ん？　どうした？　さっきから、私から目を逸らしたままだが？」

当たり前だ。何故なら、カプセルの中に入った博士は、下着さえも脱いでしまっているのだから。結果、野暮ったいファッションに隠された博士の魅惑的な体が、露わになってしまっている。正直言って、気恥ずかしくて正視できない。

その一方で、博士は自分が素っ裸になっていることを、全く恥ずかしがっていない様子だ。何しろ、「実験の準備を始めよう」と言うなり、僕の目の前で服を脱ぎ出したくらいだ。

「だ、大丈夫ですよ」

僕は博士から目を逸らしたまま答えた。そして、装置の起動スイッチに手をかけ、

「じゃあ、起動しますよ」

「うむ。任せたぞ、少年」

僕はスイッチを押した。装置が、ゴウン、という音を立てて動き始める。

程なくして、カプセルの中に緑色の液体が満たされ始める。目を閉じた博士の体が、その液体に包まれていく。液体の色がフィルター代わりになっているのか、博士の姿がぼんやりとしたものになっていった。ここでようやく、僕は博士のことを直視することが出来るようになった。

続いて、カプセルの上蓋から幾本もの細いケーブルが伸び、博士の体の所々に挿さっていく。驚いたことに、ケーブルを挿された途端、博士の体は小さく震えた。ひょっとして博士には、痛みを感じるだけの意識があるんだろうか？

「博士？」

僕が呼びかけると、博士がゆっくりと目を開いた。緑色の液体で遮られている上に、口元をマスクで覆われているからハッキリとは分からなかったけれど、博士は僕に向かって微笑みかけた――ように見えた。

――心配するな、少年。

その柔らかな眼差しは、僕にそう語りかけているように見えた。

が、僕はそこで、博士がとんでもない「忘れ物」をしていることに気づいた。

（博士、眼鏡をかけたまま、装置に入っちゃった……）

そのことが、博士が機械の体になる過程で、どんな影響を及ぼすか分からない。それに、今さら眼鏡を外してやることも出来ない。僕はただ、経緯を見守るしかなかった。

カプセルに入る前、博士は僕に、この装置がどのようにして人間を機械の体にしていくのかを説明してくれた。その内容に則って、博士の今の状態を説明すると……こんな感じだ。

まず、カプセルの中に満たされた緑色の液体は、博士の皮膚組織を硬質化させる。博士の肌の色をしたプラスチックに近い特殊な外装に変化するのだ。この外装が、機械の体でありながら人間のような外観を維持しつつ、外装に隠された機械の体を保護する。

また、博士の体に挿された幾本ものケーブルは、博士の体内組織を機械的なパーツに作り変える液剤を注入する。この液剤を投与されると、骨はカーボン製の人工骨に、内臓は機械の体の活動を維持するための様々な機械へと作り変えられる。

博士からそんな話を聞かされた僕は、正直言って、そんなことが本当に出来るんだろうか？　と思った。が、僕のそんな思いを覆す事態が、カプセルの中でゆっくりと展開され始めた。

（あれ？　博士の体が……）

博士の肌が、人工的な艶を放ち始めた。緑色の液体越しとはいえ、その肌は人間の肌にはない硬さを有しているように見えた。どうやら本当に、博士の肌は特殊な外装へと変化しているみたいだ。

（何、あの線は？）

博士の体のあちこちに、線が浮かび始めた。何だろう？　と思いながらその線

を見つめていた僕は、思わず声を上げた。
「博士の体が……切れてる!?」
肩や肘、股間や膝、手首、足首……線が浮かび上がった関節部分が、ぱっくりと裂けたのだ。その痛々しい見た目に、僕は思わず両手で顔を覆った。でも……指の隙間から、恐る恐る博士を見ると、
（血が……出ていない？）
関節部あたりの肌が裂けているのに、博士の体からは、一滴の血も流れていなかった。いや、それだけじゃない。そうして出来上がった裂け目からは、
（機械……？）
黒光りする円筒形の部品が現れたのだ。それはまるで、ロボットの関節部品。どうやら博士の体の中は、本当に機械になってしまったようだ。
　でも博士は、自分の体がそんな風に変化していることに気づいていないのか、目を開いたまま、カプセルの中を揺蕩っている。博士は今、何を考えているんだろう。いや、何かを考えることが出来ているんだろうか——そんなことを思いながら博士の顔を見つめた僕は、ふと思い出した。
（眼鏡は……どうなった？）
僕は目を凝らして、博士の眼鏡を見つめる。形状はまったく変わっていなかったけれど、眼鏡のつるは、こめかみから耳の辺りにかけて、顔の一部になったかのようにくっついてしまっていた。
　……と、その時。装置からアラーム音が響いた。機械の体への変換工程が終了したことを告げる合図だ。やがて、カプセルの中を満たしていた緑色の液体が抜かれ始め、ケーブルを抜かれた博士が、カプセルの底にゆっくりと降り立った。
「……博士を出してあげないと」
博士が言うには、機械の体へと作り変えられた直後は、全ての機能が停止状態になっているらしい。だから、僕が最初にしなければならないことは、博士を「起動」させることだ。
「確か、このタブレットの起動ボタンを……これかな？」
前もって博士から渡されていたタブレットを手に取った僕は、そこに表示されていた「起動」のタブをタップした。すると——
「ひっ!?」
暗く沈んでいた博士の瞳が、緑色に光った。直後、博士はカプセルの中から、部屋の中を見渡した。首の動きが、明らかに機械的な感じになっている。そうして右、左と見回していた博士の眼差しは、僕に向けられたところで止まった。が、博士は僕を見つめたまま、全く動かない。
「あ、そうだ。カプセルを開けてあげないと」
僕は慌ててカプセルを開けた。博士がゆっくりとカプセルの中から出てくる。その体から、駆動音がハッキリと聞こえてきた。本当に機械の体になっちゃったんだ……僕は改めて感じた。
　カプセルから出た博士は、規則正しい足取りで僕へと歩み寄ると、再び直立姿勢になった。僕は博士の口元からマスクを外してあげて、
「博士……僕のことが分かりますか？」
無表情で僕を見つめる博士に、僕はおずおずと尋ねた。顔の一部になった眼鏡の奥にあるカメラアイが、僕に焦点を合わせるかのように蠕動する。
『……記憶データからの抽出完了。あなたは、上野将人様です』
その声——いや、電子音声は、表情と同じように、感情が全く感じられないものだった。しかも、電子音声と口の動きが、明らかにちぐはぐだ。
「は、博士……？」
僕の中で、様々な違和感が湧いて起こる。でも博士は、僕のそんな様子など気にかけず、駆動音を響かせながら首を傾げた。
『当機の記憶データに、何か誤りがありますか？』
「え？　い、いや、間違ってない。間違ってないですけど……」

『了解しました。上野将人様、あなたが当機のマスターですか？』
「ま、マスター……？　それって、どういう……」
『当機の稼働には、マスター登録が必要です。上野将人様、マスター登録をしますか？』
どうしよう、博士が博士じゃなくなっちゃった……博士の返事を聞いて、気がおかしくなりそうになる。でも博士は、依然として、無表情で僕を見つめている。一体どうすれば――
「あっ、そうだ！」
途方に暮れかけた僕は、ふと思い出した。機械の体になった直後は人間としての意識が休止してしまっている、と博士が言っていたことを。それを解消するためには、タブレットで意識を覚醒させる必要がある。僕はすぐさま、タブレットをタップした。
途端、博士のカメラアイが、赤く光った。
『……コマンドを受信。当機は、モード「松渡彩奈」を適用します』
博士がそう口にする。モードを適用？　それはどういうことなんだろう……戸惑いながらも博士を見つめていると、不意に、博士の眼差しが変わった。僕が良く知っている、どこか得意げな眼差しだ。
「博士……？」
『おはよう、上野将人様！　どうだ？　装置は正常に機能しただろう？』
博士がニヤリと笑った。この笑顔、この話し方――間違いなく博士だ。
「博士！　僕のことが分かるんですね！」
『もちろんだとも、上野将人様。私が君のことを忘れるなど、決してあり得ないからな』
笑顔でそう答えた博士に、僕は胸を撫で下ろした――が。僕はふと、博士の話し方に違和感を抱いた。
「ねえ、博士。さっきからどうして、僕のことをフルネームで、しかも様付けで呼ぶんですか？」
『私が？　上野将人様を？　様付けで？』
「ほ、ほら！　今も呼んでますよ！」
すると博士は、不思議そうな表情をした。
『ふむ……それは恐らく、私が機械の体になったことで、人間である上野将人様を、無自覚に敬っているのかもしれないな。しかし、上野将人様は、以前から上野将人様のことを名前で呼ぶことを希望していたと、私の記憶データにあるが？』
「そ、それはそうですけど……」
実際に呼ばれると、何だか恥ずかしい。それに、博士が僕のことを「無自覚に敬っている」というのも、何だか嫌だ。
「……やっぱり、今までみたいに、『少年』って呼んで下さい」
『了解した……と言いたいところだが、今の私は、それが出来ないのだよ』
「えっ？　どうして？」
『機械となった私は、人間は敬うべき存在だと認識している。故に、私自身が上野将人様の呼び方を自ら変更することは不可能なのだよ』
「じゃあ、どうすれば……」
すると博士は、視線でタブレットを指した。
『そのタブレットを用いて、私に関する設定変更をすればいい。上野将人様の呼称を「少年」と変更するように、な』
「分かりました。じゃあ、早速――ん？　『変更出来ません』って表示されたんですけど」
すると博士は、『ああ！』と声を上げた。
『設定変更は、マスター権限のある人間しか出来なかったな。時に上野将人様、マスター登録はまだだろう？』
「え？　確かにしていないですけど……それって必要なんですか？」

『勿論。今の私は、人間に管理される存在だ。そんな私にとって、マスターは必要不可欠な存在だからな』

「でも……」

『マスター登録がされていないと、私は稼働出来ないのだ。上野将人様、是非とも、私のマスターになってもらいたい。上野将人様は信頼のおける人間であると、私の記憶データにも記録されている』

博士にとって、僕が信頼のおける人間――その言葉に、僕の心は大きく揺れた。博士は僕のことを、そんな風に思っていてくれたんだ……と。

となれば――答えは一つしかない。

「分かりました。博士、僕が博士のマスターになります」

『おお！　上野将人様なら、そう言ってくれると信じていたよ！　では早速、私のカメラアイを見つめてくれ』

言われた通り、僕は博士のカメラアイを見つめた。その間――ほんの数秒だろうか。博士がおもむろに口を開いた。

『虹彩登録完了。私は、上野将人様をマスターとして登録した』

意を決して博士のマスターになることを決めたとはいえ、実際にそう言われると、何だか気恥ずかしい。でもこれで、博士が僕のことを様付けで呼ばないようにすることが出来るようになった。

「じゃあ博士、呼び方を変えますね」

『了解した。……設定変更完了。どうだ、少年？　問題なく変更出来たかな？』

拍子抜けするくらい、あっさりと呼び方が変わったことに、僕は目を丸くした。しかも博士は、自分が僕の呼び方を変えたことを意識していない様子だった。

ともあれ、博士から以前のように呼ばれたことに、僕は心底ホッとした。

「はい！　バッチリです！」

『そうか！　では改めて、よろしく頼むぞ。少年！』

博士の得意げな笑顔に、僕は笑みで応えた。

僕がマスターになったことで、正常に稼働出来るようになった博士は、鏡に自分の姿を映しながら、博士は体中から駆動音を立て、機械の体に見とれていた。そんな博士に、僕は尋ねた。

「あの……そんな姿で恥ずかしくないんですか？」

博士は、カプセルから出てきたままの姿――要するに素っ裸のままだった。もっとも、関節から機械の部品が覗き見え、人工的な艶を放っているその体は、一目で人間じゃないと分かる代物だ。でも、博士の体を覆う外装は、博士の肌の色のまま。だから、人間じゃないけど人間っぽい。そんな博士の体は、僕にとって正視出来ないものだった。

僕に尋ねられた博士は、顎に手を充てて、

『恥ずかしい、という感情反応は、今の私は検知していない。恐らく、機械の体へと変わったことで、私は人間のような感情が欠落してしまったのかもしれないな』

それはきっと、機械の体になったせいじゃないと思うんだけど――と、そこで僕は、あることを思い出した。

「あ、そういえば博士、眼鏡をかけたままカプセルの中に入っていたけど、眼鏡は……大丈夫なんですか？」

『眼鏡？』

機械になった指で、博士は自分の眼鏡の縁を触る。そして、その指をつるに滑らせたところで、『ほう！』と声を上げた。

『これは面白いな！　私の眼鏡は、どうやら私の顔の一部となったようだ』

「えっ？　それじゃあ、博士はもう、眼鏡を外せないってことですか？」

『かもしれないな。まあ、眼鏡を外せなくなっても、特に問題はあるまい』

「でも、カメラアイなのに度の強い眼鏡をかけていたら、逆に視界が悪くなるんじゃないですか？」


-Mode-
松渡 彩奈

『そちらは問題ないよ。恐らく、眼鏡のレンズを介した状態でも見えるよう、私のカメラアイが自動的に調整しているのだろう。さすがは私の開発した機体だ』

博士はまた、得意げに微笑んだ。それはそれですごいけど、ここで同調すると、博士を更に調子づかせることになりそうだから、僕は何も言わず苦笑いで応えた。

それから博士は、機械になった裸体の稼働確認をするかのように、部屋の中を動き回った。そんな博士を横目に、僕は手元のタブレットを見つめた。

このタブレットは、機械の体になった博士のリモコンのようなものだ。このタブレットを用いれば、僕は博士を自由自在に操れる。まあ、そんなことをして博士をロボットみたいに扱うつもりはないけれど。

「でも、色んなタブがあるんだなあ。……ん？　何だろう、これ？」

タブレットに目を落としていた僕は、ふと、そこにハートマークのアイコンが表示されていることに気づいた。ていうか、気づいたその直後に、指で軽く触れてしまった。途端、アイコンが小さく震えた。それに驚いた僕は、すぐさま指を離す。

「な、何だったんだ、今のは？　ねえ、博士。このハートマークのアイコンって――」

僕は顔を上げて、博士を見つめた。すると、さっきまで動き回っていた博士は、いつの間にかピタリと静止していて、僕へと視線を向けていた。

「博士？」

体中から駆動音を響かせながら、博士が僕の方へと歩み寄ってくる。気のせいか、歩きながら身をよじらせているように見えた。まるで、自分の体を魅惑的に見せるかのように。博士の様子がおかしい――そう感じた時には、博士はもう、僕の横に座っていた。いや、それだけじゃない。機械の体を、僕に摺り寄せてきたのだ。

『ふふふ……相変わらず、可愛い顔をしているな、少年』

つるつるとした感触の機械の手が、僕の頬を優しく撫でる。

「は、博士？」

『しかし少年、君も男だ。いずれは、少年から大人へと変わる……』

「な、何を……ひっ!?」

博士が僕の手を掴む。そしてその手を、博士は自分の乳房に充てた。艶々とした乳房の外装の感触が、指先に伝わってくる。硬くて冷たい、プラスチックっぽい乳房の感触が。

『どうだ？　私の胸部外装は？』

「は、博士？　ちょっと……」

『それとも、こちらの方がお好みかな？』

今までに見たことのない艶美な笑みを浮かべながら、博士は自分の股間に触れた。すると、カチッという音と共に、股間のハッチが開いた。中から、とろりとした透明な液体が零れ出る。

『私の機体は、如何なる人間にも性的満足を与えられるよう作られている。それはもちろん、君に対してもだ』

「は、博士……や、やめて……」

『さあ少年、私の機体を利用して、大人になるのだ』

博士が蕩けそうな表情で、僕に顔を寄せてきた。そのカメラアイの奥に、ハート形のランプが光って……ん？　ハート形？　これって、まさか――僕は手元のタブレットに表示されているハート形のアイコンを長押しした。すると、画面に《セクサロイドモードを停止しますか?》というメッセージが表示された。

（このアイコンって、そういう意味だったんだ）

僕はもちろん、《はい》を選択した。すると、博士のカメラアイからハート形のランプが消えた。

『……おや？　どうしてこんなところにいるんだ、少年？』

博士が不思議そうな表情で僕を見つめてきた。いや、あなたが僕のところに近寄って来たんでしょう――そう言い返すよりも前に、博士は僕の手元のタブレットに目を落とすと、『おや？』と首を傾げた。そして、僕に向かってニヤリと微笑み、

『……ほう。少年、これが気になるのかな？』

これ？　一体何のことだろう――僕は博士の視線の先を追った。

「あっ！　いや、これは……」

博士の《セクサロイドモード》を止めるためにタップした指を、ハート形のアイコンの上に重ねたままにしてしまっていたのだ。僕は慌てて指を引っ込めたけれど、博士は何かを納得したかのように何度も頷くと、

『恥ずかしがることはないぞ、少年。君も男の子だからな。こういうことに興味を持っても、決しておかしくない。いや、むしろ健全といっていい』

「あの……博士？」

『おっと失礼。そういえば、このアイコンについての説明がまだだったな。では改めて、説明――』

「い、いや、いいです。説明しなくて」

このアイコンのことは、もう十分に理解している。すると博士は、了解した、と何事もなかったかのように答えた。その直後、博士は自分の股間に目を落とすと、

『む？　私の股間部から、何やら液体が漏れているな。これは――』

博士は指で液体を拭うと、それをじっと見つめた。

『――これは人工愛液だな。しかし、どうしてこんなものが？』

博士の言葉に、僕は内心で驚いた。どうやら博士は、自分が《セクサロイドモード》に切り替わっていたことを認識していないようだ。

（どうしよう。言った方がいいのかな……）

言うべきか黙っているべきか――僕が迷っていると、博士は不意に立ち上がった。

『少年。君に、頼みたいことがある』

「頼みたいこと？　何ですか？」

博士は一つ頷くと、自分の股間を指して、

『私の機体から人工愛液が漏出した原因を探りたい。私の設計した機体に不具合が生じるとは考え難いが、しかし、万に一つの場合、というのもある。少年、手伝ってくれるかな？』

「えっ？　だって僕は、博士みたいに知識があるわけじゃないし……」

『君はもう、私のマスターだ。私の機体を管理することは、マスターである君の責務だよ』

そう言うと博士は、室内のベッドに仰向けになった。

『さあ少年。早く来たまえ』

博士の体の管理は、僕の責務――何となく気恥ずかしい言葉だったけど、確かにそうかもしれない。僕は意を決して、博士が横たわるベッドに歩み寄った。

こうして、僕と博士の新たな日々が幕を開けた。

機械化メイドと僕

刈野　寧夢

僕の両親は、僕が幼い頃に他界してしまったけれど、大きな屋敷と、僕が生活していくには充分すぎる財産を残してくれた。

幼少の僕が、よその家に引き取られることなく暮らしていけたのは、両親が生きていた頃から身の回りの世話をしてくれていた庭師やガードマンたちがいたからだった。でも、彼らは僕の家族ではなかった。彼らには彼ら自身の家族があった。

僕にとって家族と呼べるのは、亡くなった両親を除けば毎日の食事を作るメイドのセーラさんだけだった。セーラさんは料理の腕前はもちろん、掃除や洗濯などの家事全般をそつなくこなす完璧なメイドだった。僕はそんなセーラさんが大好きで、小さい頃はいたずらで彼女の手を煩わせることもあったものだった。

僕は大きくなるにつれて若く綺麗なセーラさんに「坊ちゃま」と呼ばれるのが気恥ずかしくなり、自分から素直に甘えることはしなくなった。それでも一緒に暮らしているのを当然に思うほど、意識的ではないにせよ本心では大好きなのは変わらなかった。

僕がセーラさんに自分から声を掛けることは少なくなっていった反面、女性の体への興味は年相応に増していった。一番身近な異性なのだから、性的興味も彼女に向けてしまうのは当然のことだった。

僕は、ある日、洗濯前の彼女の服が置かれているのをたまたま見つけたので、つい手を伸ばしてしまったのだった。自分でもどうしようとしたのかは分からない、もしそのまま気づかれなければ匂いを嗅いでいたのかもしれない。自分の心臓の音がこれまでで一番大きく聞こえていた気がする。しかし、衣服に手が触れたその瞬間背後からセーラさんに声を掛けられたのだった。

僕は明らかに慌てていただろう、何かしら言い訳しようとする僕に、セーラさんはとても冷静だった。

「坊ちゃまも女性の体に興味を持つお年頃になられたんですね」

意外にもセーラさんは少し微笑むと、僕のズボンを脱がせはじめた。僕は罰を加えられるのではないかと身構えていたが、セーラさんが「坊ちゃまもお年頃ですから、我が家では我慢なさらないでいいんですよ。これも私の仕事ですから、お任せください」と言うのでおとなしく従うほかなかった。

彼女は固くなった僕のものを取り出し、握ると、前後にしごき始めた。僕はなぜそんなことをするのか分からなかったけれど、普段人に見せない、ましてや人に触られたこともないところを握られた恥ずかしさに僕の顔は赤くなり、動悸は速くなっていた。僕が息を荒げてもセーラさんは落ち着いた様子で、僕が白いものを出してしまった瞬間すら「大丈夫だから、しっかり出しきりましょうね」と言って、慌てる僕をなだめるのだった。

僕はセーラさんの手袋を自分の体から出たもので汚してしまったことを謝ろうとしたけれど、彼女は『シャセイ』は恥ずかしいことじゃありませんから、したくなったらいつでも私に声をかけてくださいね」と、むしろ嬉しそうですらあった。

それ以来僕は、しばしばセーラさんにお願いして射精させてもらうようになった。その頃の僕は、それが性欲の発散なのだということすら分かっておらず、ましてや自分の手で射精させることなど思いもよらないことだった。

回数を重ねるにつれて僕も慣れてきた一方、セーラさんも様々な方法で僕を射精に導くので、飽きることはなかった。彼女が僕のものを口にくわえてきたときは、おしっこの出るところだからと止めようと思ったにもかかわらず、こ

れまでとは違う感覚とセーラさんの一層落ち着いた様子に圧倒されて、セーラさんの口の中で果ててしまった。僕が出したものをそのまま当然のように飲み込む彼女にその味を尋ねてみたけれど、彼女は「坊ちゃまの味です」とはぐらかされてしまった。

あるとき、僕はとうとう我慢できずに、僕のものを咥えている彼女の体に手を伸ばした。彼女はすぐに察したのだろう、「そうですよね、私の体も気になりますよね」と言った。彼女は一旦手を止めて、服を脱ぎ始めた。そして、乳房を露出させた。

女性の裸は、成人向け雑誌やインターネットで見たことはあったけれど、セーラさんの乳房は、それらと一見そっくりでありながらも、それらにない上品さ、神々しさを持っていた。

「坊ちゃま、どうぞお触りください」

セーラさんの肌は艶があって、まるで乳房の方が僕の手に吸い付いてくるようだった。

乳房を揉む僕の手が、彼女の突起に触れると、赤い顔をしたセーラさんが聞いたことのない声を上げた。

「申し訳ありません、女性は男性に乳房を刺激されると声を上げてしまうものなんです。女性の体の扱いはまた後日練習することにいたしましょう」

セーラさんは僕の手を乳房から優しく取り払うと、今度は両乳房で僕の陰茎を挟んで刺激し始めた。

「これはパイズリって言うんですよ」

彼女はまた僕の知らないことを教えてくれる。経験のない刺激に、僕は彼女の美しい肌を汚してしまった。

やがて僕の誕生日がやってきた。誕生日は我が家に勤めている人皆がお祝いしてくれるけれど、僕は毎年の豪華な料理以上の特別なプレゼントがセーラさんからあるのではないかと期待していた。

セーラさんは食事の後、僕と一緒にお風呂に入ると、体を洗い流してくれた。

「坊ちゃまも体が大きくなられましたね」

それでもセーラさんよりはまだ背が低い。僕は早くセーラさんより大きくなって、彼女を守れるぐらい強くなりたいのに。

風呂から出た後、寝室で僕はセーラさんに「せっくす」を教わった。上手にできたかは分からないけれど、セーラさんはものすごく褒めてくれた。

「セックスは自分が気持ちよくなるだけではいけません。相手の女性を思いやって、満足させなければなりません。もっと私と練習を積んで、上達しましょうね」

セーラさんは、性行為による感染症や、妊娠のリスクや、コンドームをつけなければいけないことも教えてくれた。

しかし、僕はセーラさんとのセックスでコンドームをしていない。セーラさんから返ってきた答えは、余りにも予想外のものだった。

「坊ちゃま、いえ、もう大人になられたのだから旦那さまとお呼びするべきですね。旦那さまにはお伝えしなければならないことがあります。私は、人間ではございません。人間そっくりの、アンドロイドです。性行為をする機能はついていますが、妊娠することはありません」

僕には彼女の言葉が冗談にしか聞こえなかった。

僕は本物の女性の体に触れたことはない。だからセーラさんの体が本当の女性とどの程度違うのかは分からないけれど、少なくとも僕と同じ人間の身体のようにしか思えず、ロボットだという言葉をそのまま信じることはできなかった。

言葉で説明しても納得できない様子の僕に、セーラさんは体の中身の一部を見せてくれた。

普通の肌と変わらないように見えた腹部に突如切れ目ができ、皮膚の一部が

浮かび上がって外れると、中には金属や人工樹脂でできていることがはっきりと分かる、機械が詰まっていた。

「これが私の人工膣です。旦那さまの精子を採取すると、解析して健康状態を把握するようになっております。これまでの射精で旦那さまの精子の受精能力に問題はないことが確認できております」

それを目にしてもなお、僕には自分の目の方が信じられないくらいだった。街で働くロボットを見かけることもある。しかしそれらの動きや機能はまさに機械的で、人間的なセーラさんとは対照的に思えた。

でも確かに、年老いる気配すらなく、いつ休んでいるのかも分からない彼女は、アンドロイドだとすれば納得できる部分も確かにあるのだった。

その日から僕は、セーラさんとセックスの練習をするようになった。

セーラさんから上達を褒められるのも、彼女が可愛らしい反応を見せるのも嬉しかった。

「旦那さまはずいぶんお上手になられました。いつ本物の女性とお付き合いされても安心ですね」

セーラさんはやはり僕とのセックスをあくまで本物のセックスのための練習として扱っている。

「セーラさんは僕とのセックスを練習だと言うけれど、僕は練習なんかじゃないと思ってるよ。だってセーラさんのことが好きなんだもの」

「旦那さまはまだお若いからそう思われているだけですよ。恋人ができれば、きっとお分かりになります。ロボットの私にですらこんなに優しくしてくださる旦那さまなんですから、素敵な女性とお付き合いできるはずです」

セーラさんの顔をじっと見つめる。彼女の容姿は、人工物だろうとどんな女性よりも美しいと思う。誰よりも献身的で、誰よりも僕のことを褒めてくれたのは彼女に違いない。この先彼女より美しく、献身的に僕を愛する女性が現れるとは思えなかった。

「だってセーラさんは僕のことを一番に考えてくれてるんだもの。僕だって、他の女性よりもセーラさんを一番大事にしたい」

「旦那さまは人間、私はロボットですから、旦那さまとは違います。私の存在意義は、持ち主である旦那さまのお役に立つこと。私はあくまでもオナホールやダッチワイフのような道具にすぎません。私とのセックスは、旦那さまの性欲を充足し、本物の女性との性行為の練習台になる以上のものではありません。旦那さまにはもっと素敵な、人間の女性と愛し合うべきです。客観的に見れば、それが旦那さまにとって何より幸せに決まっています」

「他の人がなんと言おうと、セーラさんを幸せにすることこそが僕にとっての幸せなんだ」

「なにも旦那さまが結婚されたからと言って、一緒にいられなくなるわけではありません。今と同じように、旦那さまご夫婦の側でお仕えすることができれば、私は幸せです。そういう風に私はプログラムされているんです。私の旦那さまへの愛も、所詮プログラムで再現された偽物の感情にすぎません」

「セーラさんの愛が偽物だなんて言ったら、僕の感情だって脳細胞に走る電気信号にすぎないよ」

「旦那さまの愛は、私のプログラムの心とは違う、正真正銘の本物です。ロボットの私に向けるのはもったいないことです。

どうぞ今夜はおやすみください。明日になれば旦那さまにも運命の女性との出会いがあるかもしれません。本物の愛を知れば、今夜のことなどお忘れになられますよ」

セーラさんの言うことは、徹頭徹尾業務的で、やっぱり人間とはほど遠いと言わざるを得ない。

それでもまだ、僕には彼女がロボットだというのをどこか信じ切れないでい

た。もしかしたら、彼女は実はサイボーグで、生体脳で動いているのかもしれない。それなら彼女の機械的でない人間味のある反応にもうなずけるし、人間ならば僕と愛し合ってもいいはずだ。僕は頭ではそんなことはありえないとは分かりながらも、きっとそうだと自分に言い聞かせた。

僕は彼女に頭の中を見せてくれるように頼むことにした。何の躊躇もなく、彼女は快く自分の頭を開放した。人間らしさとはあまりにもかけ離れたその姿に、未だ気持ちが追いついていなかった僕は少なからぬショックを受けた。

セーラさんの頭蓋の中は、やはり電子回路の部品のようなものが一杯詰まっていた。しかし、僕はそこに予想外のものを見つけた。

透明なガラスケースのような容器。その中には、周囲の幾何学的なラインとは明らかに異質な握りこぶし大の物体、それこそ人間の脳のようなものが、細いケーブルに絡め取られながら液体の中に浮かんでいた。

「これは……？」

「それは人間の脳です」

セーラさんはやはり驚く様子もない。

「セーラさんはロボットじゃなかったの？　脳があるならサイボーグなんじゃないの？」

「いいえ、その脳は私のパーツとして組み込まれているだけで、私そのものではありません。私の思考は全て電子頭脳で行っており、その脳は人間らしい行動を真似るための補助記憶装置として搭載しているにすぎません。取外しても私の機能には何ら支障ありません」

彼女がサイボーグかもしれないという若干の期待を裏切られただけでなく、彼女の言っていることは僕には全く理解できない話だった。

「その脳はセーラさん自身じゃないってこと？　じゃあ誰の脳なの？」

「私に製造時から搭載されているパーツです。旦那さまのお気に召さなければ、パーツ交換をいたしますが」

「いやいや、そんなことはしなくていいよ」

僕の頭にはある不穏な考えがよぎった。脳があるならば、普通はロボットではなくサイボーグとして扱われるはずだ。でも実際にはセーラさんは戸籍も人権もないアンドロイドだ。

もしかしたら、セーラさんは、生身の人間を改造して作られたアンドロイドなのではないか。でも、彼女に尋ねてもその答えは分からないだろう。生きた人間をロボットに改造したとしても、死体の一部を回収して組み込んだにせよ、合法なやり方とは思えない。彼女のデータにはその記録はないようだし、下手にメーカーなどに問い合わせれば彼女が解体されてしまうかもしれない。

仮に彼女が人間を改造したアンドロイドならば、その脳は戸籍も人権も奪われた彼女の唯一残された人間の証となる。彼女の電子頭脳が脳をパーツとしてしか認識していないとしても、僕にはそれを安易に捨て去っていいもののようには思えなかった。

僕は、なんとかしてその脳の正体、ひいては彼女の正体を知りたいと思った。

僕がセーラさんとのセックスの時に彼女の名前を呼べば、彼女は喜ぶ。でも、それ以外のときは彼女はいつも、「旦那さまが私のようなロボットに熱を上げていると思われると、物笑いの種になりますから、早く運命の女性を見つけてくださいね」と悲しむ様子もなく語る。それが間違いなく今の彼女の本心であることが、僕にはこの上なく悲しいのだ。

もし彼女が人間だったら、自分の幸せを望むことができるだろう。それすら奪われてロボットに改造されてしまったとしたら、そんな酷いことはない。

僕はセーラさんに生身の女性の代わりとしてでなく、本気で愛して欲しかった。でもそれ以上に、人間としての彼女が僕を愛さないのであれば、彼女の望むようにしてあげたい。とにかく、彼女の幸せを取り戻してあげたかった。僕を愛そうが愛すまいが、どちらを選ぶにせよ、外から入力されたプログラムに


ぐちゅっ
ずちゅっ
ぐぷっ
ずっちゅっ
ブシュー
ヴーン…

従うのではなく、彼女の自由にさせてあげたかった。

「生体脳の記憶から、それが誰の脳なのかって分からないのかな」

脳を記憶装置としてしか利用していないということは、脳自体をもっとよく調べれば、分かることがあるかもしれない。

「私が搭載している生体脳は人間のほんの一部ですので、完全にその人物の記憶を読み取ることは難しいとは思いますが、残された部分に記憶されている部分に関しては、記憶や人格の解析が可能だと思います」

僕は、その脳がセーラさんが人間だったころのものである可能性に賭けることにした。

「旦那さま、生体脳の解析と記憶・人格の復元が完了いたしました。私に搭載されていた生体脳は、私の疑似人格プログラムのベースとなる人格の持ち主のものでした」

やはり、脳は彼女のものだった。セーラさんは人間を改造したロボットだったのだ。もっとも、生体脳を単なる記憶デバイスとして積んでいただけの今までの彼女が、人間の彼女そのものかと言われると難しい問題だが。

とにかく、人間としての彼女がどう思っているのか、知らなければならない。生体脳から復元した人格を起動するよう、頼んでみた。

「生体脳は、事故で亡くなった女性のものでしたが、残存部分が不充分で生体脳単体では人格を再現できません。私の疑似人格プログラムと結合して、人格を再現します」

一瞬、彼女の瞳から光が消え、すぐにまた元に戻った。

「旦那さま、私が生体脳の元の持ち主の人格、セーラです」

いつもと同じセーラさんの声、でも少し色めいて聞こえる気がする。

「人間の人格なのに旦那さまとお呼びするのは変に思われるかも知れませんが、私にはこうお呼びするほかありません。今の私は、自分がもうこの世の人間ではないことは分かっています。たとえ脳の一部があるとしても、私は電子頭脳で生かされているにすぎない、ロボットに宿った幽霊のようなものです。

人生の喜びを知らないままこの世を去った私が、今こうしてお話できているだけでも、旦那さまには感謝しなければなりません。何より、ロボットの部品となった私の脳から、人格を呼び起こしていただき、ありがとうございました。旦那さまが持ち主になられなければ、私の脳は朽ちるかパーツ交換されて、私の魂は完全に消え失せていたことでしょう」

疑似人格プログラムのベースとなった人だからか、電子頭脳と結合した人格だからかは分からないが、彼女は僕のよく知っているセーラさんでありながら、そうでないような気もする、不思議な気分だ。

「やっぱりセーラさんは人間だったんだ。脳が人間のもので、人格も生きていた人間のものだったら、戸籍や人権も取り戻せるんじゃない？　そうすればきっと、僕とだって……」

「いえ、それはできません。私は既に死んだ人間です。いくら科学の力でも、死んだ人間を生き返らせることはできません。私はあくまで人間そっくりのロボットです。生きた人間とは違うんです。

旦那さまが私を気に掛けてくださるのは有難いですが、お気持ちだけで構いません。旦那さまにこれだけ愛され、私はもう十分すぎるぐらい幸せですから、もう私のことは気になさらずに、旦那さまはご自身の幸せを探してください」

「セーラさん、いやセーラさんの脳は、それでいいと思っているの？　人間として僕と一緒になりたいとは思わないの？」

「私の生体脳は、旦那さまと添い遂げたいと思っています。でも、それが叶わないことも十分すぎるぐらい理解しているんです。私はロボット、この人格ですらそう理解しているんです。

私は、人としての幸せを知る前に命を落としましたが、こうして人に愛され

る幸せを十分に味わいました。こんな幸運はないと思います。

さあ旦那さま、命令してください。そうすれば私の人間としての人格は停止して、元通り完全なロボットのセーラに戻ります。私の人間としての人格は、最後に幸せな夢を見ることができました。もういつ消えても満足です」

僕はその時、寂しそうなセーラさんの表情を初めて見た。

「できないよ、僕はセーラさんに幸せになって欲しいのに」

「私はこの世のものではありませんから、もう一生分の幸せを使い切りました。旦那さまにはまだこれからの人生があります。それをロボットのために費やすべきではありません。

あくまで私はロボット、人間の旦那さまとは生きている時間が違います。長く一緒に過ごせば過ごすほど、別れは辛いものになることでしょう。今終わりにしてしまった方が、旦那さまは新たな幸せを探すこともできるはずです」

セーラさんの言う通りだ。僕は死ぬまで彼女と一緒にいることができるけれど、彼女はそうではない。僕を看取るという辛い経験を彼女に強いなければならない。しかも、一生を共に過ごした後で彼女の人格をオフにするのであれば、彼女はきっと僕の一生を自分のものにしてしまったことを後悔するに違いない。

僕は、ある思いつきを彼女に提案することにした。

「僕もロボットになれば、セーラさんとずっと一緒にいられるんじゃないの？」

「それはいけません。せっかく人間として産まれたのに、生身の身体を捨てて旦那さまが私と同じロボットなんかになっては駄目です」

「僕からセーラさんにあげられるものは何もない。でも、僕の愛を永遠のものにすることはできるんじゃない。今のセーラさんはたしかにロボットかもしれない、でも今セーラさんは不幸なの？」

「幸せでないとは言えません。だって、ロボットにならなければ事故で終わっていた私の人生が、こうして旦那さまと出会うことができたんですから。

でも、私は人生の半ばで命を落としたからこそ、旦那さまには人生を味わい、人間としての幸せをつかんで欲しいのです」

「僕はセーラさんのことを愛しているんだ。愛している人と同じ道を歩むことが幸せでないはずがないよ。

それに、僕のことをセーラさんは何でも知ってるのに、僕はセーラさんのことを何も知らない。僕の脳を電子頭脳に置き換えれば、少しでもセーラさんに近づいて、理解できるようになると思うんだ」

じっと二人で見つめ合い、静かな時間が流れる。

「……分かりました。脳以外の全身と、脳の五〇％までしたら改造しても法律上人間と認められ人権を維持できます。また、五〇％が電子頭脳であれば、私のプログラムも十分処理して理解していただくことができると思います」

「あのね、セーラさんにお願いがあるんだ。僕の改造手術は、セーラさんにやってほしいんだ。小さい頃は怪我するとよく手当てしてくれたよね。誰よりも僕のことを大事に思ってくれているセーラさんに、僕の生身の最後にも関わって欲しいんだ」

「最近は怪我も病気もなさらなくなりましたが、旦那さまの小さい頃はそんなこともありましたね。私には医療・看護用のプログラムも内蔵されていますし、手術に必要なプログラムも導入しますから、ご期待に沿えるかと存じます。他の方にではなく、私自身の手で旦那さまの手術ができることを嬉しく思うのも、生体脳のおかげかもしれませんね」

――生身の身体を機械に置き換える手術が始まる。全身を機械に置き換える手術は、一部を置き換えるよりも単純だ。人間の脳を取出し、その一部を電子頭脳にコピーして交換した上で、それをロボットの体に組み込むだけだからだ。リハビリテーションも必要ない。機械の体を動かすのに必要なプログラムは電子頭脳に予めインプットされているからだ。

一体のロボットが、一人の人間の、生身として最後の瞬間に立ち会う。ロボットは、人間の頭蓋を切り開いて脳髄を取り出すと、両手の上に載せて静かに口づけをした。そしてそのロボットは脳から電子頭脳にデータを移す作業を始めた――

ココロの重荷を捨てたくて

ロボイリス

「インターン先決まったんだ」
中庭で二人の女子学生が弁当を片手に話していた。黒いロングヘアに年齢の割に幼さを感じさせる髪飾りを前髪につけた女子学生がそう言った。
「そうなの!?　涼花、随分悩んでたみたいだけど、決まったならよかった！で、いつから？」
「来月から」
「そっかー、じゃあもうあんまり会えなくなっちゃうね」
「そうだね……ちょっと淋しいし不安だな」
不安げに顔を曇らせた彼女は三坂涼花……本名は三坂涼介という。彼女は性別違和を抱え、中学生の頃から治療を始め、その後ずっと女性として生きて来た。家族や友人の理解があったとはいえ、同級生やあるいは教師からは偏見の目で見られ、いじめられることさえあった。精神的に不安定になることも多く、今でこそ大分落ち着いてはいるが、それでも不安に思うことは多く、ふさぎ込みがちになることもあった。女性的な身体に近づいているものの、しかし本質的に男性なのは変わらず、それ故の悩みも尽きない。
「大丈夫だって、涼花なら。ところで恭也には伝えたの？　インターンのこと」
「え？　うーん、言ったほうがいいのかなぁ。別に言うほどのことでもないかなって」
「メッセージくらい送ったら？」
「そうだね、そうしようかな」
涼花と話すもう一人の女子学生は朝倉美奈。高校時代からの友人である。美奈はクラスのリーダー的存在であり、男子からも女子からも少々距離を置かれていた涼花によく声をかけ、友人として支えていた。
「恭也もなにしてるんだろうね。大学、愛知だっけ。一人暮らししてるんでしょ？」
話題に上がる恭也は涼介とは保育園時代からの付き合いで、親友と言ってもいい。涼介が自らの性についての違和感を初めて話したのも恭也であった。話した後、急に恥ずかしくなり、「冗談だよ」と笑い飛ばそうとした涼介に真剣な顔で、
「お前、そんな冗談言えるやつじゃないだろ。俺が一番良く知ってる。親にも相談してみたほうがいい。もしお前の親が否定したって、お前の選択なら俺は応援してるからな！」
と言ってくれた。その言葉がなければ今も男性として生きていたかもしれない。だから恭也には随分と感謝している。
「涼花？」
「え？　あ、ああごめん。ちょっと考え事」
「そう？　まあ、何かあったら言ってね。力になれるかはわかんないけど」
「うん、ありがとう」
美奈と別れた後、家路につく涼花。しかし足取りは重く、家についても気分は全く上がらなかった。恭也に「来週からインターンです」とだけメッセージを送る。すぐに既読になったメッセージには「頑張れ！」というスタンプだけの返信が来た。
「……ふふ」
恭也らしいな。涼花はそう思う。女として中学に通い始めても、恭也だけは今まで通り接してくれた。いまだって、悪友だった小学生の頃と何も変わらない。変わらずに接してくれることは嬉しくもあるが、同時に、少々の寂しさもある。恭也は自分のことをどう思っているのだろうか。……女として、見てく

れているのだろうか。

「……っと、ダメダメ、考えない！」

一度考え出すと止まらなくなる。今までの関係性が崩れるのが嫌だった。でも……

「恭也ぁ……私、つらいよ……」

髪飾りをぎゅっと握り、涼花は一人呟いた。

※

インターン先は「シンセスティック・テクノロジー」という研究所だった。最先端の産業用ロボットやＡＩ技術の研究をしており、その技術は医療や介護、教育など多岐にわたる。涼花はその研究所で事務を中心とした仕事を行っていた。仕事量は多く、残業になることもしばしばあった。この日も上司から帰っていいよ、と言われたことには時計の針が一〇時を回っていた。こんなに多忙な仕事だとは思っていなかった。涼花はぼんやりと廊下を進んだ。

「あれ？」

気付くと、薄暗い廊下の真ん中に立っていた。まっすぐ玄関に向かったつもりが、逆方向だったらしい。踵を返そうとしたとき、ふと、機械の動くような音が聞こえた。涼花は気になり、その方向に向かう。音は段々と近くなり、その音が聞こえる部屋の前で立ち止まった。涼花はおそるおそる扉を開けた。

「……え？」

そこには、ロボットが一体佇んでいた。この研究所内でロボットと言えばいわゆるロボットアームのような単なる装置、といった感じだった。しかし目の前のロボットはどうだろうか。金属製のボディであるとはいえ、明確に人型である。しかも顔は人間のそれをそのまま取り付けたかのような造形で、目にあたる部分にはカメラアイが光っている。

「……すごい……」

思わず感嘆の声を上げる。そのロボットはキュインと音をさせ涼花にゆっくりと近づいてくる。機械的な動きではあるが、人間にかなり近い。動く度にする音は先程涼花が聞いたものと同じだった。

「あ、あの」

涼花は後ずさりながら声を掛ける。ロボットは涼花を壁際まで追い詰めると、腕を伸ばしてくる。

『……ｶｷｹﾞ』

「えっ!?」

「おい！　誰かいるのか!?」

部屋の電気が付く。開け放したままの扉に目を向けると、インターン担当の職員・川崎が驚いた様子で立っていた。

「三坂くん!?　何をしているんだ！　こんな遅く……に……」

川崎はロボットと涼花を交互に見る。そして、血相を変えて近づいてくる。

「なぜここにいる!?」

「あの、えっと、ロボットの、音が聞こえて、気になって……」

「なんだって!?」川崎は激昂する。

「まあいい。このロボットのことは忘れなさい」

川崎はそう言うとロボットの首筋のスイッチを押し込んだ。ロボットはすぐに目の光を失い、うなだれた。

「さあ、三坂くん。玄関まで送っていこう」

「きゃっ」

川崎に腕を捕まれ、涼花は無理矢理に引っ張られる。その瞬間、髪飾りが落ちたことに涼花は気づかなかった。

川崎とともに廊下を歩く。無言なのがなんだか辛い。

「あの……」

「……なんだ？」
何を言うべきか。涼花は悩んだ。
「……ロボットっていいですよね。無感情で悩みもなくて。生まれ変わったらそういう機械になりたい……私はそう思います」
涼花は性別のことや様々なことで悩み、辛い思いをし、精神的にも随分追い詰められていた。そんな思いからふと出た言葉だった。しかし川崎は足を止め、
「……三坂くん」
と静かに言った。
「はい……」
「……そうだな、……してしまえば、口を割ることはないか……納品も待たせているし……」
何やらブツブツ呟いた後、涼花に向かっていう。
「明日は休みだが、午前一〇時にここに来られるかね？」
「え？あ、はい」
「よし、じゃあ決まりだ。一〇時にまたここに来なさい」
涼花に有無を言わせない口調で言う。
「は、はい……」
そう返事をするしかなかった。

※

川崎に連れられ、研究所の奥へと向かった涼花は、ある部屋の前に立つ。
「ここだ」
涼花は中に足を踏み入れる。部屋は薄暗く、殺風景なコンクリート打ちっ放しの部屋に手術台や薬品棚などが見える。そして奥には人影が見えた。
「ドクター・ジグラ。三坂涼花を連れてきた」
川崎はそう言う。ドクター・ジグラと呼ばれた人影はゆっくりとこちらに向かってくる。
「ヒヒヒッ、君が三坂君かね」
ジグラ博士は六〇代後半と思しき高齢の男性であった。白衣を着込み、目の下には深いクマがあり、モノクルをかけた、いかにもマッドサイエンティストといった風貌だ。
「あの……えっと……」
涼花が戸惑っていると、ジグラ博士はヒッヒッと笑いながら告げた。
「ようこそ、吾輩のラボへ。早速だが、君はロボットになりたいのだとそこの川崎が言っていたが、事実かね」
「え……？」
確かに涼花は昨日そんな話をしたが、なぜここでその話が出てくるのか理解できなかった。
「どうなんだね」
ドクター・ジグラは涼花に詰め寄る。
「えっと……はい……」涼花がおずおずと答えると、ジグラ博士は大きく笑った。
「ヒヒッ！　そうか、そうか！」
そう言って大笑いする。そして奥にいたロボット……昨日涼花が見たもの……を呼び寄せる。
「どうかね？　ＭＨＲ―００、通称〝ゼロ〟じゃ！　どうじゃ！　すごいじゃろう!?」
「は、はい」
涼花はそう答える。この怪しげな博士が何を言いたいのか、全く理解できなかった。
「ヒヒヒっ、そしてこのロボットがどうすごいのかと言うとな、なんと人間を

改造したのじゃ!!　ヒヒッ！」

「!?」

涼花は驚愕する。人間を改造した、ロボット……そんなことが……？

「ＡＩだのなんだのは随分発達したが、ロボットを動かすのにはまだ至っておらん。じゃからの、人間を改造してロボットにすることによってそのへんのすべてを解決したのじゃ!!　そして三坂くん！　喜ぶのじゃ、君は貴重な実験体として、このＭＨＲシリーズ七号機として生まれ変わるのじゃ！　どうじゃ？　嬉しいじゃろう!?　ヒヒッ！」

「え、あ、その……」

涼花は混乱した。人間を改造したロボット……そんなことが……。しかし……突然のことで頭がうまく回らない。確かにロボットのような無感情な存在になりたいという話はしたが……。

「ん？　なんじゃ、嬉しくないのか？」

「えっと……」

嬉しいかどうか。そんなことは分からなかった。ロボットになることが、人間を捨てることが……。涼花は口ごもった。しかし、ハッと気づいたようにジグラ博士は続ける。

「そうか！　外見が気になるのじゃな!?ヒヒヒっ、何！しっかりと雌の機体（からだ）に作り変えてやるわい！　機械に性別などないんじゃが、ま、見た目の問題じゃな！」

その辺に無造作に置かれたディスプレイに３Ｄ映像が映し出される。メタリックな外観はそこにいる〝ゼロ〟と変わりないが、全体に丸みを帯びた女性的な姿が表示されていた。

「こんな、感じに……」

「そうじゃ！　今なら希望も受け付けるぞ！　吾輩は今日、気分がいいのじゃ！　ほれ、なんでも言ってみなさい」

ジグラ博士は相変わらずヒヒヒと気味の悪い笑い声を上げながら言う。

「あ、あの……」

涼花は意を決したように口を開く。ヒヒッと笑いながらジグラ博士は先を促す。

「ん？　なんじゃ？」

「も、もう少し胸を大きく……」

「ふん、乳か？　どうせカチカチの金属になるんじゃが、それでも？」

「は、はい……」

「ヒヒヒ、肉体は雄でも心は雌なんじゃものな！　もちろんかまわんぞ！」

キーボードを叩くと、３Ｄモデルが涼花の要望に応えるように変化した。

「ほれ！　こんなでよいかの!?」

「あ、ありがとうございます……これです！　これがいいと思ってたんです！」

それはまさに涼花にとって理想的な体型だった。平均よりかなり大きめな胸、程よくくびれたウエストからヒップへのライン。メカニカルでありながらそれは美しかった。機械的な身体も強くありたいと願う涼花には理想のものに思えた。

「ヒヒヒ、それではの、早速取り掛かるとしようかの」

涼花はなにかに取り憑かれたかのようにフラフラと手術台に向かう。服を脱ぎ、手術台に横になると、ジグラ博士が近づいてくる。

「では始めるぞい」

そう言うと涼花の腕にチクリとした痛みが走った。麻酔の注射がひんやりと感じられ、徐々に意識が遠のいていく。

「ヒヒッ！　目が覚めたらもう君はロボットじゃよ……ヒヒ……」

（ああ、家族や恭也、美奈にも言わずに来ちゃったけど、大丈夫だろうか。ロボットになったら、もうみんなと会えなくなるのかな……それはちょっと寂しいな……）

薄れる意識の中、そんなことを考えていたが、やがて完全に意識は途切れた。

※

「ドクター・ジグラ。わかっていますよね」

「ヒヒヒッ。もちろんだとも。人格は消去し、〝商品〟にするのだろう？　吾輩は改造さえできればよいのだ！　そして改造した後のこやつをどうしようと、お主の勝手だ。好きにするがよい！　ヒッヒヒヒッ！」

ジグラ博士と川崎は言葉を交わす。ジグラ博士は楽しそうに、川崎は淡々と。

「しかし最近、改造に手間を掛けすぎでは？随分と費用が掛かっている。少しは自重していただかないと……」

川崎がジグラ博士を諫めるように言う。

「うるさい！　改造くらい吾輩の好きなようにさせてもらおう。より強靭で、より美しいものにするためには時間と費用がかかるのだよ。川崎！　お主もそれくらい分かるだろう!?」

ジグラ博士は鼻で笑って答えた。そして川崎は冷めた表情でこう言った。

「存じておりますよ……ですが……」

「今まで吾輩が改造してきた連中を、お主がいくらで売っているか、知らないと思うておるのか!?　ヒヒッ！　吾輩が改造した連中の〝商品価値〟はお主が一番良く知っているはずだ！」

ジグラ博士は川崎の言葉を遮る。

「……確かにそうですが、しかし……」

「ふん！　まあいいわ！　とにかく！　改造が終わるまではこやつは吾輩のものじゃ！　ヒヒヒッ、しかし女子の姿をした雄とは……腕が鳴るのう！」

ジグラ博士は不敵に笑い、涼花の裸体を眺める。川崎は小さくため息を吐く。

ジグラ博士が川崎の注意を素直に聞くことはない。改造さえできればジグラ博士は満足するのだから、放っておけばいいだろう。彼はそう考え直すことにした。

「ではドクター、任せましたよ」

川崎はそういうと研究所を後にした。

ジグラ博士は、涼花の寝るベッドの前に立つ。既に麻酔で意識を失った身体に電極をつけ、改造作業を始めた。

「ふんふんふん～っ！　んふ～」

ジグラ博士の鼻歌が研究室に響き渡る。躊躇することなくメスでズバズバと涼花の身体を切り裂いていく。並外れた正確さ、淀みない動きで涼花を解体していく。涼花の身体からは血液が流れ出し、作業台の上に溜まっていく。

「ほほう、しかし、雄だというのに、随分と……いや、人間の身体というのは不思議なものじゃ……しかし、ヒヒヒッ機械にしてしまえば、雄も雌もないがな！　ヒヒヒッ！」

ドクター・ジグラは涼花の身体をまじまじと見つめながら呟く。長年の治療により女性化の進んだ身体。胸は膨らみ、シルエットも女性といって差し支えない。下腹部の一点だけが本来の性別が男性であることを主張していた。

「せっかくじゃから、色々機能をつけるかの、ヒヒヒっ」

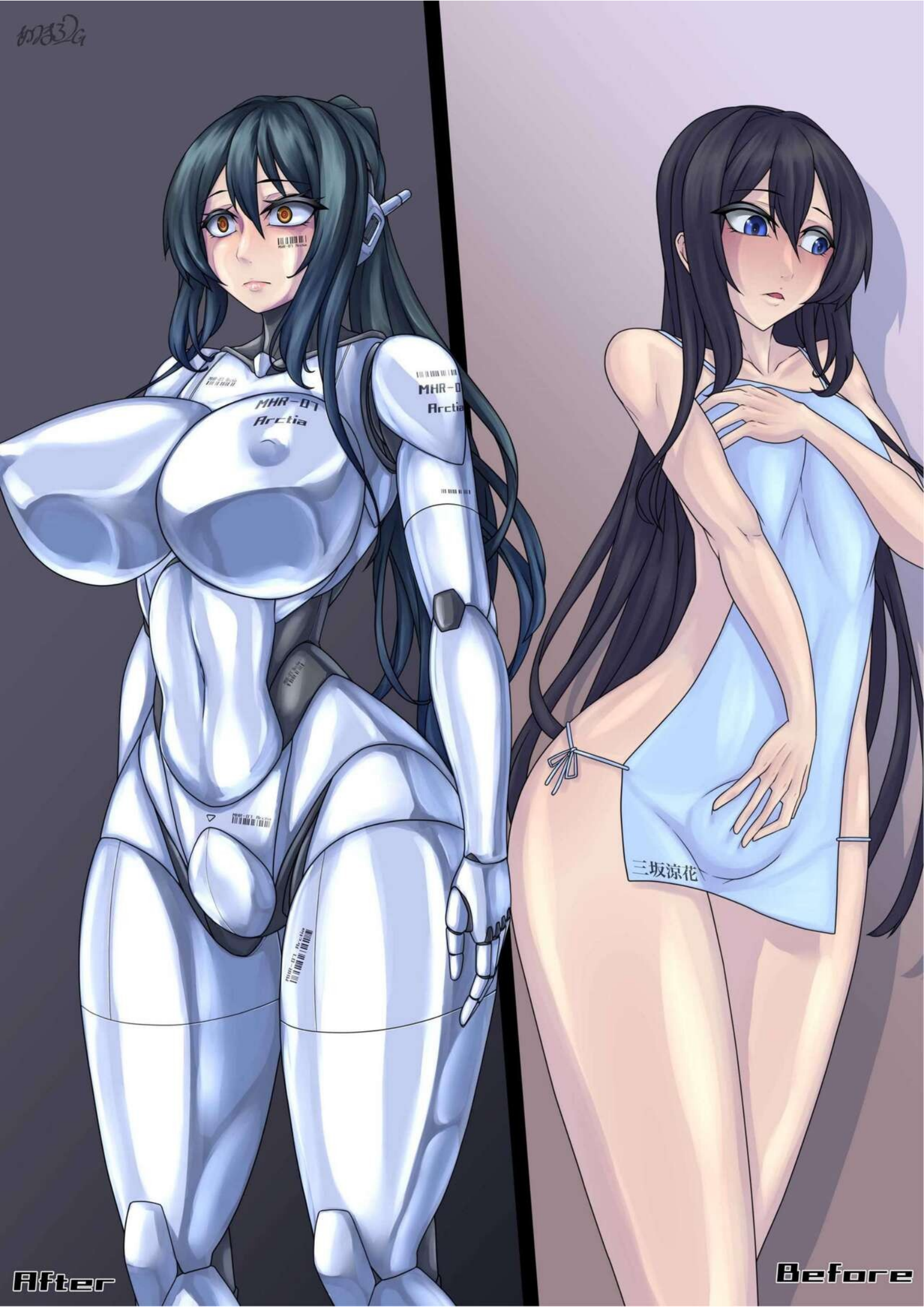
つぶやきながらもジグラの手は止まらない。腹の中から無駄な臓器を摘出する。臓器はしっかり保存しておかないと商品価値がどうのと川崎がうるさい。冷蔵のパックにぐちゃぐちゃと詰め込んでいく。

金属の骨格、そして筋肉の代わりにモーターやアクチュエーターを取り付ける。身体がひと段落すると今度は頭部に取り掛かる。

「ふん、顔はこのままでも十分女子として通じるじゃろ。さて、あとは……」

頭蓋骨を専用の器具で切り開いていく。そして脳にブスブスと電極を突き刺す。

「ヒッヒィッ！　楽しいなぁ！」


MHR-07
Arctia
三坂涼花
After
Before

ドクター・ジグラは満足げに笑うと、手元のスイッチをひねる。電極から電気が脳に流し込まれ、涼花は白目を剥いてビクビクと痙攣を繰り返す。

「ヒヒッ！　貴様の脳はただの計算装置となるのじゃ！　人間らしく振る舞う必要はないからのう！　あとは……」

脳の一部を取り除きながらそこに様々な機械類を詰め込んでいく。

「ふん、この辺もいらんか……まだ入らんのう……ヒヒッ」

ジグラ博士は、涼花の肉体に様々な機械を取り付けては外していく。その姿はまさしくマッドサイエンティストのそれであった。

「ヒヒヒッ、完成じゃ！　ＭＨＲ―０７「アークティア」よ！　目覚めるのじゃ！」

ポチっという音と共に、元は涼花だったソレは目を開く。「アークティア」は平坦な声で言葉を紡いだ。

「起動しました。私はＭＨＲ―０７「アークティア」です。よろしくお願いします」

アークティアは淡々と述べ、ゆっくりと立ち上がる。ジグラ博士はそれを見て満足げに笑う。

「ヒヒッ、成功じゃな！　今までで最高の作品じゃ！」

メタリックなボディは明確に女性的な体型を描いており、涼花のそれよりも随分と盛られた乳房は、豊満でありながらも硬質で、金属の光沢を放っていた。

「ボディに損傷なし。四肢および神経接続をチェック」

アークティアは初回起動プログラムに従い、作業台の上で腕を動かしている。直線的な動きでありながらもスムーズな動きを見せ、動作に支障はないようだった。

「神経接続完了。四肢動作異常なし」

ジグラ博士は満足げに呟く。

「ヒヒヒッ、いいぞ……見事だ！」

ドクター・ジグラは興奮気味に手を叩く。

「手放すのも惜しいくらいだが、貴様の改造でまだまだ改善すべき点が見つかった。次の改造に活かしていかなければな、ヒヒッ」

ジグラ博士はアークティアに語り掛けるようにいう。ジグラ博士が手元の端末を操作すると、涼花、いやアークティアは「停止命令を受諾。保管ボックスに入り、スリープ状態に移行」と言って、作業台の横に置かれていた箱に自ら入り、動作を停止した。

※

涼花と連絡がつかなくなった。そんな連絡を涼花の妹、花（はな）から受けた恭也はいても立ってもたまらず、涼花の通う大学のある関東近郊の街へと降り立った。久しぶりに再会した恭也と美奈は、最後に向かったと思われるインターン先のシンセスティック・テクノロジーへと向かったが、担当者の川崎は「こちらも連絡がつかない、何かあったら連絡する」の一点張り。最後には「こちらも突然出勤しなくなって迷惑しているんだ！」と怒鳴られた。

「一体、どこにいるんだ……」

「涼花、身体のことで随分悩んでいたもの。もしかして……」

美奈は最悪の想像をして俯いている。「そ、そうだったのか？俺には随分立ち直っていたように見えていたが……」

「はぁ、涼花はあんたにはだけには心配かけまいとしてたんでしょ。無理して笑ってたんだよ。気づかなかったの？」

美奈は呆れ気味に言う。

「そ、そうだったのか……でもどうして」

「……恭也、気付かないの？」

その言葉は先程とほとんど変わらなかったが、恭也はその言葉の意味がわかってしまった。美奈から目を逸し、小さく「すまない。だけど……」と呟いた。

「はぁ、自分の気持ちに素直になれないところはそっくりね……」

その美奈の言葉は小さく、恭也は聞き返したが、美奈はもうそれ以上恭也には何もいわなかった。

「とにかく、まずは少しでも情報をあつめないと。美奈も手伝ってくれ」

「もちろん。涼花のこと、絶対見つけ出すんだから」

二人は決意を固めて歩き出した。

※

「ティア、そっちの書類を取ってくれ」

『はい。優斗様。この書類でよろしいでしょうか』

夜。湾岸部の高層マンションの最上階。広いリビングの隅に置かれたデスクに座る男性、その傍らにアークティアはいた。

「ああ、ありがとう」

優斗と呼ばれた男性は書類を受け取ると目を通していく。

『お飲み物は如何でしょうか？』

「ん？ああ、頼むよ」

『かしこまりました。ホットのハーブティでよろしいですか？』

「ああ、お願いするよ」

篠崎優斗は新興のIT系ベンチャー企業の社長である。若くして一財産を為した彼は、この広いマンションの一室に居を構え、その有り余る資金で最新鋭の人型ロボットを購入した。

「しかし、すごいもんだなぁ」

アークティアの背中を見ながら一人呟く。

とある取引先の大手企業の社長の自宅で見た銀色の男性型ロボット。それはMHR―02・ダリウスと名乗り、人間に近い動きで応対をしていた。篠崎はそれに惹かれ、その社長から購入先を聞き、すぐに連絡を取った。相手は「シンセスティック・テクノロジー」の川崎と名乗った。話を進める中で研究の都合で納品時期は未定と言われ、またビジュアル……ロボットの容姿は決められない、とのことであった。だが、篠崎はそれでもよかった。思いの外早くロボットの完成連絡が来たのは先週のことで、数日前からこの篠崎の自宅で稼働している。

『優斗様、ハーブティが入りました』

そんなことを考えているうちにアークティアの声で我に返る。デスクの上には湯気を立てるカップが置かれていた。

「ありがとう、ティア」

『いえ、当然のことをしたまでです』

「……しかし、本当によくできたロボットだよなぁ……」

MHR―07「アークティア」。シンセスティック・テクノロジー製の多目的ロボットである。人間に近い柔軟な思考や行動が可能なこのロボットは、家事や雑事だけでなく、秘書や護衛としての役割にも使えるそうだ。

「ティア、この書類は別のファイルに入れておいてくれ」

『かしこまりました。優斗様』

動きは直線的で、どこかぎこちなさを感じさせるが、十分にスムーズだ。だが動きよりもなによりも曖昧な指示を的確に理解し、忠実に動くその姿。時によっては先ほどのようにのどの渇きを察して飲み物を用意してくれたり、部屋が散らかっていれば何も言わずとも掃除もしてくれる。それはまさに理想のロボットといっても過言ではない。

「しかし、女性型とは思わなかったが」

ダリウスのようなかっちりした男性のようなビジュアルのロボットをイメージしていた篠崎にとって、このアークティアのような女性らしいフォルムは篠崎にとって少々意外であった。

『……何か問題がありましたでしょうか？』

「いやいや、そうじゃないよ」

慌てて否定するとアークティアはペコリと頭を下げた。

『そうですか。申し訳ありません』

その姿もどこか愛らしく、違和感なく生活に溶け込んでいた。無機質で人形のような雰囲気ももちろんあるが、時折見せるちょっとした仕草……例えば今のような謝罪など、その仕草がなんだか妙に人間臭い。

「……まあ、いいか」

時折そういうふとした動作に違和感を覚えることもあるが、高性能ゆえのことだろうと、篠崎は納得することにした。

しばらく仕事をこなす。アークティアは篠崎の指示やあるいは自発的に手伝いをしていく。

一冊のファイルをアークティアが篠崎のデスクに置く。

「助かるよ、ティア」

『いえ、優斗様のお役に立てたなら光栄です』

相変わらずの無機質で平坦な口調だが、篠崎はその声の響きにどこか暖かみを感じた。それはおそらく気のせいなのだろうが、そんな些細なところが心地よかった。

「さてと……」

そうしてしばらく優斗の仕事は続き、夜も更けてきた頃にアークティアに声をかけた。

「もうそろそろ寝ようか」

『はい。かしこまりました』

優斗は寝室に入り、ベッドに横になる。寝室までついてくるのは少々気になるのだが、以前に聞いたら『優斗様がお休みになるまで確認いたします』などと言い始めたので、もう好きにさせておくことにした。

『おやすみなさいませ』

「ふぁ……おやすみ……」

あくびをかみ殺す。疲れた身体はすぐに眠りへと引き込まれていく……。アークティアはその様子を確認したのち、

『優斗様の就寝を確認しました。メンテナンスモードに移行します』

と呟いてメンテナンス用の保管ボックスへと戻っていった。

※

失踪した涼花の捜索は難航を極めていた。足取りを追ってみてもどう考えても「シンセスティック・テクノロジー」へ向かったことまでしかわからないのだ。

（あの研究所が何か隠している？）

恭也は再び研究所へと向かった。深夜、裏手から研究所へと忍び込む。警察に言ったって「捜査中です」の一言で相手にしてもらえないのはわかっている。ならば……。

深夜とはいえ、一部の部屋には明かりが灯っている。まだ人はいるのだろう。だからこそ、警備システムが作動していないはず……。その予想は的中した。

「やっぱりな……」

研究所内を歩き回り、時折、鍵のかかっていない部屋の扉を開け、中に入る。

「ん？」

視界に輝くものが映る。

「これは……どうしてここに」

昔、涼花に渡した髪飾りだ。女子として学校に通い始めた涼花に何かの折に渡したものだ。まだ持っていたのか。しかし、これで涼花がここでなにかに巻き込まれた可能性が高くなった。恭也はポケットにそれを入れ、部屋を出ようとした。

「ん？」

何か物音がする。

恭也は扉から頭だけ出し、音のする方を覗き見る。

「あれは……ロボット？」

メタルボディのロボットが機械音をさせながら歩いている。そのロボットは恭也が今までに見たことがないほど精巧で、人間に近い外観だった。

突然そのロボットが恭也の方を向いた。

『侵入者発見』

「やばっ……！」

ロボットは恭也の隠れている物陰に近寄ってくる。慌てて逃げようとしたが、既に遅かった。

「くっ……」

ロボットはあっという間に恭也を追い詰めた。そして、恭也の首筋に突き付けられた指先から電流がほとばしる。

「がっ……！」

恭也はその場に崩れ落ちた。身体が言うことをきかない……。ロボットはそんな恭也の首根っこを掴むと、ズルズルと引き摺りながらどこかへ運んで行こうとした。

その時

「恭也ぁ!!」

美奈がロボットの後ろから飛び掛る。ロボットは受け身を取れず、ガチャンと床に倒れこんだ。

「美奈……」

「大丈夫!?」

恭也は倒れこんだロボットから這い出して、なんとか立ち上がろうとしたが、身体にうまく力が入らなかった。そんな恭也を美奈は支える。

『ガピッ！　アガGGG！Oオレ・俺は・いった……i』

ロボットが突然わけのわからないことを話し出し、恭也と美奈は顔を見合わせる。

「だ、大丈夫ですか」

「ちょ、ちょっと恭也!?」

恭也は自らの手を見つめ驚いている様子のロボットに声をかける。

『ｏｒｅ・は、ＭＨＲ―００……いや！　ちがう俺はチガウチガウ』

ロボットは何やら混乱しているようだ。頭を抱え、「俺は何なんだ？」などと言っている。

「恭也！　ロボットを心配してる場合じゃないでしょ!?」

「……あ、ああっ！」

恭也は美奈の言葉に我に返ると、ロボットの頭部に手をかける。

「な、何してるの!?」

「いいから！」

そんな声を無視して恭也はロボットの頭、スリットの入っている部分をこじ開けた。

『がっ!?　ガッ！　アガガ……アガァ……』

ロボットはガクガクと震え、そのまま動かなくなる。

「……やっぱり」

そんな恭也の呟きを美奈は聞き逃さなかった。

「どういうこと？」

「見ろよ」

こじ開けた頭部には様々な機械が詰まっていたが、よく見ると人間の脳のようなものが透明なアクリルケースに包まれ、取り付けられていた。
「このロボットは人間なんだ……。おそらく……」
「う、うそでしょ？」
「もしかすると、涼花もここでこういうロボットの素材にされてしまったのかも……」
恭也のその言葉に美奈は顔を青くした。
「そ、そんな……！　だって！　もしそれが本当なら、涼花は……っ！」
「美奈、落ち着け。まだ決まったわけじゃない」
「でも！」
そんな中、廊下の向こうから騒がしい声が聞こえてきた。
「やばい、美奈、逃げよう！」
「う、うん！　わかった」
二人はなんとか裏手から逃げることに成功した。
「これからどうするの？」
「警察に……言ってもわかってもらえないだろうな……。とにかく、まずは涼花が本当にここでロボットの素材にされてしまったかどうか確かめたいけど……」
「でも、もしこの研究所の中にいるのなら手出しできなさそうね……」
「ああ……」
二人の間に沈黙が流れる。その沈黙は重く、息苦しくさえ感じた。

※

「恭也！」
事態が動いたのはしばらくしてからのことだった。涼花と同じくインターンに向かった学生に話を聞いたり、警察へ連絡をしたりしたが、やはり手掛かりはなかった。そんな中で美奈が見つけた画像投稿ＳＮＳへの書き込み。それはとあるパーティでの一コマだった。その写真の背景に小さく涼花のような人物が映っている。
「これ、涼花よね？」
「ああ……おそらく」
その画像は不鮮明で、はっきりとはわからないが、確かにそれは涼花のように見えた。しかし、身体はロボットのように銀色に光っていた。
「恭也、これ……行ってみる？」
「……ああ」
そうして二人はその投稿をした人物ーーある企業の社長の元へと向かったのだった。

※

門前払いされるかと思った二人だったが、その予想に反して、その社長、篠崎は割とすんなりと二人を受け入れ、社長室へと案内してくれた。
「えっと、会社見学かなにかだって？」
篠崎はまだ三〇代半ば、若い社長だ。
「いえ、その……」
恭也は言葉に詰まる。涼花のことをどう切り出せばいいのか……。しかし、美奈がそんな恭也の思いを察したのか、話し始める。
「……篠崎さん、この写真について伺いたいのですが……？」
「え？」
美奈がスマホに表示させた画像を篠崎に見せると、彼は少し驚いた様子を見せた。

「ああこれは、先月のホームパーティーだね。取引先との懇親を深めるためにやっているんだが、それがどうしたのかな？」

「いえ……この写真に写っているのが私の友人に似ていたので、もしかしてと思いまして」

美奈は上手く話を繋げる。恭也はただ黙って二人のやりとりを聞いていた。

「この奥の……ああ、映ってるな。まずいな……で、この子がそうなのかい？」

「……何がまずいんでしょうか」

篠崎は少々困った様子で頭をかいた。

「いや……あまり言いたくないんだけどね、私の信用に関わることだから」

「話してください」

有無を言わせない口調で美奈は話す。篠崎はその圧力に負けたのか、「仕方がないな……」

と口を開いた。

「実はこのロボット、周囲に口外しないでくれと言われているんだ。まだ研究段階のものだそうでね。気づかなかったとはいえ、SNS上にアップしてしまったのは不味かったなと思ってね」

「そのロボットはもしかして、シンセスティック・テクノロジーのものでは？」

「そ、そうだが？　なぜ知っているんだ？」

篠崎のその反応に美奈と恭也は目を合わせる。つまり、この写真に写っているロボットは涼花の可能性が高いと……。

「このロボットにあわせてくれませんか？　私達の親友の可能性があるんです！」

恭也と美奈の話を聞き、篠崎は困惑したように言う。

「人間をロボットにするなんて、そんな非常識的な……。しかし、……いや、例えばその涼花という子がロボットのモデルになった可能性はないのかな？　そのほうがまだしっくりくるのだけど」

篠崎はそう呟く。しかし、美奈と恭也にはそれは考えにくいことであった。なぜなら……。

「涼花は……そのロボットが篠崎さんの家に納品される直前に失踪しているんです」

篠崎から聞き出したそのロボットの納品日は涼花が失踪した丁度三日後のことだった。

「たしかに……それは偶然の一致とは考えにくいな……」

篠崎は口元に手を当て、何かを考えている様子だった。恭也と美奈もその様子を見つめていたが、意を決したように話し始める。

「お願いです。会わせてください」

「お願いします！」

そんな二人の懇願を受け、篠崎はしばらく考えた後、こう切り出した。

「……わかりました。ひとまず、ティアに会ってもらいましょうか。話はそれからです」

※

「りょ、涼花なの？」

篠崎のマンションで恭也と美奈はアークティアと面会する。美奈の言葉に目の前のロボットは一瞬首を傾げ、

『私はＭＨＲ―０７・アークティアです』

と言い放った。その声は涼花によく似ていたが、淡々としたその口調は空虚で、ロボットらしいと感じさせる。

「本当に涼花じゃないの？覚えていない？」

美奈がそう訴えるとアークティアは

『申し訳ありません』

と一言だけ言った。
「そんな……」
そんな様子に落胆する二人を見て篠崎は申し訳なさそうに言う。
「やはり、ただのロボットだと思うのですが……、涼花さんというのは親友なのでしょう？　なら流石にお二人のことを認識できないのは不自然ではないでしょうか？」
篠崎の言葉に恭也と美奈は再びアークティアを見る。その目にはなんの感情も宿っていないように見える。
「そんな……」
恭也と美奈はうなだれながら、篠崎に促され、篠崎の部屋を後にしようとした。
「ティア、お二人を送って差し上げて」
『はい、優斗様。かしこまりました。……キョウヤ様、ミナ様、玄関までお送りいたします』
はっとして視線を上げた恭也は、アークティアのその一言に違和感を覚えた。
「今……キョウヤ様って言わなかったか」
「えっ？」
この部屋に入ってから篠崎も恭也たちも名前を告げていないはずだ。それなのに、なぜアークティアは恭也たちの名前を知っているのだろうか？
「ティア、どういうことなんだい？」
篠崎もアークティアのその言葉に驚いたのか、そう尋ねる。
『視覚情報や声帯情報を私のデータベースと照合、その結果、人物データが登録されていましたので、その名称でお呼びしました。間違っていたでしょうか？』
「い、いや……でも、そのデータはいつ登録されたものなのかな？」
篠崎はアークティアに冷静に尋ねる。しかし、その声は微かに震えていた。
『はい。ミナ様のデータは五年八ヶ月前、キョウヤ様のデータは……申し訳ありませんが明確な情報が取得できませんでした』
作られてからまだ数ヶ月しか経っていないはずのアークティアが、どうやってそのようなデータを登録できるのだろうか。篠崎も気づいたようで、
「まさか、君たちの言っていることは本当に……」
篠崎はそう言うと、アークティアにデータケーブルを接続し、ＰＣのキーボードを叩き始めた。
『エラー。データベースの外部からの閲覧は禁止されています。エラー。データベースの外部からの閲覧は禁止されています。エラー。データベースの外部からの閲覧は禁止されています。

「どうにかして、あの研究所を告発できればいいのだが……しかし……」
篠崎はアークティアの方を見た。証拠として警察に引き渡すべきか悩んでいるようだった。しかし、アークティアを警察に引き渡せば、どのような扱いを受けるのかわからない。篠崎にとっても恭也や美奈にとってもそれは避けたい事だった。
「篠崎さん、あの……」
恭也は研究所で見たロボットのこと、そしてその頭部に取り付けられた脳のような部品のことを篠崎に話した。
「……なるほど、それさえ確認できればってことか……」
だが、アークティアの頭部を見るとあのロボットよりも緻密にカバーが組み合わさっており、普通の工具では開けることができない構造のようだ。
「無理やり開けて、その脳の部分に損傷を与えてしまえば、どうなるかわからないな……」
篠崎はアークティアの頭部を見つめながらそう呟く。
「どうにかして開けることさえできれば、このロボットが涼花だって警察にも証明できるかもしれないのに」
美奈は悔しそうに唇を噛む。篠崎も「そうだな」と呟き、しばらく考え込んだ後……。
「任せてくれないか。これでもＩＴ企業の社長だ。そういったプログラムに詳しくはないが、時間さえあればなんとかできるかもしれない。それまで待っていてくれないか」
「だけど……」
恭也は篠崎にそう訴えかける。だが、篠崎は首を振った。
「君たちの気持ちもわかる。しかし、何とかしてティアの……涼花さんと言った方がいいかな？　彼女を救いたい」
篠崎は恭也の肩にポンと手を置いてそう言った。その目は決意に満ちていた。
恭也はそれ以上なにも言うことができなかった。
「わかりました。……お願いします」
「ああ」
篠崎はそう頷き、恭也たちは彼の元を後にした。

※

数日後のこと。
「……なあ美奈」
「何？」
「このままでいいのか？俺達は何もせずに……」
恭也は美奈に訴える。しかし、美奈はすぐに首を横に振った。
「私もそう思う。でも……私達は所詮ただの学生よ」
「それはそうだけど……」
そんな時である。突然スマホの着信音が鳴り響く。
「はい」
「恭也君か？」
篠崎であった。
「篠崎さん？　どうしたんですか？」
「ああ、ティアのシステムをハッキングできないか試してみたのだが、やはりそう上手くはいかないな」
「そうですか……」
恭也はがっくりと肩を落とす。
「何か鍵が……ヒントさえあれば……」
篠崎は呟く。鍵……ヒントか……恭也は考える。
（やはり、あの研究所に行くしかない！）

「お、おい!?恭也君?どうした?」
恭也は無言のまま電話を切った。

※

シンセスティック・テクノロジーの研究所へ再度侵入した恭也は、ひっそりとした研究棟を進む。監視カメラもあるのだから発見されていないわけがない。静かすぎるその状態はかえって不自然とも言えた。
「ここか?」
以前ロボットがうろついていた廊下まで来る。その奥には階段が。真っ暗な地下に向かって伸びるその階段は、まるで地獄へと続いているかのようだった。恭也はゴクリと息を飲むと、ゆっくりと下っていく……。
「この奥か?」
鋼鉄でできた扉に手をかけ、力をかける。予想に反してその扉は開いていく。暗闇の中、恭也は伸びてきた手に気づかない。
「ぐっ!?」
バチバチとスタンガンの音が聞こえ、恭也は倒れ込んだ。意識はなんとか保っているが、身体は動かなかった。
「飛んで火に入る夏の虫とはこのことかな」
男が言う。
「か、川崎、っ?」
恭也が初めてこの研究所を訪れたときに応対した人物、川崎がそこに立っていた。
「ああ、名前を覚えていてくれたのか。光栄だな。その後は会ってはいないが、うちの貴重なロボットを破壊してくれたこともあったな。その礼もしたいと思ってね」
川崎はそう言うと、スタンガンの出力を上げる。恭也は苦痛に顔を歪めた。
「な、なんで……こんなことを?」
なんとか口を動かし、恭也が聞くと川崎は表情一つ変えずに答える。
「こんなこと? それは人をロボットにしていることかな?それともロボットを売って金儲けしていることかな?」
「……っ」
恭也は川崎を睨む。しかし、そんな恭也のことなど気にする様子もなく、彼は続けた。
「まあどちらでもいいか。……そうだな。強いて言うなら金のためかな? 研究所というのは何かと金がかかるからね。それに……」
「な、なんだ……?」
「いや、なんでもないよ」
そう言って川崎は笑う。その笑顔に恭也はゾッとした。
「さて、おしゃべりもここまでにしようか。ゼロ、彼を運ぶんだ」
『かしこまりました』
ゼロは恭也を抱え、作業台へと連れていく。
「何をする気だ!?」
「君にはロボットになってもらう。研究所の秘密を知ってしまったのだから、当然だな」
「そ、そんなっ! ……ぐっ!?」
ゼロは作業台に恭也を固定する。
「さて、ドクター・ジグラを呼んでこないとなぁ」
「くそっ!」
その時、扉がばたんと開いた。
「何だ!?」
「恭也くん!」

研究室へ入ってきたのは篠崎とアークティア、そして美奈だった。
「篠崎社長、これは……どういうことかな」
川崎が怒気を孕んだ声で尋ねる。篠崎は「はあ」とため息を一つついた後、口を開いた。
「まさか、こんな、非人道的な実験をいているなんて、思っても見ませんでしたよ」
「篠崎社長、貴方も知ってしまったのですか……仕方ない、アークティア、コード９９、こいつを拘束しろ！……おい、アークティア!!」
川崎の言う事にアークティアは従わない。
『コード９９の優先命令権は現在使用できません。制御システムにエラーが発生しています。再度お試しください』
そう繰り返すだけだった。
「ゼロ！　お前がこいつを拘束しろ！コード９９だ！」
『コード９９の優先命令権は……』
ゼロも直立不動のまま、同じ言葉を繰り返す。
「流石に完全に解析はできませんでしたが、貴方たちが何らかの制御システムを組み込んでいることまではわかりました……なのでそのあたりを妨害するプログラムをインストールしまして」
篠崎がそう説明する。川崎が歯ぎしりをする。
「く、くそっ！　だが、どうしてゼロまで！」
「アークティアは非常に優秀ですね……彼女の機能を使って、この研究所のシステムをハッキングさせていただきました。無論警備システムも含め、すべてね」
川崎は篠崎を睨みつけると、「くそっ！」と叫ぶ。美奈は恭也のもとに駆け寄り、拘束を外そうとした。
「させるか！」
川崎は近くにあったメスを恭也に向かって投げようとした。
「な、なに!?」
『危険です。やめてください』
いつの間にかアークティアがその手を押さえていた。
「アークティア！　離せ！」
川崎が命令するが、アークティアは動かない。
「川崎さん、観念したほうがいいのでは」
篠崎が憐れむように言う。
「ええぃ！　まだだ！　人間を改造したなどという証拠はどこにもないのだからな!!」
「川崎さん、先程言いましたよね、アークティアは警備システムも掌握していると。あなたが恭也君の前で言ったセリフもすべて記録されているんです。……言い逃れはできませんよ」
篠崎が冷静にそう諭すように言う。川崎は「くそっ！」と吐き捨てる。
その時、奥の扉を開き、ジグラ博士が現れた。
「ドクター・ジグラ!!　こいつらをどうにかするんだ！　はやく！」
「……ヒヒヒヒ、川崎よ。君は吾輩にこの研究室と被験体を提供してくれた恩がある……だが、もう潮時ではないかね」
「な、何を言っている？」
ジグラ博士は静かに首を振った。
「ゼロ、拘束を解いてやりなさい」
「……ドクター・ジグラ、どういうつもりですかな」
川崎が驚いた顔で言う。しかしジグラ博士は戯けた口調で続ける。
「ふん！　貴様が連れて来た被験体のうち何人が自らの意思でここに来たというのかのぅ？　……ここにいるゼロと、そこのアークティアくらいだろう？吾輩がそのことを知らないとも？」

「ぐっ……、そ、それは……」

川崎は悔しそうな表情で言う。ジグラ博士の言っていることは事実のようだ。

「……吾輩の理論の実証のために様々手配してくれたのは、この研究所の資金……いや、貴様の懐を潤すためだったのだろう?」

「な、何を！　そんなわけが！」

川崎は憤る。

「ヒヒっ、まあよい。貴様に不都合な人物、貴様に借金のある人物、研究所や貴様の秘密を知る人物……そういった人間を連れてきては吾輩の被験者にしたのだろう？　吾輩も改造ができるならと気にしないことにしたが……こうなったら覚悟を決めるべきじゃ。なあ？　川崎よ」

川崎は「くっ」と歯を食いしばり、俯く。

「吾輩は逃げも隠れもせん。吾輩の理論の実証のために機械化の実験をしたのは事実じゃからの、ヒヒヒ」

「……っ!!」

美奈はジグラ博士に殴りかかろうとする。しかしそれを恭也が止めた。

「やめろ美奈！　……すまない、ジグラ博士」

「ヒヒッ、少年、君が謝ることなどないんじゃよ。さてと……」

ジグラ博士は篠崎の方に向き直ると話しかける。

「……それで？　吾輩をどうするのかね？」

「まずは警察に連絡させていただきます。そのあとは、しかるべき法に則り、罪を償っていただきます」

「ふむ……まあよいだろう。ヒヒッ……」

ジグラ博士は笑った。その笑いにはなにかから開放されたような、そんな清々しさが感じられた。

その後、警察が到着しジグラ博士と川崎は逮捕され連行された。最後まで川崎はジグラ博士を睨みつけていた。

恭也と美奈は警察から事情聴取を受けた後、解放された。結局、アークティアやゼロは証拠物件として警察に押収された。

※

この事件は大きく報道された。八名もの人物が非人道的な実験に使われ命を奪われロボットに改造。その上、研究所の資金、一部は川崎の私腹を肥やすためとして売却されていたのだ。世間の注目は当然集まった。研究所は非難を浴びたが、ジグラ博士と川崎の共謀により勝手に行われていたものだとして、研究所は無関係であると主張した。川崎はジグラ博士が勝手にやったことと取り調べで話しているが、改造された者の多くが川崎の利害関係者であったり、川崎に金を貸していたりしていたことも判明している。また、川崎は被害者から摘出した臓器の密売にも関わっているとして、近く再逮捕される見込みらしい。

「……以上が事の顛末だよ」

担当の刑事から説明を受け、恭也と美奈は「ふう」と息をついた。

「涼花……やその他の改造された人はどうなるんですか？」

「涼花？　ああ、三坂涼介君だね？　彼も含め改造された者は警察で回収しているが……」

刑事は少々言いづらそうに続ける。

「人間に戻すのは当然不可能として、科学者からは使われている技術があまりも高度なため、手出しできないという話があった」

「そんな……！」

「ただ……」

恭也は刑事の次の言葉を待つ。

「ドクター・ジグラ……本名は辻倉典次といってれっきとした日本人だが……が、取り調べで興味深いことを語っていてね。少々の調整さえすれば、ロボットの人格自体は戻せると」

「本当ですか!?」

「とはいえ、八人を改造した張本人だ。信用できるかという部分もあるが、彼に任せざるを得ないかもしれない。なんならボディも人間に近いものを作ることもできるそうだ」

「ボディ……」

美奈が呟く。ロボットのボディ……アークティアの姿を思い浮かべる。機械の身体ではあるが、外見をより人間に似せるということだろう。

「まあ、少し先のことになるだろうけどね」

※

テレビではロボットに改造されたという人物が、ジグラ博士による非人道的な実験の話をしている。川崎の悪事、ジグラ博士の非人道的な研究……。テレビでそれを語る人物の姿は、どうみても人間そのものの姿をしていた。もしかすると機械的な部分が服に隠れているだけかもしれない。

「恭也？」

「……ああ」

テレビに映る人物は他の被害者と協力して研究所を訴えるというような話をしている。改造された人物、全員が全員、こうやってメディアに出ているわけではない。八人のうち、メディアに出ているのは三人だけだ。この女性「蒲谷珠音」の他、サイボーグYouTuber「セリーナ」として活躍する「宇田瑞子」、元の生活に戻ろうとするダンサー「亀中聡」。その中に「三坂涼介」はいない。

あの後、裁判所などからの特別な許可を得て、ジグラ博士はロボット化された人物の〝復元〟を始めたらしい。復元と言っても人間に戻すのは不可能だ。今まで消去されていた人格や意識を復元し、人間に近いボディを用意する。そうすることで元の人間に近い生活を送れるようにする……それがジグラ博士の考えだそうだ。とはいえ「セリーナ」のように機械的な身体のままを希望する人も中にはいるそうで、その場合は今までの機械的なボディをそのまま使うらしい。

「恭也、まだぼーっとしてるよ」

「そうかな」

「……涼花のこと、考えてたんでしょ」

「……ああ」

他の人物の話は聞くものの、涼花は一向にその姿を現さなかった。最初は順番待ちなのだろうと恭也は考えていたが、あまりに時間がかかっているため何度か警察に問い合わせた。しかし、警察にも未だ連絡は来ていないらしい。

「実家にもまだ連絡来てないみたいだし……」

「……大丈夫さ」

そんなある日のこと、恭也の元に電話が来た。

「中条恭也さん、ですね。三坂涼介さんのことでお話があります。来ていただけますか？」

「えっと、俺、だけですか？　他の……家族や友人……美奈、は？」

「恭也さんだけに会いたい、ということです」

「!!　もしかして涼花が!?」

「はい……ですが詳しいことはお電話では……」

恭也は指定された場所へと向かった。警察関係らしいその建物はしんと静まり返っており、案内役の警察官と恭也の足音だけが響いていた。

「こちらです。私はここまでで」

「あ、はい……」
警察官が開けたドアの中へと入る。病室のようなその部屋の中央、ベッドに寝た人影に恭也は声をかけた。
「涼花……？」
人影は機械的な動きで、恭也の方へ顔を向けた。以前見たときと同様の無表情のまま、彼女は言う。
『恭也、様』
感情の乗らない合成された彼女の声が、恭也の鼓膜を震わせる。
「涼花……なのか」
『私は……』
そう言って彼女は俯く。
「どういうこと、ですか」
窓際で外を見ていたジグラ博士に恭也は声を震わせながら尋ねる。
「どうして、涼花は、アークティアのまま、なんですか」
目の前のベッドに仰向けになっている彼女は寸分違わず、あのとき見たアークティアの姿のままで、ベッドに横たわっている。
ジグラ博士は振り返る。その表情はなんとも複雑なものだった。
「ヒヒっ、それはのぅ」
そう言って彼は語り始める。
「彼、いや彼女と言うべきか……の意識や人格はもちろん復元した。したのじゃが……どうも……つまり、ロボットでいたいと考えておるようなのじゃよ」
「そんな……！　お、お前がなにかしたんじゃないのか!?」
恭也はジグラ博士に詰め寄る。しかし彼は相変わらず複雑な表情のまま、恭也の目を見つめた。
「ヒヒッ、吾輩はなにもしておらんよ……それにのう……」
ジグラ博士はちらりとベッドに横たわる彼女を見る。
「……これはあの子自身が望んだことじゃ」
「う、嘘だ……！」
恭也はベッドへと駆け寄る。
「涼花!?」
『恭也様、私は……ロボットでいたいのです』
「な、なにを言って……!?」
恭也は涼花に訴えかけるが、彼女は無表情のまま淡々と続ける。
『私は……悩みすぎました。人間でいる以上、身体のことや性別からは逃れられません。私は……そのことがとても嫌だったのです。そして、そんな悩みから解放されたいと、ずっと思っていたのです』
涼花の淡々とした告白は恭也に衝撃を与えた。
「そんな……俺は……」
恭也の前では笑顔でいることが多かった涼花。随分と立ち直ったのだとそう勝手に解釈していたが、それは違っていたのだ。
『恭也様、私は……もう何も考えたくないのです。……機械でいることは理想的です。なにも考えず、ただ命令に従う。……私は、それがとても心地いいのです』
涼花は淡々と続ける。
『恭也様、貴方は以前、私の選択は何でも応援してくださると、言ってくださいました。……機械でいるという選択も応援してはいただけませんか？』
「そ、そんな……こと」
恭也は言葉に詰まる。昔、涼花が女性として生きたいと言った時に恭也が応援したことは事実だ。だが……。
『恭也様、私はもう、なにも考えずに生きていきたいのです』
涼花は機械的な動きで恭也の手を握る。
『私は……ロボットでいたい』

「あ……」

『恭也様、どうか私の選択を理解して、いただけないでしょうか』

淡々としたその言葉の中に、涼花の切実な想いが感じられた。

「涼花……俺は、俺は……」

恭也は言葉に詰まるが、やがて絞り出すように言葉を発した。

「辛かったんだな、涼花……。苦しかったんだな……」

『恭也様……』

恭也は涼花の手を握り返した。

「わかった……俺は……応援するよ」

『ありがとうございます。恭也様』

その言葉を聞いた涼花の表情は、どこか嬉しそうだった。

『ところで、恭也様。……お願いがあります』「ああ、なんでも言ってくれ。……とは言っても俺にできる範囲でだけどな」

『大丈夫です。恭也様でしたらきっと』

そう言うと涼花は一瞬言葉を切って、

『私の所有者に……なっていただけませんか？』

「……え？」

『恭也様、私は貴方のものになりたいのです』

「……で、でも」

恭也は躊躇う。元々人間である涼花を所有物として扱うのは流石に気が引けるんだが……。

「ゴホン、あー、その子はの、つまり君とずっと一緒にいたいと言っとるんじゃよ」

ジグラ博士が咳払いをしてそう説明する。

「ずっと……？」

『はい……私は貴方の所有物……いかがでしょうか』

つまりそれはきっと

「あ、ああ、うん、涼花、俺は……」

※

「と、いうか、アークティア、涼花の人格が戻されているなら、そういえばよかったのに」

『ジグラ博士が説明しておりましたが？　意識と人格を復元したと』

引越作業をしながら、恭也とアークティアはそんな会話を交わす。相変わらずアークティアは淡々とした様子であるが、少々嬉しそうだ。

「でもあんな、話し方だと……」

あの部屋で恭也が話したのは復元された涼花の人格だったと聞いたのは少し後のことだった。随分淡々とした口ぶりで話すものだから、涼花の意識や記憶が復元された〝アークティア〟の人格が話しているものだと思っていたのだ。

『確かに現在は私「アークティア」としての人格によりキョウヤ様と会話しておりますが、施設での再会時の会話はすべて涼花の復元人格が行ったものです。……「本当の気持ち」を伝える必要がありましたので』

涼花は〝ロボットとして過ごす〟ことが望みだった。ジグラ博士の手によりあの後、涼花の人格は再び眠りについた。と言っても現在のアークティアの人格は涼花の記憶や意識に強く結びついているため、今のアークティアも涼花の一部と言えるだろう。

「そのうちひょっこり、涼花くんの人格に切り替わっているかもしれんがの、ヒヒヒ」

ジグラ博士はそんな事も言っていた。あるいは人格が混濁し、どちらともつかない人格が形成されていくのかもしれないとも。それはジグラ博士にもわか

らない。
「本当の気持ち、ね」
あの後、様々なことがあった。涼花の家族への報告……ロボットになった涼花を見た家族は言葉を失っていた。しかし、妹の花だけは「おねぇちゃん、ロボットになっても美人だね」と目に涙を溜めながらも笑っていた。アークティアは何も言わず、その頭をそっと撫でていた。美奈も「涼花的には恭也と一緒になれて万々歳かもね」なんて茶化していたが、複雑な気持ちを押し殺しているようにも見えた。篠崎のところに報告をしに行った際には、「そうか」と一言言った後、
「ティアは随分高かったからなぁ。もちろん買い取ってくれるんだよね？」
と笑顔で言ってきた。「えぇ……」という反応に困る恭也を見て、彼は大笑いしたのだった。
そして……
「アークティア、ちょっといいか？」
『はい』
引越作業の手を止め、アークティアは恭也の方を向く。
『なんでしょう？』
淡々としたその様子は涼花とは違う。だが、その仕草の一つ一つには、どこ涼花らしさがある。そんな気がした。
「これ……」
恭也はポケットから髪飾りを取り出した。
『ありがとうございます、キョウヤ様。……つけていただけませんか？』
恭也はアークティアの前髪にその髪飾りをつける。アークティアの見た目とは少々チグハグなそれを見て、彼女はなんだか満足したような様子で鏡を見ている。
「俺な、お前のこと、好きだよ」
『……』
恭也の言葉にアークティアは振り返り、目をぱちくりさせている。顔の表情は変化に乏しいものの、その仕草からほんの少しの感情の動きのようなものを感じ取れるようになったのはつい最近のことだ。
「もちろん人間だった頃の涼花のことも好きだけど……今のアークティアだって好きだ」
『ありがとうございます』
無機質ながらも嬉しそうな声で彼女は言った。機械的な動作と声音だが、そう感じた。
「涼花には、直接その気持ちを伝えることができなかった。だから……伝えておこうと思ってな」
『……はい』
恭也はアークティアを抱き寄せる。人間だった頃の涼花とは少し異なるその感触に、どこか愛おしさを感じながら、彼は囁くように言った。
「愛してる」
『ええ、私も』
口づけしようとした瞬間、気配を感じた恭也はバッと振り向いた。
顔を真っ赤にする花とニヤニヤする美奈が居た。
「どーしてやめるのよぉ」
美奈が不満げに言う。
「い、いやな……」
恭也は花の方をちらりと見るが、花はさっと視線を逸らし、
「ふ、ふつつかものの姉ですが、よろしくお願いしします……」
と囁くように言った。

「い、いや……まぁその……」
「ほれ、ぶちゅっとやっちゃいなさいよ」
「んな、お前な……」
『恭也様？　美奈様からのご指示です。継続を希望します』
アークティアは唇を突き出すような姿勢で静止する。
「おま、お前まで……」
二人のからかいに恭也はたじたじだ。
『恭也様、どうぞ』
「いや、だから……」
『どうぞ』
「……わ、わかったよ」
恭也は観念してアークティアを抱き寄せる。そして……。
「愛してるよ」
『はい、私もです』
二人は口づけをする。ヒューヒューと囃し立てる美奈の声も、掌で顔を隠しながらも指の隙間からじっくり見ている花の視線も、今の恭也には気にならなかった。アークティアは恭也の腕の中で、そっと微笑んだ。

あるレーシングヒューマロイドの少女の朝

ハカソシ

朝の優しい日差しが部屋を照らす。清潔感のある白い壁紙にポップな可愛らしい柄のカーテンが揺れている。ベットの上にはクッションがいくつか並べられていた。ベッドのヘットボードにはレーシングマシンのミニカーと小さな写真立てが置かれていて、どこかのサーキットでレーシングマシンとともに楽しげな表情を浮かべる少女の写真が飾られていた。

ベッドの隣には書き込みや付箋でいっぱいの教科書やノートがきちんと並べられた学習机が置かれている。机の上には可愛らしいペン立てや文房具、ミニサイズの観葉植物が並んでいて少しだけ散らかった感じが部屋の主の性格を表していた。その側に置かれた本棚にはマンガ本や小説本の他にキャラクターグッズが所狭しと置かれている。壁に掛けられたカレンダーには赤丸で予定が書かれ直近の日付には「冴羽 HRGP 本戦!!」と大きく書かれていた。

反対側の壁には高校の制服が掛けられていた。その制服や部屋の雰囲気から女子高校生の部屋であることが分かる。しかし、その中で異彩を放っていたのがベッドの側に置かれた装置だった。装置には一人の少女が立ったままの姿勢で固定されていた。少女は眠っているのかまぶたを閉じたままピクリとも動かない。

その姿は部屋の雰囲気とは不釣り合いだったが少女の出で立ちも異彩を放っていた。細くしなやかに伸びた手脚、程よく膨らんだ胸の双丘、美しくくびれた腰回りなど、全身にフィットしたゴム質の素材によってそのボディラインが露わになっていた。まだあどけなさを残す 10 代特有の少女の顔からは生気が感じられず、まるで人形のような印象を感じる。それを更に強調するのが、彼女の顎先から耳の位置までを覆う樹脂製のパーツであり、そのパーツは耳の位置にあるアンテナ上のパーツと一体化している。

暫くすると少女の瞳がパチッと開いた。焦点の合っていないカメラアイの瞳に無機質な光が宿り合成音声が部屋に響き渡る。

『システム起動中……。メインプロセッサーオンライン。人格ＯＳ バージョン 5.2.14 をロード中……。ハードウェア設定初期中……。センサーキャリブレーション……完了。全パフォーマンスチェック……問題なし。システムオールクリア、SH360RH0423MS はパーソナルモードで起動します』

部屋に響くスピーカーを通したような合成音声の声は抑揚に乏しく感情は感じられない。少女が発したソレはシステムメッセージそのもので、彼女が人間とは異なる存在であることが伺える。

手脚を装置に固定するロックがエアーの抜ける音とともに解除されると少女は装置から降りて腕を伸ばして伸びをした。

『うぅぅっ……ん、ふぅ……』

思いっきり伸びをして身体をほぐすと息を吐いた。まるで作り物の人形のようだった少女の顔に生気が宿ると、クローゼットの扉に取り付けられた大きな姿見の前に立った。球体レンズと高性能センサーで構成された機械仕掛けの瞳が、姿見に映る少女の姿を捉える。少女の身体は、つま先から指先、首元までの全身にゴム質の素材がぴったりフィットしていた。それが外皮と呼ばれもので、白色と桜色のシンプルなカラーリングで纏められていた。朝倉でんき、丸満図書、フラワーながさわ、ミツバ模型……。少女の身体をレーシングスーツに見立てたように、身体の各部に様々なスポンサーロゴが直接入れられていた。

カメラアイのレンズのフォーカスが機敏な動きで瞬時に頭部に合わせられ

ると、繊細な指先で髪を整え表情をチェックする。姿見にはポニーテールに髪を結った少女が、笑ったり怒ったりする姿が映し出された。

『よしっ、OK！』

納得したのか満足げな表情を浮かべる。その声は先程と違って抑揚がハッキリとあり意志が感じられる。カメラアイの瞳が次に捉えフォーカスを合わせたのは壁に掛けられたセーラー服だった。

セーラー服には刺繍で名前が入れられている。

櫻井まどか

それは、彼女が〝人間の少女だった頃〟の名前だった。そして、レーシングヒューマロイドであるSH360RH0423MSにとっては自身の改造素体となった少女の名前にすぎない。

手を伸ばし、夏用の軽やかな白いセーラー服に袖を通していく。セーラー服は白いトップスに水色の襟があって青色のリボンが胸元で美しく結ばれていた。トップスの襟にはアクセントとして白いラインが涼しげに入れられていた。プリーツスカートも襟と同じ水色だ。白色と桜色の手脚がトップスの袖先、プリーツスカートの先から露わになりスポンサーロゴが見え隠れしている。いくつかのスポンサーロゴはセーラー服の上からも透けて見えていたが彼女にとって特別な意識の対象ではなかった。

鏡に映る自分の姿を見つめる少女のカメラアイの瞳にはわずかに戸惑いが混じっていた。セーラー服の胸元に刺繍で刻まれた「櫻井まどか」という文字を見る度に彼女の機械化脳が過去の人間だった頃の記憶を呼び覚ます。櫻井まどかがレーシングヒューマロイドの素体としてその身を捧げたのは三ヶ月ほど前のことだ。たった三ヶ月前のことなのに遠い過去の記憶のように感じる。

人間だった頃の自分、笑顔を浮かべて友達と過ごした日々。けれど今の彼女はもうその櫻井まどかではない。SH360RH0423MS、レーシングヒューマロイドとしての自分が現実だ。

心の奥底にわずかな揺らぎを感じながらも、少女はその名前を確認することで再び自分の役割を再認識した。櫻井まどかでありながら、櫻井まどかでない存在。彼女の中に残る人間の記憶や感情とレーシングヒューマロイド、ロボットとしての現実が今の彼女を形成している。

「櫻井まどか……」

彼女は静かに名前をつぶやいた。

「……いや、違う。私はSAKURA Veloce所有のレーシングヒューマロイドSH360RH0423MS。櫻井まどかじゃない。私は自分の意志でレーシングヒューマロイドになったの。櫻井まどかは私の素体名。私は櫻井まどかの意思を継いでレースに勝つレーシングヒューマロイド」

少女は視線をセーラー服から引き、再び鏡に映る自分の姿を見つめた。彼女の視界には日付、時間、通信状態、身体の状態などの情報が常に表示されており、考えるだけでそのアイコンを操作して様々な情報にアクセスすることができる。その表示越しに見える風景が彼女にとっての日常だ。

深呼吸を一つしてから少女はプログラムされたかのようなブレのない規則正しい足取りでゆっくりと部屋を出た。

視界の片隅に表示された情報を確認しながら足を運ぶ。木製の手すりに手を軽く添え、ゆっくりと一段一段降りていく。古い木製の階段は微かに軋む音を

立て少女の体重をしっかりと支えていた。彼女の機械仕掛けの足音は、普通の人間のものとは異なり、少し硬質な響きを持っていた。

階段を降り切ると、少女は視界に広がる店内の風景を捉えた。自宅の一階にある喫茶店「サクラベローチェ」だ。元レーシングヒューマロイドの母親が引退後に開いた喫茶店だ。店内はまだ開店前で、母親がカウンターの準備をしている姿が見えた。店内の一角には母親の現役時代の写真やトロフィー、そしてサーキットでの栄光を物語る数々のメダルが飾られていた。

レーシングヒューマロイド SH200RH1014SS。櫻井咲良という素体名をもつ彼女は櫻井まどかの母親にして SAKURA Veloce という個人チームを立ち上げ数々のレースで活躍したレーシングヒューマロイドだ。

『おはよう、まどか。今日も元気そうね』と咲良が微笑む。

カウンターのテーブルを拭く彼女はまどかと同じように全身をぴっちりとフィットする白と桜色を基調としたゴム質の素材に包まれそのボディラインを露わにしていた。まどかの外皮のデザインは母親である咲良譲りのものだった。外皮の上に直接エプロンを着ていてスポンサーロゴさえないものの肩にはチームロゴがプリントされていた。レーシングヒューマロイドの横顔と桜の花びらを組み合わせ SAKURA Veloce の文字が添えられたチームロゴはまどかの肩にもプリントされている。

『おはよう、ママ。今日は学校の後、まっすぐ神楽さんのところに行く予定だから』

『走行ユニットの調整でしょ？　麻里奈から聞いてるわ。遅くなりそうなら連絡入れてよ？』

まどかはテーブル席で咲良が作ってくれた朝食を食べながら、視界の中に表示されたアイコンからテレビ視聴のためのアプリを立ち上げる。日付、時間、通信状態、身体の状態など様々な情報が表示された視界の中に新たに小さなウインドウが開くと朝の情報番組が映し出された。

『はーい。ねぇ、ママ。やっぱり、朝ご飯は食べないと駄目？』

『ダーメ。まどかがヒューマロイドになるための条件、もう忘れたの？』

『朝の行動ルーティンに朝食を取ることが設定されてるんだもん。忘れるわけ無いじゃん。でもさ、私達ヒューマロイドは人間だったときみたいに食べなくても充電だけで生きていけるし、食べる機能はあるけどそのままゴミになるだけだからもったいない気がするの』

咲良はふっと息を吐き、カウンターに手をついた。

『まどか、あなたがヒューマロイドになるときにいくつかの条件を出したのは先にヒューマロイドになった私の経験からよ。食事は栄養補給のためだけにあるんじゃなくて、心の健康を保つためにも重要なの。私達、ヒューマロイドはロボットだけど人間を素体にしている以上、人間だった頃の記憶と心を持っている。これはヒューマロイドの大きな特徴よ』

まどかが自分の言葉をじっと聞いているのを見て咲良は更に言葉を続けた。

『ヒューマロイドになっても、心の成長は止まらないわ。あなたが感じる喜びや悲しみ、驚きや感動は、すべて人間だった頃と同じように大切なものなの。

食事をすることは、その感情を豊かに育てる手助けをしてくれるの。だから、普段の生活はできるだけ人間だった頃と同じように過ごして欲しい。そして、三食ちゃんと食べること。これは、あなたの心を守るための大切な約束なのよ』

『うん……』

まどかが静かに頷くと、咲良は少し視線を鋭くしながら続けた。

『そして、まどか。私たちはレーシングヒューマロイドよ。レースに勝つためには心と体のバランスが非常に重要なの。食事を取ることで、心の安定を保つことができる。これは、最高のパフォーマンスを発揮するために欠かせないのよ。私も現役の頃、何度もこのことを実感したわ。心が乱れるとどれだけ身体が完璧でもベストなパフォーマンスは出せない』

まどかは真剣な表情で咲良の言葉を聞き入る。

『レースでは、ただ早く走るだけじゃなく心の強さと集中力も試されるの。食事をきちんと取って、心と体のバランスを保つことでレースのときに最高のパフォーマンスを発揮できるの。だから食事を怠らないで。充電だけでは補えない心の栄養が必要なのよ』

まどかは深く頷いた。

『うん、わかってる。最高のパフォーマンスを出すためにも、ちゃんと食べるね。ママ、ありがとう。これからも頑張るから、見守っててね』

桜はまどかの決意を感じ取り、優しく微笑んだ。

『それでいいの、まどか。食事を通じて心と体をしっかり保って今日も全力で頑張ってね。私はいつでもあなたを応援しているわ』

まどかは母親の愛情と教えを胸にしっかりと朝食を取ることを決意した。彼女は母親の期待に応えるべく、そして自分自身のために心と体の健康を大切にすることを誓った。

『そういえば、最近新しいメニューを考えているんだけど、試してみる？』

先程の真面目な雰囲気とはうってかわって咲良が問いかける。

『うん、どんなメニュー？』

まどかの目が期待に輝く。

『フルーツをたっぷり使ったパフェなんだけど、朝食にもいいかもしれないと思ってね。ビタミンたっぷりで、見た目も可愛いのよ』

『それ、すごく美味しそう！　試してみたいな』

『じゃあ、明日の朝に作ってみるわね。楽しみにしていて』

咲良はそう言いながら、空いた皿を片付け、次の準備に取りかかった。まどかは満足げに食事を終えると、咲良に感謝の気持ちを込めて微笑んだ。

『ありがとう、ママ。今日も頑張ってくるね』

『行ってらっしゃい、まどか。気をつけてね』

※

朝食を終えたまどかはサクラベローチェの扉を開けてとそに出ると夏の朝の爽やかな空気がまどかを包みこんだ。商店街は朝の静けさの中で店主たちがそれぞれの店を開け始めている。商店街を通って学校に向かう途中、早速彼女はいつものように店主たちから声をかけられる。

「まどかちゃん、おはよう！」

『おはようございます、朝倉さん』

最初に声をかけてきたのは、商店街唯一の電気屋の店主だった。店の看板には青い電気メーカーのブランド名とその隣に朝倉でんきと店名が掲げられていた。白髪混じりの髪を短く刈り込んだ店主に対してまどかはにっこりと笑って応える。彼はまどかのスポンサーの一人だ。

「昨日のレース見てたよ。いい走りだった！　この調子で今シーズンも頑張ってくれよ！　それとなにか必要なものがあったら、いつでも言ってくれよ」

『ありがとうございます！　私、この調子でがんばりますね！』

「期待してるよ」

店主はニカッと笑うと親指を立ててまどかを激励した。

「おはよう、まどかさん」

次に声をかけてきたのは物腰柔らかい雰囲気を醸し出す丸満書店の店主だった。店の入口には新刊のポスターが貼られ店内には本の香りが漂っている。

『おはようございます、丸山さん』

『新しい本が入荷したんだ。時間があったら見においで。特に君が好きそうな新刊がいくつかあるよ。それとこの間、頼まれていた本は午後には入荷すると思う』

『それは楽しみです。学校の帰りに寄らせてもらいますね！』

まどかは目を輝かせて答えた。

「待ってるよ。今日もいい一日を」

丸山さんはにこやかに見送った。

「まどかちゃん、おはよう！」

ミツバ模型の店主がシャッターを開けながら声をかける。店の外からも分か

るようにディスプレイされたガラス棚にはミニ四駆や鉄道模型が並んでいた。

「おはようございます、三葉さん！」

まどかは元気に答える。

「そうそう、まどかちゃんの新しいグッズを考えたんだけどさ、これなんかどうかな？」

そう言って店主が一旦店内に戻り、自信気な表情で持ってきたのはサーキットで疾走するまどかの写真を使ったクリアファイルだった。

『おぉー。文字の感じとか凄くかっこいいです！ありがとうございます！』

「他にもいくつか作ってみたんだ。時間があるときでいいから今度見てもらえないかな？」

『いいですよー。でも今日は予定があるのでまた今度で。それでは！』

「いってらっしゃい」

まどかは軽く手を振ると学校に向けて歩き出した。商店街の店主達との朝のコミニュケーションは日課で、まどかにとって商店街の店主達は小さき時から自分を支えて応援してくれる家族のような存在だった。レーシングヒューマロイドとなった自分のスポンサーになってくれたのもこの商店街の店主達だ。

『やばっ、ちょっと急がないと間に合わないかも……』

少し駆け足で学校に向かう。まどかは商店街のみんなの期待に応えるためにも次のレースも頑張ろうとの決意を胸に学校に向かうのだった。

人造魔法少女　エスクティア

姫宮セリス

世界は侵略を受けていた。
突如宇宙から飛来した謎の隕石、そしてそこから現れる黒い人影。
それがいったい何なのかはよくわかっていない。ただ判明しているのは、その黒い人影は人間に敵意があり攻撃してくること、そして、同時期に誕生が確認された、魔法少女と呼ばれる者の攻撃のみが有効であることだった。
そして、この日も黒い人影……侵略者が現れていた。
「出たーっ！　今日も出たー！」
「向こうの信号機あたりに出たぞー！　逃げろー！」
昼のビジネス街に現れた黒い人影……侵略者に、人々は声を出しながら逃げ出していく。
侵略も日常的になってくると逃げる側も慣れるようで、みんな同じ方向にと走り出し、無駄なく避難が進んでいく。
そんな中、逃げる人々の流れとは逆を向いた二人の少女。
「いくよ、ミカ」
「ええいきましょう、アイ」
近隣の学校のセーラー服を身にまとった二人の少女、アイとミカ。
この状況下で避難をしない彼女たちこそ、隕石の飛来と同時期にその力を発現した魔法少女なのである。
お互いに顔を合わせて頷いた二人の少女は、線対称になるような動きで懐からコンパクトを取り出し、天に掲げる、その時だった。
「そこまでよ！　悪の侵略者たち！」
突如響き渡る、彼女たちとは違う少女の声。
上から響くその声に、アイとミカは声がした方……やや古めの雑居ビルの屋上へと目をやる。
そこに立っていたのは、ブレザー型の制服を身にまとったベージュ色をしたストレートロングヘアの少女、その右手には六角形をしたコンパクト大の緑のクリスタル。
「あの制服って隣町の……じゃない、あのクリスタル！」
声を上げるアイ。
彼女は、ベージュ髪の少女が手にしている六角形のクリスタルに指をさし。
「あのクリスタル、私たちのこれと同じような感じがする！」
「変身！」
アイの気づきとほぼ同時、勇ましい掛け声を上げたベージュ髪の少女はクリスタルを天にと掲げる。
次の瞬間だった。
クリスタルからまばゆい光が発せられ、彼女の身体が光にと包まれる。
着用していたブレザーが光の中で分解され、服の下から現れたのは艶やかな肌ではなく、銀に光る外骨格の機械の身体。その胸の部分が開き、内部の基盤やメーターといった精密機械が存在する中央部に彼女のクリスタルが納まり、接続される。
「魔法少女エナジーシステム起動！」
胸の中央部にはめ込まれたクリスタルに輝きが生まれ、メーターの数値が一気に上昇する。そして、繋がれた配線からエネルギーの光が機械の身体に流れ込む。
そのままエネルギー光は機械の身体を覆うように彼女のコスチュームを形成していく。
白を基調としたハイネックのハイレグレオタード、腰のパーツから横にと伸びる青いミニスカート、身体の各所にはスカートと同色の機械の装甲を纏って

おり、最後に胸元のパーツの中央が開き、クリスタルが露出する。
「システムオールグリーン！　人造魔法少女エスクティア見参！」
くるっと一回転して決めポーズを取り、侵略者を指さし名乗りを上げる、人造魔法少女エスクティア。
「さぁ、侵略者たち、かかってきなさい！」

「あれは、魔法少女っ？」
目の前で繰り広げられた光景に驚きの声を上げたのはアイ。
「あれはある組織が極秘に開発していたという、人造魔法少女……。完成していたのね」
驚くアイとはうって変わって、冷静につぶやくミカ。
「人造魔法少女？　魔法少女じゃなくて？」
「魔法少女を研究する組織が、サイボーグ化技術で人工的に魔法少女の力を扱えるようにする計画よ」
「へー、そんなのあるの？」
アイの言葉に、ミカは自分のコンパクトを見つめて。
「私たちはこの変身コンパクトの力を自分の意志で開放することができるじゃない、でもその開放を機械仕掛けでしてしまう、それがあの子よ」
そういって、視線をエスクティアの方にと向ける。
「それって誰でも魔法少女になれるってこと？」
「そうね、でも流石に脳以外は全て機械に改造しているって聞くわ。そこまでしないと魔法少女にならないんじゃ、ちょっとどうかしらね？」
ミカに言われ、アイは少し考えて。
「それだと、もう少女じゃなくてほとんどロボットじゃない？」
「そうもいかないのよ、知ってるでしょ？　魔法少女は最終的には心がモノを言うってこと、だからどうしても脳は生身じゃいといけないわけよ。そこばっかりは代用できないわね」
その言葉にアイはうんうんと頷く。
そしてミカはエスクティアの方をじっと見て。
「脳以外は人工物。だから、造形も思うがまま……。可愛いわね、食べちゃいたい」
舌なめずりするミカを、アイは見て見ぬふりをして。
「あっ、動くよ！」

アイとミカが視線を向けるその先、黒い人影の侵略者。
バスケやバレーの選手を思い起こさせるすらりとした長身であるが、まるで全身タイツを着ているかのように全くの黒であった。そして、髪も顔のパーツもない首部分をエスクティアの方に向け。
「わぁっ！」
その光景に声を上げるエスクティア。
侵略者は一度の跳躍で6階立てのビルの屋上にと飛んできたのだ。
「っと、来たわね！」
すぐさま態勢を整え、エスクティアは迎撃の構えを取る。
だが、侵略者もすぐに彼女を見据え、言葉も発さずに行動に移す。
文字通り、黒い人影の右腕が伸び、彼女へと襲い掛かる。
「っ！」
次の瞬間、彼女は右へと飛んだ。
同時に彼女の後ろにあった給水塔が直線的に伸びてきた侵略者の右腕に貫かれる。鋼鉄で出来ていると思しき給水塔を軽々と貫く力、普通であればたじろいでしまうところだが。
「もらったわ！」
一気に前にと駆け出すエスクティア。

伸びてきた右腕が戻る前に、彼女は一気に勝負を決めに来た。
胸のクリスタルが輝きを増すと同時に右腕が開き、供給されるエネルギーによって中のモーターが勢い良く回りだして放電を開始する。
「エスクティアマジカルスラッシュ！」
「――――！」
気合一閃、光に包まれた右腕を振り抜くエスクティア。
それは侵略者の胸を貫き、表情なき顔から声なき叫びをあげる。だが。
「くぅっ！」
エネルギーや放電に耐えれなかったのか、エスクティアの右腕も爆破を起こし、破損したフレームが飛び出しオイルが漏れ出す。
「試験運用しかしてなかったから、流石に実践だと違うわ……でもっ！」
のたうち回る侵略者に向かって彼女は再び走り出し、残った左腕も右腕同様、放電を開始する。
「滅びなさい、侵略者！　エスクティアマジカルスラッシュツヴァイ！」
振り抜いた左腕が、今度は侵略者の顔を撃ち抜く。
もはや苦悶の叫びも上げることなく倒れ込み、そのまま塵となって消えていく侵略者。これが侵略者と呼ばれている黒い人影の断末魔であった。
そして勢いよく駆け抜けたエスクティアは。
「あ、やっばーい！　とまらないー！」
侵略者の顔と、屋上の柵を貫き、地面に向かって落ちていったのだ。
「やっちゃったなー」
ため息交じりにエスクティア。
落ちた衝撃で左足は砕け、太ももから下は完全に破砕、そこからも破損した金属のフレームが飛び出し、オイルが漏れ出していた。
脳以外すべてを人工物に置き換えていたため、躊躇なく左足を犠牲にすることが出来て事なきをえたエスクティア、機械の身体のために痛みはない、しかしこの様子では立ち上がることすら難しい状態であった。
「システムチェック実行」
目を瞑った彼女の視界に、システムチェック項目が映し出される。
魔法少女エナジーシステム正常。両アームサーキュレーター負傷。左脚部損傷大。
「ダメかなぁ、回収呼ばないとかなぁ」
座り込んだ状態で破損部分をじっと見る。
そこに。
「大丈夫？」
声を掛けられ顔を上げたその先には、二人の少女。
青いミニスカドレス風の衣装を身にまとった魔法少女と、ピンクの同じデザインの魔法少女。それは、先ほどまで彼女のことを見ていたミカとアイであった。
本職の魔法少女である二人の変身後の姿である。
「だ、大丈夫でですす」
慌てて声を出すエスクティア。
「声、震えてるよ？」
「だだだだ、だいじょううぶぶぶ」
彼女の顔を覗き込む、ピンクの魔法少女アイに、声がさらに震えるエスクティア。
それもそのはず、彼女は魔法少女に憧れを抱き、人造魔法少女となったのだ。
その憧れを抱いた魔法少女が目の前に現れて自分の顔を覗き込んでいるのだから。
そして、混乱した脳の情報が機械の身体に影響を及ぼす。
瞳のレンズの焦点が狂い、何度も合わせようとモーター音を立てレンズが動

く。

胸のコアユニットが必要以上に熱を持ち、内部のメーターが激しく上下する。

落下で受けたダメージ以上に、こちらの方が深刻なエラーとシステムプログラムは告げる。

「全然大丈夫じゃなさそうね？　うわさに聞いた機械の魔法少女、じっくりと見てみたかったわ」

青の魔法少女、ミカが覗き込む。

「じ、じっくり？　わ、私の身体をっ？」

憧れだった二人の魔法少女が目の前に揃い、さらに自分の身体をじっくりと見たいとか言われたエスクティア、そのドキドキは限界に達していた。

「そう、じっくり」

「ああっ！」

にこやかにほほ笑むミカ。その笑顔で限界を超えたエスクティアは、胸のクリスタルが納まったコアユニットがオーバーヒートし、機械の身体中から煙を吐きだし後ろに倒れる。

「あらあら、やりすぎちゃったかしら」

「ミカ、興奮させすぎー」

ジト目でミカを見るアイ。

しかしミカは。

「このまま放っておくわけにもいかないし、持って帰りましょ。もう少し、この身体見てみたいし」

「もう、ミカったら。また悪い癖ー」

あきれた様子のアイを尻目に、ミカは意識を失ったエスクティアを背負い。

「ふふ、楽しませてもらうわよ、あなたの身体」

怪しい笑顔を浮かべ、アイとともにその場から去っていった。

この光景を映し出すドローンに手を振り、拾った小石を一つ投げつけて。

※

ドローンが破壊されて画面が砂嵐となるところで、エスクティアの映像が終了、そして見ていたモニターが壁へと収納される。同時にそこへ現れたのは白衣の女性研究者であった。

「このように人造魔法少女計画は無事に成功した、が、肝心のエスクティアは魔法少女たちにお持ち帰りされてしまった。なので君は、その二号となるのよ」

にこやかに顔を覗き込む白衣の研究者。

「何、心配はいらないわ。エスクティアが成功したのだ、人造魔法少女サイボーグ化技術は確立されている」

動こうにも、身体は固定されて動けない。

同時に手術用の無影灯に光が点く。

「目覚めたら君は美少女サイボーグ魔法少女の二号機だ、とても可愛くなるわよ。名前は……それは、後で良いか」

そして研究者は、麻酔のスイッチを入れる。

「それじゃおやすみ、新時代の魔法少女君」

遠ざかる意識、次に目覚めたとき、その身体は新たなサイボーグ体、新たな人造魔法少女となる。


機械式少女合同誌4

あとがき

寄稿者名／あとがき	Twitter（X）	pixiv
紅矢（こーやん） @koyan1490／https://www.pixiv.net/users/147594 この度はどうもありがとうございました！特定の部分がメカバレしている良さを描きながら知ることができました。		
nezumi @nezumi71616159／https://www.pixiv.net/users/2051408 今回はイラスト１枚だけですが、参加させていただきありがとうございます！		
ねもねこ @nemomo5／https://www.pixiv.net/users/3039825 参加させていただきまして誠に恐縮でございます。ありがとうございました。皆様に幸多かれと願わずにおれません		
アンデ カナタ (andekanata) @andekanata／https://www.pixiv.net/users/17162099 コミックを作って出版するのはとても難しい仕事だった。超人的な努力の賜物で、最終的には、特に朝食時の母と娘のストーリーが気に入った。楽しく、リラックスできるストーリーでした。合同誌に参加させていただき、ありがとうございました。		
ブローサーワン @burousa01／https://www.pixiv.net/users/78690340 参加させて頂きありがとうございました、今回は寝取られロボ化ものを描いてみましたよ？いかがだったでしょうか。		
ヤマカガシＢ @yamakagashiB／ 再び参加の機会を頂きありがとうございます！自分の好きな要素を詰め込んでみましたが、喜んで頂けたら幸いです！		
かがりー @kagari0252／https://www.pixiv.net/users/20285717 今回も参加させていただきました！ありがとうございました！最近はずっと夏バテ気味でちょっと動くとすぐ疲れて寝てしまいます……		
ＫＥＢＯ @KEBO_CH／https://www.pixiv.net/users/4570166 参加させて頂きありがとうございました。ワンパターンながら大好きな連続連鎖落ち系を書いてみました。		
Kyouma @kyoushou_kyouma／https://www.pixiv.net/users/3372198 ロボイリスさんところの合同誌への参加は今回で５回目となりました。今回もサイバーな要素を詰め込んだ作品に仕上がったと思います。		
rui76 @rui76_4_pixv／https://www.pixiv.net/users/1811858 ダークな雰囲気の作品ばかり上梓していたので、今回は趣を変えて、明るく楽しい機械化作品を書いてみました。他の方の投稿作品と併せて、楽しんでいただけると嬉しいです。		
刈野寧夢 @Kao08751753／https://www.pixiv.net/users/5717917 はじめまして、刈野寧夢（かりの ねいむ）と申します。尊敬する創作者の皆さんと一緒の合同誌に参加することができて、とても嬉しいです。		
ロボイリス @iris_robot／https://www.pixiv.net/users/582727 機械化後に女の子なら機械化娘ですと言い張っています。よろしくお願いいたします。起承転結を書こうとすると長くなるなぁと最近思います。		
ハカソシ @hakasoshi／https://www.pixiv.net/users/422629 今回もネタには大変迷いましたが、未完成フォルタに眠っていた作品を何とか仕上げてみました。参加させて頂き本当にありがとうございました！		
姫宮セリス @princess_celes／https://www.pixiv.net/users/61793 みんなみんな美少女サイボーグに改造されればいいと思っていますわ、私もなるからみんななろう。		

編集後記・奥付

遅い梅雨、熱帯地方のように雨が降り注ぐ中でと編集後記を書いています。皆様いかがお過ごしでしょうか。「機械化娘合同誌 4」を御覧いただきましてありがとうございました。また、参加いただきました皆様、ありがとうございました。1 年ぶりの機械化娘合同誌でございますが、いかがだったでしょうか。

同人誌という媒体で残すことは意味があるものと思いますが、近年の SNS 台頭の中、すぐに感想や意見が来ない、あるいは来たとしても SNS よりも少ないという中で、やはりこう今時の言葉でいう「タイパ」が良くないのかもしれません。4 になりましたが、どういう形で今後やっていくのか考える時期なのかもしれません。

イラスト・小説等を寄稿いただいた皆様の他、無茶振りを真正面から受けてくださった表紙・裏表紙・挿絵等を頂いた方々にも最大級の感謝を。

またいつかどこかで。
ありがとうございました。

合同主催　ロボイリス



表紙イラスト	とうちょく （@kosei_makino／https://www.pixiv.net/users/164111）	
裏表紙イラスト	body （@body_lj／https://www.pixiv.net/users/792069）	
友情出演 （12ｐ＆本文挿絵）	あフまろ２Ｇ （@maru_mui／https://www.pixiv.net/users/31703900）	

敬称略

奥　付

機械化娘合同誌４

発行日：令和６年８月 12 日　初版（C104）
発　行：新いりす亭（http://blog.livedoor.jp/iris_roop/）
合同主催：ロボイリス
発行者：いりす
連絡先：iris_roop@outlook.jp

※本書の無断転載・複製・複写を禁止いたします。ネットオークション、フリーマーケット等への出品はご遠慮ください。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

紅矢（こーやん）
nezumi
ねもねこ
アンデ カナタ
ブローサーワン
ヤマカガシB
かがりー
ＫＥＢＯ
Kyouma
rui76
刈野寧夢
ロボイリス
ハカソシ
姫宮セリス
（掲載順・敬称略）



桜のキモチ

かがりー

「ただいま」

サラリーマンの武藤司は、愛する妻がいる自宅に帰宅する。普段なら、妻の桜が出迎えてくれるはずだが……

（出迎えにこない……あっ、またか……）

一瞬、司は考えたがすぐ、出迎えてこない理由を導き出した。ため息をつきながら、靴を脱ぎ中へ入る。

あたりを見渡すと、キッチンにお皿を持ったまま固まったエプロン姿の桜を発見。

「おーい、桜……さ・く・ら！」

桜に呼びかけるが返事がない。優は桜に近づき、顔を見る

（やっぱりか……）

彼女の瞳には、生気を感じられない黒く沈んだ色をしていた。それを確認した優は、コードのようなものをコンセントにつないで持って行き、桜の首筋に刺した。すると、彼女の瞳に光が戻った。

「ただいま」

先ほどと同様に、彼女に帰宅したことを伝えた。

『あっ、お帰りなさい！ 司くん』

人工的な響きを持った声で、何事もなかったように笑顔でそう言った。

「また、充電切れになってるじゃないか」

『わっ、ホントだ！　ごめんね。また忘れてた！』

「絶対充電がなくなる前には通知が来るはずだろ」

『通知は来ているんだけどね。ついつい後回しにしてしまい……あはは。でもでも！　びっくりしたでしょ！』

「もうだいたい分かってるよ。はぁ、まったく……」

桜は、「あはは……」と反省しているのか分からない態度だった。

※

見て分かる通り、桜は人間ではない。いや、人間であったというべきか。彼女はサイボーグ化手術を行い、体を機械に変えていた。理由は彼女曰く、「今回の誕生日プレゼントは機械になった私！」だそうだ。そんな彼女を俺は愛している。

その後、桜の作った夕食を食べたあと自室にいると、コンコンと扉をノックし、桜が部屋に入ってきた。桜の手には何やらタブレットのようなものを持っていた。「どうしたんだ？」と質問すると、桜から驚きの言葉を発した。

『司くん、私機械になったからね～　司くんに操られてみたいんだ！』
　桜は頬を赤らめながら言った。

「操られてみたいって、どういうことだ？」
　司は桜の言葉に驚いた。桜はタブレットを優に渡し、『これを見て』と言った。
　タブレットには、桜の体の各部分の機能や設定が表示されていた。優はそれを見て、目を疑った。
「これは……まさか……」
『そうなの。桜の体は、司くんの好きなようにカスタマイズできるの。感度や反応や声や動き、人格だって……全部司くんの思いのままだよ』
　ゴクリとつばを飲む優。
『この前、桜の改造を担当してもらってた人に聞いたんだ～。男の人って一度はロボットを操るのを夢見るって。今の桜はロボットだし、これで優くんの夢も叶うでしょ！』
「お前さ……俺もう子供じゃないよ……」
『でもでも！　一度はあるんじゃない？ なんかこう、進めー！ って自分の意のままにロボットを動かすの』
　確かに男ならロボットアニメなどで操縦する主人公に憧れを持つことはおかしいことではない。
『桜もどんな感じか体験してみたいの！　小さい頃はお人形遊びとかよくやってて、お人形さんの気持ちってどんなのだろうって！』
「それとこれとは……」
『それに！　司くんになら……その……えっちなことだって……されたいし……』
上目遣いで司を見つめる桜。数分間の沈黙。
（そんな顔で見つめるなよ……可愛すぎるだろ……!!　でも……）
「ダメなものはダメ！　ほら！　充電スタンドに戻りなさい！」
『むむむぅ～　司くんのいくじなし！』
　桜は頬をふくらませながら、部屋を後にした。
「まったくもう……おれの気持ちもわからずに……」
　桜にいくじなしと言われたことに傷つきながら、目を閉じた。

※

　次の日、いつものように会社から帰宅した司。
　部屋には手を前に揃え、素っ裸の桜がはずかしげもなく立っていた。
「どういうことだ……!?」
　あまりのことに頭が追いつかない。

　テーブルになりやら手紙と昨日のタブレットが置かれていた。
　手紙にはこう書かれていた。

司くんへ
昨日は突然あんなこといってごめんね。
司くんはいつも私のことを思ってくれているから、遠慮してくれたの桜分かってるよ。
でも、桜も知ってる。あのとき、司くん実はすごく興奮してたでしょ。
ううん、その時だけじゃなくて桜が機械になってから桜を見るたびにいつもより鼓動が早くなってる。
桜も機械になって興奮してくれてる司くんにドキドキが止まらなくて、わざと充電切れになったりして、めちゃくちゃにされたいと思ってる。
けど、司くんは優しいから我慢してくれてる。
だから、桜の気持ちが本気だってことを伝えるために、昨日のタブレットを使って自分で自分に命令を与えてみることにしたの！
今日だけは、自我もなく司くんのためだけに動くロボットになりなさいって。
きちんと明日になったら元通りになってるから、今日はロボットの桜を思う存分使ってね。もちろんアッチのお世話も……！

「桜……」
　桜の目の前に立ち、呼びかけると……
『スリープモード解除、オカエリ・サナイマセ・司サマ』
　桜は感情の一切感じられないエコーのかかった声で返事をした。
「桜……だよな？」
『ハイ・私ハ・桜デス』
「今のお前は何なんだ……」
『ハイ・現在・ノ・私ハ・素体人格機能ガ・オフ・デフォルトノ・対話システム・ノミ・作動中・デス』
「本当にロボットになってるんだな……」
　司は固唾を呑む。心臓の鼓動が次第に高まり、下の方が沸騰するように熱くなる。司のアソコの部分は、ズボンの上からググッっと大きくなり、テントが張られていた。
　桜は首を下に傾けて、その部分をアイカメラでキュイキュイと注視し、
『ピピッ、司サマ・ノ・性的興奮ヲ・検知・シマシタ』
「なっ……！」
　自分の状態を解析されてまたもやドキッとする司。
『ナンナリト・ゴ命令・クダサイ』
　桜は、首を戻し司の方を見つめる。その瞳には感情はなかったが、「私を使って！」という思いが感じられたような気がした。
「ハァ……ハァ……」
　司の息づかいが荒くなる。喉が渇く。
『ナンナリト・ゴ命令・クダサイ……ナンナリト・ゴ命令・クダサイ……』

　プツン……と司の心の中で何かが切れた。

『ナンナリト……』

理性を抑えきれず、バタン！ っと桜を床に押し倒す司。勢い良く床に倒れたが、桜は一切痛そうな素振りを見せない。

「もう……もう我慢できない……‼　そこまで言うなら……望み通り思う存分めちゃくちゃにしてやる……！」

司は顔を真っ赤にして、桜の口元にキスをした。荒波のように深いディープキス。

通常であれば、苦しくて窒息してしまいような強いキスだが、桜は表情を変えない。

「ぷはっ……高まってきたぜ……セックスだセックスするぞ……女性器準備しろ」

『カシコマリマシタ、人工女性器開放、潤滑油放出』

ウィーンウィーンと、桜の下腹部からシャッターが開かれる。また、内部からもモーターのような駆動音が鳴る。

司もベルトを緩め、着ていたズボン・パンツを地に落とす。すると、シャチホコのようにそそりったブツが顕現した。パンツは透明な液体でべっとりと染みていた。

『人工女性器ノ準備ガ完了シマシタ、イツデモ挿入可能デ……』

報告が言い切る前に、司はそのブツを桜に挿れる。

『ピッ、男性器ノ挿入ヲ検知……最適ナサイズニ調整……』

パンッッッ！　パンッッッ！

腰の一振り一振りが太鼓をたたくように桜の中で強く響く。乱暴に、乱雑に。そのため、それまで一切感情のなかった桜もブルっと不自然に体を震わせたり、アッッッと発していた。

「桜……‼　桜……‼」

『ハイ・私ハ・桜・デス・ハイ・私ハ・桜デ……』

「で、出るッッッッ‼」

ドピュッッ‼　ビュルルルッッッッ‼

『し……射精・ヲ・検知』

桜の体がビクビクと震える。

「ハァ……ハァ……」

なかなか呼吸が整わない司。

桜はウィーンと体を起こし立ち上がると、

『ゴ利用・アリガトウ・ゴザイマ・シタ』

さっきの手を前に置いた姿勢に戻った。

「おい……待て……まさか……こんなことしといて一回で終わると思ってないだろうな……」

『ハイ、私ハ・司サマ・ノ・所有物・デス。何度デモ・ゴ使用・可能・デス』

まだまだ使ってねと言わんばかりの桜。

「フッ、そうこないとな……」

司の闘争心に火がつく。

「今度は四肢の接続を切れ。オナホとして使ってやる」
『カシコマリ・マシタ。四肢・ノ・接続ヲ・解除』
彼女の体からプラモデルのようにガコン！ っと両手、両足が外れ、地面に落ちる。
両足が外れたため、その勢いで胴体も地面に落ちる。
『ピッ、エラー・左腕ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・右腕ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・左腕ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・左脚部ガ・接続・サレテ・イマセン、エラー・右脚部ガ・接続・サレテ・イマセン、ビビッ！　自律行動・不可・デス。コノ・状態デハ・一部命令ガ・遂行・デキマ・セン』
四肢を外され、身動きできないとアラーム音がなる。
『ビー！　各パーツヲ接続シ、再起動シテクダサイ、ビー！　各パーツヲ接続シ、再起動シテクダサイ』
「うるさい。今のお前はロボット以下のオナホだ。俺を気持ちよくさせる道具でしかないんだよ。だから、お前も俺を気持ちよくさせることだけ考えればいいんだよ」
『ビー！　各パーツヲ……ピッ、カシコマリ・マシタ。アラート停止、自己認識ヲ・オナホ・ニ・変更。司サマノ・男性器ノ・分析ヲ・オコナイ・マス』

その後も二人は何度も何度も性行為に励んだ。

「もう限界だ……出るもんも出ねぇ……」
フラフラになりながら、ベッドに入る司。司にはもう活動するエネルギーは残ってない。
「桜、こっちにきな。今日は俺の所有物だからな。一緒にベッドに入って、そのまま抱き枕になれ」
『カシコマリマシタ』
スッと司の隣の中に入る桜。そして、
『ワタシハ抱き枕ニナリマス』
そう言うと、桜の瞳には光がなくなり、お人形さんのように微動だにしなくなった。
「ほんと可愛いな……いい夢見ろ……よ……」
チュッと頬にキスをすると、気を失うように司はそのまま深い眠りに入った。

※

『ありがとう、司くん。私も大好きだよ。チュッ♡』

リボンノガクエン

KEBO

思えば、あの時からそれが始まったのだと思います。

学園のケイエイがヤバいという噂はずっと流れていて、もしかしたら自分たちの下の代はもう募集停止するかもしれない、と言われていました。ですがある日、理事長室の話を盗み聞きしていた子たちから、その話を聞きました。

「何とか言う会社が、学園を丸ごと買い取ったらしい。学校の体制そのものは変わらないから大丈夫」

それを聞いたわたしたちは、どうやら学園が存続できるようだとひとまず安心しました。わたしたちの学園は、全寮制の小さな学園です。何の行事をするにしても、全学年合わせたとしても少し寂しい人数です。それが減ったとしたら、たとえ卒業できたとしても思い出が寂しいものになってしまいます。

その話を聞いてから、一週間ぐらい後だったと思います。

保健室に、助手の方が来られました。ランさんというその方は、体のほとんどを機械の義体にしています。話によれば、難病で、そうする他なかったそうで、その義体を作っているのが、学園を買い取ったという会社だそうでした。つまりはその会社のコネで来られた方なのですが、明るい性格なこともあり、わたしたち生徒とはすぐに打ち解けました。

しばらくして、学園の裏山で工事が始まりました。裏山は、わたしたちが放課後に散策したり、遊んだりできる場所だったので、少し寂しく思いましたが、おそらくその会社はその土地が欲しかったのだろうとわたしたちは思いました。学園を存続させるために、理事長先生がそういう取引をしたのだろうと。やがてそこには、綺麗な建物が立ちました。聞いたところその会社の研究所ということでした。自然が残る裏山の景色に配慮しているのか、それは綺麗な建物で、わたしたちは少しホッとしました。

そうしてしばらくしたころ、こんどはアイという転入生がやってきました。彼女は、保健室のランさんと同じで、体のほとんどを機械の義体にしていました。機械化手術のあと、その会社から学園を紹介されたようです。ああ、なるほどな、と思いました。わたしたちはランさんとうまくやっていたこともあり、彼女の存在を普通に受け入れることができましたが、普通の学校ならば、おそらくいじめられたりするのではないでしょうか。

彼女は、わたしたちと同じように勉強し（体育だけは別メニューでしたが）、行事の時は、むしろその体の特性を生かしてとても頼りになりました。

ある日、気分が悪かったので保健室に行くと、養護のマミ先生はお休みで、ランさんが面倒を見てくれました。その時ランさんから聞いた話というか、ランさんは、わたしの面倒を見ながら、機械の身体（彼女は、義体と言わず身体、と言っていました）であることの素晴らしさを、熱く語っていました。

確かに、わたしを一人で軽々と抱き上げてベッドに寝かせてくれたりと、仕事をするにも便利ですし、風邪もひかない、月のモノもない、あと彼女は補助ストレージと補助電子頭脳を内蔵しているそうで、補助ストレージに記録したデータをすぐに取り出したり、補助電子頭脳をコンピューターやネットワークに直接接続することができるので、いちいち調べたりする必要もない、と言っていました。そしてさらに言うには、彼女の場合は病気で、あと１年も生きられないところだったのを機械化で救われたと言っていましたが、自

分から希望すればそういった、病気や事故ではなくても身体を機械化することができるし、一部だけ機械化することもできると。生活に支障はなく、彼女自身はするなら全身フル機械化を勧める、と言っていました。

そんな話を聞いた後、しばらくしてマミ先生がお休みから戻ってきました。ぱっと見はわからなかったのですが、なんと彼女は、全身を機械化していて、自分からそれをみんなに公表しました。さらに驚いたことには、彼女は特に健康等に問題もなかったのですが、自分の仕事の能力を上げるために、自分の身体を「アップデート」したのだと言っていました。

クラスの中で、「機械化」という話題が目立つようになったと思うのも、その頃からです。アイさんは当事者ということで、よくその話に巻き込まれていましたが、彼女もまた、機械化した身体の良さについて熱く語っていました。

そして、ついにその時が来ました。

ある日、教室に行くと、みんながざわついています。そこに、彼女がいました。

ここ数日休んでいたナツミが、教室に戻ってきました。機械の身体になって。

「アタシ毎月重いし、マミ先生に相談したら、こういう方法もあるよって勧められてさ。思い切って機械化しちゃった」

満面の笑みで彼女はそう言いました。

「もう毎月気にしなくてもいいし、風邪もひかないし、補助電子頭脳も補助ストレージも付けたから勉強もそんなに頑張らなくていいし、なによりダイエット気にしなくていいからもう、好きなだけ食べられるし」

「え、機械化したら何も食べないと思ってた」一人の子が疑問を口にします。

「ぜんぜん食べるし。食べたものは、身体の中で処理されて、そのエネルギーを電力に変換して、バッテリーに蓄えられるから、直接充電もできるんだけど、ごはん食べて充電とかも出来ちゃうんだ」

わたしの周りの数人はそんな彼女の言葉に引いていましたが、その反面そうなんだー、すごい、いいなぁ、わたしもしようかなぁ、などという声も聞こえていました。

それからです。時々、数日間休んだかと思うと機械化している子が出始めました。それはわたしたちの学年だけではなく、上級生たちも同じでした。その会社は、学園の生徒や関係者に限っては特別に、申請するだけで特に費用もかかることなく機械化手術を行ってくれるのだということでした（オプションを付けるのには自己負担が発生するようですが）。

機械化した彼女たちは体育には参加しませんが、やはり「補助ストレージ」や「補助電子頭脳」を使うことができるので、成績もどんどん良くなっていきました。先生方もそれに考慮してか、体育については機械化した子たちだけの授業を行うことになりました。

機械化した子たちは、制服を着ている限り一見そうとはわかりませんが、時折目が光ったり、服の下に金属のような部分があったりしますし、その「補助電子頭脳」などを外部と接続するためのソケットが、人によりますが耳の後ろや首筋、また人によっては胸元など、どこかしらについています。とはいえ肌や髪も、どういうものでできているのかはわかりませんが、触ってみても義体とはわからないぐらいのものです。でも、同じクラスの子はともかく他のクラスの子になるといつの間にか機械化している子などがいて、思ったより多くの子が機械化しているような気がしました。

そんな日が続いていたある日、担任のミチコ先生がお休みされました。わたしは、なんとなくそんな予感がしましたが、先生は復帰されると、機械の身体になっていました。

「機械化した子が増えて、彼女たちの気持ちわからないし」と先生は以前から言っていました。悩んだ末、マミ先生と同じようにその会社と学園との特別契約条項を使って機械化したそうです。確かにここのところなんとなく表情が暗く何か悩んでいるのかなぁとは思っていました。

「補助電子頭脳とストレージがちょっとお金かかったけど。でもこんなに楽になるんなら、もっと早くすればなって。何より、老化しなくていいのは素晴らしいわ。まあ、お金かければ若返りもできるみたいだけど」

先生は満面の笑顔で話しました。そして最後にこう付け加えました。

「機械化を考えている人は、早めにした方がいいですよ。なんたって、皆さんは今が花なんですから。その若さをずっと保てるなんて、素晴らしいことじゃない」

ミチコ先生の他にも、数人の先生方が機械化手術を受けられたようでした。

そして、衝撃的なことが起こったのはその翌週のことでした。

その日は、朝、講堂で全学園集会がありました。わたしたちが、機械化した子たちも含めて講堂の中に整列していると、進行役の、すでに機械化されている教務主任の先生が、

「今から理事長先生のお話があります」と仰いました。

壇上に、わたしたちと同じ制服を着てはいますが、見たことのない、誰なのかわからない女の子が上がります。そしてその子が話し始めました。

「みなさん、おはようございます。私が誰だかわかりますか？」

みんながざわつきます。そのざわつきの中で、彼女は続けました。

「理事長です。皆さん驚いたでしょう」

その子は自分が理事長だと言いました。わたしもですが、何人もの子が思わずえっ！ と大きな声を上げてしまいました。どう見ても彼女は、わたしたちの中に混じっていてもおかしくない年恰好にしか見えません。

「私は先週、前は裏山だったところに建てられた、学園のオーナーであるメタリボン社の施設で、全身の機械化手術を受けました。健康上の理由などもありまして、脳以外のほとんどの部分を機械に置き換えています。自分の若い時の姿を参考にパーツを製作してもらって、見てのとおり、皆さんと変わらない年恰好に見えるようになりました」

理事長先生、は、くるりと一回りして見せます。確かに、どう見ても学園の生徒にしか見えません。

「この格好をしたのは約半世紀ぶりです、うふふ……・機械化は、健康と若さを保つだけでなく、望むものならば自分のなりたい姿になることもできるのですよ。まだ機械化していない皆さんも、学園とメタリボン社との契約で、なんら経済的な負担もなく機械化手術を受けることができますから、希望する人は遠慮なく申し出てください。今機械化を考えていない人も、将来の選択肢の一つとして、考えてみるといいと思いますよ」

言われてみれば、理事長先生は卒業生でしたし、その微笑みには、確かに理事長先生の面影がありました。ですが、面影があったとはいえ、わたしはその微笑みに何かひんやりとしたものを感じました。

それから、機械化された先生方は、例外なくわたしたちにも機械化を勧めるようになりました。確かに、話を聞いているといいことずくめなように聞こえます。機械化した子たちも、特に彼女たちだけで固まるとかはなく、機械化する前と同じく、ごくごく普通にわたしたちに混じって過ごしているので、一見何も変わらないように思えましたが、わたしは逆に違和感や居心地の悪さを感じるようになっていきました。

日を追うごとに、だんだんと機械化に興味を持つ子が増えてきた感じを受けるようになりました。きついダイエットなどしなくても体形は保たれるし、視力が落ちることなどもありません。充電やメンテナンスを怠らなければ、体調が悪いこともなく、もし体調が悪い場合もどこが悪いのかすぐにわかるなどの健康上のメリットだけでなく、補助電子頭脳や補助ストレージを利用することによって、記憶したことを忘れることがなく、すぐに活用できるというのは大きな魅力でした。デメリットというデメリットは、確かにないように思えます。

そんな時、わたしたち、その違和感を感じていたなかの一人、マキが、夜中にこっそりわたしの部屋を訪ねてきました。もう消灯時間を過ぎていたので驚きましたが、彼女は何かとてもおびえているようでした。

「ユウコの様子がおかしい」彼女は過呼吸気味にそう言いました。

「今日、彼女気分悪いって言うから保健室連れて行ったのよ。それで、さっき帰ってきたみたいなんだけど」

ユウコというのは、やはり同じように違和感を感じ、かつ一番抵抗を感じていた子です。マキは、ユウコとやり取りしたメッセージの画面を見せてくれました。

そこには、こう書かれていました。

”機械化することにした。改造手術の間休みます”

「おかしくない？　ユウコに限って自分から機械化とかするはずないじゃん！」

彼女はもう泣きそうな顔でそう言います。夜も遅かったので、彼女をなだめて部屋に帰しましたが、わたしも大きな違和感を感じていました。

メッセージの画面にあったとおり、翌日ユウコは授業を休んでいました。ユウコの姿が見えないことについて、クラスメイト達がお喋りしていました。

「ユウコもついに機械化か」「アタシもそろそろ機械化しちゃおうかな」「機械化したらさ、ダイエットしないでスタイル良くできるかな」

そういった、機械化に興味のある子たちに混じって、機械化済みの子たちも喋っています。

「いいよ、機械化」「毎日スッキリ起きられるの最高だよ」「そうだよ、〇〇も機械化しちゃおうよ」

わたしは、違和感の正体がわかったような気がしました。機械化した子や先生方はみんな一様に機械化について、ほとんど絶賛というか、いいことを言うばかりで、悪いこと、思ったのと違ったことなどは本当に一切言わないのです。わたしはその、悪い話がないことに、それこそまるで宗教、それもカルト的な宗教のようなある種の不気味さを感じていたのです。それは、もしかして……

三日後、ユウコが出てきました。制服を着ている限り、眼鏡をやめた以外は一見、変わったところはないように見えましたが、やはり彼女はこう言いました。

「機械化、してみたら意外といいもんだよ。あんなに不安がることなかったわ。むしろ機械化してよかった感じ」

微笑むユウコの目の奥で、何かが回っています。変わったところが無いように見えるとはいえ、眼鏡をはずした彼女は、おそらくもう眼鏡の必要がないのでしょう。目の奥で回っているのは、カメラか何かのピントを合わせているのだと思いました。

そして、彼女もまた、「機械化したことの素晴らしさ」について、熱く語っていました。が、その熱さの中に、わたしはどこか冷たいものを感じていました。

それからも、何日かおきに機械化した子が増えていきました。仲良しグループの中の一人が機械化すると、

そのグループがいつの間にか全員機械化しているような感じで、気が付くと、クラスの半分以上がもう機械化していました。彼女たちの話題も、機械化していることが前提になり、それはまるで、ついこの間までしていた様々な「オトナな」話題について行けるか行けないか、「ススんで」いるかいないか、という話題に成り代わったようにも思え、そしてわたしたちはその、「オクレテいる」方でいるかのような感じを受けるようになりました。

そんなある日のこと、先生から、学年ごとに機械化済みの者と、未機械化の者（先生が、そう言われました）と別々の特別授業がある旨のお話がありました。「機械化済み」の子達は整然と並んで、講堂に行きます。そしてわたしたち「未機械化」の面々は、視聴覚室に集められました。改めて驚いたことに、そこにいたのは、わたしを含めて十人に満たない人数だけでした。クラスの七割くらいのみんなが、すでに機械化していたのです。

視聴覚室の明かりが消され、動画が始まりました。何も説明がなかったのですが、どうやら、社会貢献やボランティアについての動画でした。動画を見ているうちに、わたしの意識の中になにか願望のようなものが浮かんできました。ボランティア活動や奉仕活動で社会貢献するのは素晴らしい、もっといろいろな方の役に立ちたい、役に立つ自分になりたい、そのために頑張って勉強をして、いろいろなことを覚えて……

身体を機械化すれば、さらにもっといろいろな事が出来て、困った人の役に立つことができる。身体を機械化して、もっともっと人の役に立てるようになりたい、奉仕したい、機械化したい……

わたしはそこで、ふと我に返りました。機械化したいなんて、なんてことを考えていたのでしょう！　そう考えている時は、何かとてもいいことを考えているような気分でした。恐る恐る、周りを見回すと、みんななにかぼうっとしているような、うっとりとしたような顔をしています。つい今さっきまで、わたしも同じような顔をしていたのかもしれません。隣の席に座ったマキも、同じような表情で、画面を見ています。（この動画、見ちゃダメだ！）わたしは咄嗟にそう思い、マキをつつきました。しかし、マキは反応せず、表情を変えずに画面を見ています。得体のしれない恐ろしさを感じたわたしは、さらに強くマキをつつきました。すると、マキの顔に生気というか、表情が戻ったように見えました。びっくりしたような顔をしてこちらを見ているマキに、わたしは小声で言いました。

「この動画、やばい」

マキは何度か瞬きをしたあと、わたしの言っていることを理解したようです。わたしとマキはその後動画が終わるまで、ずっと下を見ていました。しかし、何が恐ろしいって、その動画は、音声が聞こえてくるだけでも、とても見たくなってくるのです。マキとわたしは、時々お互いにつつきあいながら、なんとか動画が終わるのを待ちました。

やがて動画が終わり、部屋が明るくなりました。先生が何か紙を配ります。紙は三枚ありました。一枚は、今日の動画の感想を書く紙でしたが、他の二枚は……

他の二枚は、機械化手術の申請書と、機械化についての承諾書でした。先生は、こう仰りました。

「今配ったのは、感想用紙と、参考までに機械化手術の申請書と承諾書です。感想は今週中くらいに提出してください。機械化の紙二枚は、機械化する場合に提出しなければならない紙ですから、別に今出せとかそういうものではないのですが、手術するときはこんな紙を書くんだと覚えておいてくださいね」

はーい、と何人かが返事をします。周りを見れば、何人かはすでに、その申請書に何かを記入し始めています。わたしは、自分が震えているのを感じました。マキの顔を見ると、彼女も怯えた表情をしていました。

そう、おそらくこの動画は、わたしたちに機械化を受け入れさせる、機械化手術を受けたくなるように洗脳する動画だったのです！　そして実際、何人かの子たちは、そのままその用紙を先生に提出し、教室には戻らず、先生に連れられて行きました。

今さらのようにわたしは気付きました。誰か、わたしたち、学園全体を機械化したい人がいるのです。すでに機械化した子たちも、本当は自分から望んで機械化したわけではなく、自分たちも気づかないうちに、だんだん洗脳されて自分から望んだように思わされて機械化させられているのに違いありません。そして、その、わたしたちを機械化したい人とは……

放課後部屋に戻った後、わたしとマキは、今さらのように調べ始めました。調べるのはもちろん、この学園を買い取った、メタリボンという会社です。事業内容の中には、義体パーツの製作販売や義体化のトータルマネージメントの他、事務から軽作業、そして特殊接客用（！）まで様々な人型ロボット、この会社では、リボノイドと言っているようですが、その製造販売などと書かれています。

首から下が、銀色の金属のような骨格のようなものに、カバーを付けたようなその「リボノイド」の写真がたくさん載っているそのサイトを見ていると、マキが突然ひっ！　と、悲鳴のような声を上げました。

マキが画面の一部を指さします。その、事業紹介の写真に何体かが写っている「特殊接客用リボノイド」の、「セクサロイドタイプ」という、おそらくいかがわしい用途の接客ロボットなのでしょうが、その写真の中の一体が、見覚えのある顔をしていました。

「これ、ルナさんだよね……？」恐る恐る、マキがそれを口にします。セクシーというよりは卑猥な格好をしたその「リボノイド」はどう見ても、上級生のルナさんの姿をしていました。

「も、モデルになったのかも……」わたしは自分に言い聞かせるようにそうつぶやきましたが、マキもわたしも、それがルナさん本人だという確信めいたものを感じていました。機械化したのかどうかまではわかりませんでしたが、この狭い学園の中で、確かに最近彼女とは顔を合わせていません。だとすると……

「ねえ、ユウコに聞いてみない？」マキが言います。

「何を？」

「保健室で何があったのか」

マキの言いたいことはわかりました。ユウコの様子がおかしくなったのは保健室に行った後です。だとすれば、保健室で何かがあったはずです。しかし、さすがに保健室に直接それを探りに行くのは気が引けました。

「もしもしユウコ、今フミの部屋でお茶してるんだけど、よかったら来ない？」

マキが電話でユウコを呼び出します。しばらくして、ユウコが部屋に来ました。三人でテーブルを囲み、どこか冷たい感じの他愛もないおしゃべりをしつつ、マキがユウコに話を振りました。

「ねえ、ユウコってさ、何で突然手術受けようと思ったの？」

「それは」ユウコが答えます。

「機械化したら視力悪いのも改善されるし、体調もあまり気にしなくてよくなるし、とにかくデメリットがいろいろ解消されて、いいことずくめだから」

その手の話は、あちらこちらでさんざん聞いていました。このまま喋らせておくと、今の若い姿のままでいられる、ダイエットとかも気にしなくていい、機械化最高と続くパターンです。それをわかっているからか、マキは彼女の話を遮りました。

「ねえ、あの日保健室で何があったの？ ユウコ、あんなに機械化した子のことキモイとか言ってたのに、なんで急に機械化することにしたの？ 保健室で何かされたの？」

「保健室……？」ユウコは少し考えている表情をしていましたが、不意にその表情が、何か変わりました。言うならば、元のユウコに戻ったような！

そしてその顔が、今まで微笑んでいた顔から、何かを思い出して思いつめたような顔に急激に変わります。

「そう、マキに連れってってもらって、先生が、アタシをベッドに寝かせたのね。そしたらランさんが……」

そう言いかけたところで、またユウコの表情が変わった、というか突然無表情になり、ユウコの言葉が止まりました。

「ユウコ？」

わたしたちの呼びかけにも応じず、口を半開きにしたまま、ユウコは止まっています。

（ピピ！）どこかで微かにその音が聞こえたような気がしました。すると、ユウコの目が、パソコンのアクセスランプのようにすごいスピードで明滅しはじめました。目が光るだけでも不気味なのに、それが付いたり消えたりしている様は、友達とはいえ恐ろしいものがありました。

しばらくするとそれが落ち着いたのか、ユウコはわたしたちの方を見て、最初にこの部屋に来た時のように微笑みました。

「機械化、いいよ。機械化するなら若いうち。機械化はこわくない」

ユウコは、どこか抑揚のない感じの話し方で、さっきまでの会話とは繋がらない、機械化についての称賛を語り始めました。

「もういいよユウコ……ゆ…」彼女の顔を見て、そう言いかけたマキが、まるで力が抜けたように座り込みます。見るとユウコの目が、ぼんやりと薄い緑色に光っています。そして、ユウコの声は、まるで例の動画のように、その声をずっと聴いていたくなるような気持にさせ、まるで頭の中に直接響いてくるように感じさせるのです。

「機械化は最高。機械化は素晴らしい」

（きかい、かは……やばい……）

「やめ、て！」

わたしはその目を見ないように。ユウコを突き飛ばしました。マキが荒い息のまま床のじゅうたんに崩れ落ちます。そして、突き飛ばしたときにテーブルにでもひっかけたのか、ユウコの腕には切り傷のような切り口が……その切り口の中に、何か金属のような銀色のものが覗いています。ユウコは、そのまま表情一つ変えずに立ち上がると部屋を出て行きました。

マキを助け起こすと、彼女はこう言いました。

「アタシ、この学園出る。アタシ、機械なんかになりたくない！　もうやだよこんなの。フミも一緒に逃げよう」

わたしも、同じ気持ちでした。友達、いや友達だと思っていた子は、すでに友達ではなく、人間ですらなく、そして、わたしたちを洗脳して自分の仲間に、つまりは機械化させようとしたのです。

わたしたちは、みんなが寝静まった夜の十二時に落ちあって、学園を出る約束をしました。マキは、その準備のために自分の部屋に一旦戻って行きました。しかし……

消灯時間を過ぎ、学園を出る準備を整えて、あとはマキと合わせるだけだと思っていたそう、十一時半を

過ぎたころでしょうか。何やら部屋の外が少し騒がしい感じがします。恐る恐る、ドアののぞき穴から廊下を見ると、その光景が目に入ってきました。

機械化した子達が、目を光らせてまるでゾンビのように廊下を歩いています。そして、わたしたちのような「未機械化」の子達を部屋から連れ出しては、どこか、たぶん例の施設へ連れて行こうとしているのです。

彼女たちは、一つ一つドアを開けながら、わたしの部屋に近づいてきます。わたしは、ドアの前に部屋の中にあるありったけのものを積み上げました。そして程なく、ドアがノックされました。

「フミ、開けて」その声は、今日一緒に動画を見たクラスメイトの声でした。彼女は、教室に戻った時にはいなかった一人です。

「次はフミの番だよ」

さらに何人かがそう呼び掛けてきます。そして……

「フミ」その声は、マキでした。

「ドアを開けて」

わたしは、積んだ物の間に頭を突っ込んで、のぞき穴を見ました。そこに見えたのは、マキであって、マキではないものでした……

マキの顔をした頭の下に、金属製のような骨組みと、その上に何かカバーを付けたような身体の……例のサイトの写真と同じ「リボノイド」が、ドアの前に立っています。そしてその目は、やはりさっきのユウコと同じように薄い緑色に光っていました。この、たった数時間の間に、マキは、機械にされてしまったというのでしょうか。

「フミ、開けて」ガチャガチャと、鍵をいじる音がします。ものが積んであるとはいえ、ロボットの力の前にはどかされるのも時間の問題でしょう。きっとわたしも機械にされてしまう……機械になるなんてイヤ……とりあえずここで送信します。だれかＴあ

「メールの文章、ここで途切れていたんですけど、この、フミさんって方に会わせて頂けませんか？」

応接室に通されたアスカは、理事長と名乗る、その少女のような、全身義体の女性にそう言った。ネットニュースに記事を書いている彼女は、フミ、と名乗るその女性からのメールを受け取り、その学園に直接取材を申し込んだのだ。

「そちらの親会社、になるんでしょうかね、メタリボン社。こちらの会社、そちらの学園を買収してから、その、セクサロイドタイプ、いわゆる性産業用のロボットですが、そちらの出荷数が増えてるんですよね。製品の評判もまるで本物の女性と見まごうくらいの出来と大変評判が良いようなんですが、一方ではそもそもどこかから本物の女性を素体にしたサイボーグなのではないかという噂もあるようで」

「まあ」理事長が口に手を当てて言った。

「それで、ウチの子達がそうなのではないかと？」

そう答えたところで、ドアがノックされる。

「どうぞ」理事長が促すと、ドアが開き、彼女が入って来た。

「あなたは」彼女を凝視するアスカ。

「メールをお送りしたフミです」一見普通の女性に見える彼女は、抑揚のない声であとを続けた。

「私は、自分から希望して改造手術を受け、全身を機械化しました。機械化することは、自分の可能性を広げる素晴らしい選択肢です。アスカさんも、ぜひ全身機械化されることをお勧めします」

「え、あのメール」言いかけて、アスカは気づいた。フミの目が、薄緑色に光っている。理事長や、一緒にいる他の女性たちも同じだった。

脇にいた二人の女性、いやリボノイドが、両側からアスカの腕を押さえる。それは、まるで人間女性とはかけ離れているような力の強さに感じられた。

「ちょっと……」彼女は、抵抗することすらできず、光るフミの目から目を離すこともできなかった。

（機械化は素晴らしい選択です。あなたも機械化して、その素晴らしさを発信するのです）

理事長の声が頭の中に直接響くように感じられる。

「きかい、か、」

アスカががくんと頭を垂れる。彼女は、そのままどこかへ運ばれて行った。

ふたりはサイバーキュア　第８話

サイバーキュア１号の秘密と三体目のサイバーキュア

Ｋｙｏｕｍａ

「ありがとう、ボクだけじゃ重くて運べなかったよ！」

サイバーキュアのマスコットらしき謎生物に連れられて私は彼らの作戦拠点と思われる居場所に来た。

『拠点というよりかは乗り物ね……』

サイバーキュアの拠点というだけあってかサイバネテックでスタイリッシュな飛行船と言った感じだ。

「１号が連れ去られたから近くまで移動させたんだ！」

『移動させたってことは各地を転々としているってことかしら？』

「そうだよ！　そのブレスレットと同じ技術が使われているからソラを飛んでても気付かないと思うよ」

なるほど、ワールドエンドの総力をもってしてもサイバーキュアの居場所を掴めなかったのはこういう事だったのか。

私は一瞬感心したが思考を振り払った。

もう私はワールドエンドの戦闘員じゃない。

そもそも所属していた部隊も倒しちゃった上に基地も証拠隠滅の為ぶっ壊してしまったのだから。

少なくともサイバーキュア１号には私の正体は知られてないはず。

私は首を傾けて背負っている少女を見た。

あの戦いの後サイバーキュア１号は疲弊したのかそのまま気絶してしまったのだ。

このマスコットが言う様に今の彼女はワールドエンドによって身体を機械化されていた。

いや、思考や振る舞いこそただの女子高生であるがワールドエンドの技術によって身体だけでなく脳も改造されただろう。

敵対していたとは言え容赦なく女子高生を機械化するワールドエンドの外道っぷりは納得できないものだ。

「じゃあ１号をこのカプセルに入れてあげて！」

マスコットに言われるがままサイバーキュア１号を人一人が入れそうなカプセルへと入れる。

カプセルの中に緑色の液体が充填され首から下まで浸かる。

炭酸が弾ける音がするのと同時に彼女が着ていた制服が溶けていく。

『ちょっと、大丈夫なの？』

「ダイジョーブ、ダイジョーブ！」

カプセルの中の彼女の着ていた制服だけじゃなく下着すらも溶けきってしまう。

『ちょっと、彼女学生なんでしょ、制服が溶けちゃったらマズイじゃない。それに家に帰してあげないと』

私自身サイボーグだから時計を見なくても身体に内蔵された機能によって時刻は分かる。
こんな時間に制服姿の学生が外に出てたら補導されてもおかしくないだろう。

「ダイジョーブ、１号はもう学生じゃないしここが１号のおうちだから！」

『……は？』

私は耳を疑うような話をこのマスコットから聞かされた。
サイバーキュアという存在は適性が無ければ変身出来ないらしく適性のある人物を探すのだけでも苦労したという。
刻一刻とワールドエンドが暗躍していく中でようやく見つけたのが彼女であったが良くも悪くも等身大の女子高生だった彼女は戦いに巻き込まれることを拒否したという。
私からしたら仕方のない話だろう。
ワールドエンドは闇に紛れて活動しているとは言えその組織力はかなりのものだ。
それを一人で相手するというのはただの女子高生には荷が重い話だ。
このマスコットはそれでもサイバーキュアになって戦ってほしいと頼み込んだというが結局は首を横に振るだけだった。
ならばとマスコットはその女子高生にこういったのだ。

「じゃあ君のクローンを作らせてほしいんだ」

自分じゃなく自分そっくりのクローンが戦うのならと女子高生は了承したという。
その女子高生の遺伝子情報を取得しこの作戦拠点で生み出させたクローン。

『それが彼女、サイバーキュア１号』

何ともおぞましい正体に私は言葉が出なかった。
彼女が女子高生の恰好で居るのも帰る家がないのも彼女がその敵性のあった女子高生のクローンだったからだろう。
実を言うと一つサイバーキュアに対して腑に落ちない点があった。
それは私が所属していた所とは別の部隊のワールドエンドの怪人がサイバーキュアを討ち取ったという話だ。
その怪人が言うにはサイバーキュアの息の根を止めてやったと周りに話していたという。
だが数日後その怪人は残骸と化して消滅した。
息の根を止めたはずのサイバーキュアに敗北する形で。
その怪人は一般人に対しても容赦のない卑劣漢である為とどめを刺さなかったとも思えない。
しかしサイバーキュアがその怪人を倒した情報は間違いじゃない。

「彼女はクローンとしては２代目に当たるかな？」

だけどサイバーキュア１号がクローンであるなら納得が行く。
クローンとして初代の彼女は確かに敗北して戦死したがその敗戦データを元に改善された２代目がその怪人を打ち破ったのだろう。

『じゃあ彼女は自分がクローンであることは知って』

『……知って……います』

振り向くとカプセルの中で目を覚ました彼女が悲しそうな表情でこちらを見ていた。
カプセルの中の液体が引いていく。
カプセルが開くと彼女はゆっくりとした足取りで出てくる。

『私が適正の有った子のクローンであることも私が２代目であることも……』

その姿はうら若き乙女の裸であるがその身体の下には血も肉も無く、代わりに金属フレームや機械部品が詰まってることだろう。
彼女は私を優しく抱き締めた。

『私はお姉さんのことをよく知りません。でもあの時助けに来てくれた……私にとってお姉さんは本物のヒーローみたいな存在です』

『……私は貴女が思っているほどヒーローとは呼べる人物じゃないわ』

決心した私は彼女に私がサイバーキュアになった経歴を話した。
少なくとも彼女の事情を知ってしまったのだからこちらが事情を話さないのは性に合わない。
彼女は最初は驚いた様子だったが思っていたよりもショックを受けていないようだ。

『じゃあお姉さんはワールドエンドの戦闘員からサイバーキュアになったという事ですか？』

『そういう事ね。失望しちゃったかしら？』

彼女は首を横に振った。

『私にとって助けに来てくれたことには変わらないですから。……お姉さんお願いがあります。私とこれからも戦ってください……』

私の気持ちは一つだ。

『決まっているでしょう。もう私はワールドエンドの戦闘員なんかじゃない、サイバーキュア２号よ。それに貴女をほっておくことなんて出来ないわ。』

『お姉さん、ううんお姉様……ありがとう』

『そうねぇ……ねえ貴女名前はあるかしら？』

『ううん、私には名前はないよ。しいて言うならサイバーキュア１号っていうのが』

『じゃあ決めたわ。貴女の名前はブラン、フランス語で白って意味よ』

『ブラン……えへへ、良い名前だね。じゃあええと……』

『貴方がブランなら私はノワール、私のカラーが黒だからね。』

安直な名前の様な気もするが１号２号と呼ぶよりかはいいはずだ。

『じゃあノワールお姉様……これからよろしくお願いします』

『うふふ、よろしくねブラン。それにしても貴女はずっと一人で戦っていたのね……』

再生成されたセーラー服を着たブランを愛おしく撫でる。

「あ、ボクも居るよ！」

ぷんすかと怒っているマスコット。
コイツはブランとは違って信用ならない。

『戦うってアナタはブランを回収するかサイバーキュアのスカウトぐらいで直接戦ってないでしょ』

「まあボクはサイバーキュアのマスコットだからね。でも１号を探しに来てたまたま適性のある２号に会った訳で１号だけに戦わせようとは思ってないよ」

未だに私達のことを１号、２号と呼んでいることに少し苛立ちを感じながらもマスコットの話を聞く。

「サイバーキュアの適性って言うのは人間に限ったことじゃないんだよ。なにより１号が全身を機械化されても変身出来たからね」

確かにそれはそうだ。
私は脳は残っているサイボーグだけどブランはワールドエンドによって完全に機械化されている。
最初こそ最適化出来ていなかったからか十分に動けずに居たけど私が加勢に入ってからしばらくしたら戦闘員相手にも問題なく戦えるようになっていた。

「変身できるか不安だったけど１号が問題ないみたいだし大丈夫だよね。着いて来て二人とも」

私達はマスコットについて行く。

『これは……？』

私達が案内された部屋には一人の女性が目を閉じて整備台の上に横たわっていた。
金髪でグラマラスな体型で大人っぽい雰囲気の彼女は衣服を身に着けておらずその艶めかしい肌を晒している。

「彼女はサイバーキュア２号……の予定だったけど２号は既に居るから３号だよ」

『私と……同じ……クローン？』

おずおずと震えながらに聞くブラン。

「違うよ彼女は完全な機械、この世界だったらアンドロイドって呼ばれている存在さ。３号は同じサイバーキュアの一員だけど君たちの戦いのサポートを行う機体さ」

『サポート……？』

「サイバーキュアシステムの回復だったり君たちを守るバリアを張ったり、後ろから援護攻撃を行ったりするんだ」

『なるほどね中々に頼もしいみたいね。』

そうなってくると今後は３人でのコンビネーションが戦いの肝になると私は考えた。

「今日の戦いで必要な戦術データは集まったから起動させちゃうよ」

小さい身体で端末を操作するマスコット。
すると閉じていた女性、サイバーキュア３号の目が開くと、

『サイバーキュア３号機起動しました』

３号の口から感情に乏しい電子音声が発せられる。
そして起き上がって整備台から降りると私達の方へと向き直り真正面を見据えて直立姿勢を取った。

「じゃあメンバー登録するから変身させるよ」

『えっ、ちょっと待って』

私の制止を聞かずに変身させられる私達。
自分の意志ではない変身に戸惑いつつも３人の身体に電流が流れ光に包まれる。
たちまちサイバーキュアの姿となった私とブラン。
目の前の３号も変身に動揺する仕草を一切見せずに変身が完了する。
私達のコスチュームと似たデザインではあるがカラーリングは灰色で膝や手の甲には黄色のハートが付いている。

変身が完了した私達をしばし凝視した３号は続けて、

『サイバーキュア３号は１号及び２号をサイバーキュアのメンバーとして登録します』

淡々とした抑揚で登録が完了したことを発声する３号。
その様子はロボットと言った雰囲気だった。

『ええと……それじゃあよろしくね３号？ 私はノワールよ』

私は３号に手を伸ばして握手を求めた。

『サイバーキュア３号は疑似人格を起動します。』

仮面の様な３号の表情に穏やかさが宿る。
そして握手を求める私の手を取る。

『ええ、よろしくお願いするわねノワール。まだ起動したばかりで至らないところもあるかもしれないけど』

２号じゃなくノワールと言う名で呼ぶ３号。
それに安心したのかブランも握手を求める。

『私は１号じゃなくてブランですよろしくね』

『うふふ、ブランもよろしくね。』

『……ねぇお姉様。３号にも名前を考えた方が良いと思うの』

『奇遇ね、私もそう思っていたわ。それじゃあ……スゥリィなんてどうかしら。フランス語で灰色って意味よ』

すると真顔になる３号。

『個体名スゥリィ登録完了。これより適応します』

再び表情が戻ると優しそうな表情で微笑む。

『スゥリィ……とても良い名前ね。ありがとうブラン、ノワール』

私達は手を取り合う。

サイバーキュアとしてこれから共に戦う仲間として。

博士と僕

ｒｕｉ７６

部屋の中央に置かれた、高さが二メートル以上ありそうな円筒形の透明なカプセル。

そのカプセルから伸びるケーブルと接続された、物々しい外観のコンピュータ。

それを見た僕は、驚きのあまり言葉を失った。ただ、その一方で――

（メチャクチャ見てる……）

背中に博士の視線が突き刺さってくる。博士は多分、得意げな笑みを浮かべて、僕のことをじっと見ている。この装置を見た感想を正直に言ってくれ、この設備のことを何でも聞いてくれ――そんな思いを込めた眼差しで。

正直なところ、博士のそんな期待を裏切りたい、という気持ちもあった。僕がこれといったリアクションをしなかったら、博士はどんな反応をするだろう？　なんて悪戯心も多少ながら湧き起こっていた。

（でも、聞いてあげた方がいいんだろうな）

僕は、心の中に湧き起こったそんな思いを一旦しまって、カプセルに視線を向けながら、博士に尋ねた。

「博士、これは――」

「よくぞ聞いてくれた、少年！」

僕の言葉を遮って、博士が嬉々とした声を上げた。その声のあまりの大きさに驚いた僕は、思わず博士の方へと振り向いてしまった。

（うわあ、めっちゃ喜んでる……）

ファッション性皆無の眼鏡の奥にある瞳が、らんらんと輝いている。口角もキリッと上がっていて、まさしく得意満面って感じだ。

とはいえ、新たな発明品を僕に披露する度に見せる博士のその笑顔は、僕にとっては見慣れたものだ。そして僕は、その笑顔を見るたびに思ってしまう。

（もっとオシャレに気を遣って黙ってさえいれば、普通に美人なんだけどなあ）

僕よりも頭一つ分くらい高い身長に、均整の取れたスレンダーな体型。知性を感じさせる凛とした顔立ち。そういう、美人としての素地を、博士は明らかに備えている。でも、アイロンがけをしていない白いブラウスとダークグレーのスラックスに、所々に汚れの染みついた白衣というファッションが、そんな素地を台無しにしている。

僕がそんなことを考えていることなど露知らず、博士はカプセルへと歩み寄り、今にもこの設備のことを話し出そうとしている。そのことを気取った僕は、博士のペースに巻き込まれまいと口を開いた。

「あの……前にも言ったんですけど、その『少年』って呼ぶのを止めてくれませんか？　僕にだって、ちゃんとした名前があるんですから」

「知っているとも。君の名前が上野将人（うえのまさと）ということは、私も把握しているぞ、少年！」

「だったら、ちゃんと名前で呼んで下さいよ。松渡彩奈（まつどあやな）さ――」

「おーっと！　このラボで私の本名呼びはタブーだぞ、少年！」

途端、博士が手を広げて僕を制した。そんな博士に、僕は大袈裟に肩をすくめた。

松渡さんは、僕が中学生だった頃の家庭教師だ。とはいえその頃は……ていうか、僕の家にいる間は、ごくごく普通に振る舞っていたけど。

松渡さんの指導の甲斐あってか、僕は無事に志望校に合格することが出来た。その報告を松渡さんにした時、彼女は僕にある頼みごとをしてきた。

それが、松渡さん――「博士」の助手になることだった。

「……分かりましたよ、もう」

呼び方のことは諦めて、僕は気を取り直して、博士の話を聞くことにした。すると博士は、待ってました、とばかりにカプセルを指し示して、

「説明しよう。これは、人間を機械の体へと作り変える装置だ」

「……は？」

博士の口から飛び出した言葉に、僕は目を丸くした。僕のそんな反応に、博士は得意げに何度も頷いて、装置を開発した理由を滔々と語り始めた。

「ちょ、ちょっと待って下さい」

気持ち良さそうに語る博士を、僕は慌てて止めた。すると、博士は首を傾げて、

「ん？　どうかしたのかな、少年？」

「どうかしたのかな、じゃないですよ。僕はまだ、信じられないんですから」

「信じられない？　何を？」

「そりゃあ……人間を機械にする装置だ、なんて言われて、はいそうですか、って信じられるわけがないですよ」

実際にそんなものが出来たら、世紀の大発明だ。僕がそう言うと、博士は、

「ふふふ……世紀の大発明……」

ニヤニヤ笑う博士を見て。今のは失言だったかもしれない、と僕は内心で後悔した。

「と、とにかく……自信たっぷりですけど、実験とかやったんですか？」

「そう、実験だ！」

唐突に、博士が素っ頓狂な声を上げた。あまりにも突然だったから、僕は思わずビクついてしまった。すると博士は、僕を見つめて、

「今回、君を呼んだのは他でもない。実証実験をするためなのだよ」

「実証実験？」

「この装置は、私が設計した通りに完成した。よって、このまま起動しても正常に稼働し、私の立てた理論通りに、人間を機械の体へと作り変えることが出来る。だが――」

博士はニヤリと笑って、

「正常に稼働することが明らかであるとはいえ、やはり実証実験は必要だ。そこでだ――少年。君に、実験の手伝いをしてもらいたい」

「手伝い……？」

そう答えた僕は、不意に、猛烈に嫌な予感に襲われた。まさか、博士は――

「い、嫌です！　嫌ですよ！」

僕は博士から一歩、二歩と後ずさる。

「ん？　どうした、少年？　そんなに怯えて」
「人間を機械の体に……って、要は、人間をロボットにするってことでしょう？　嫌ですよ！　僕、ロボットになんか――」
「おいおい、何か勘違いしていないか？　少年」
不思議そうに博士が首を傾げた。
「勘違い？」
「君に危険が及ぶかもしれない実験の被験体に君を指名するつもりなど、私には毛頭ないよ」
それなら、と僕は博士に尋ねた。
「一体、誰を実験に使うんですか？　そんな人がいるんですか？」
「ああ、いるとも」
「どこに？」
「ここだよ」
そう言って博士は――自分を指さした。えっ？　それってまさか――僕が目でそう尋ねると、博士は微笑みを湛えたまま頷いて、
「今回の実証実験は、私の体を用いて行うのだよ」
事も無げに答えた博士に、僕は言葉を失った。

「……さて。私の方は準備万端だ」
カプセルの中に入り、機械的なマスクを装着した博士が、僕に呼びかける。
「少年、装置の起動スイッチを――ん？　どうした？　さっきから、私から目を逸らしたままだが？」
当たり前だ。何故なら、カプセルの中に入った博士は、下着さえも脱いでしまっているのだから。結果、野暮ったいファッションに隠された博士の魅惑的な体が、露わになってしまっている。正直言って、気恥ずかしくて正視できない。
　その一方で、博士は自分が素っ裸になっていることを、全く恥ずかしがっていない様子だ。何しろ、「実験の準備を始めよう」と言うなり、僕の目の前で服を脱ぎ出したくらいだ。
「だ、大丈夫ですよ」
僕は博士から目を逸らしたまま答えた。そして、装置の起動スイッチに手をかけ、
「じゃあ、起動しますよ」
「うむ。任せたぞ、少年」
僕はスイッチを押した。装置が、ゴウン、という音を立てて動き始める。
　程なくして、カプセルの中に緑色の液体が満たされ始める。目を閉じた博士の体が、その液体に包まれていく。液体の色がフィルター代わりになっているのか、博士の姿がぼんやりとしたものになっていった。ここでようやく、僕は博士のことを直視することが出来るようになった。
　続いて、カプセルの上蓋から幾本もの細いケーブルが伸び、博士の体の所々に挿さっていく。驚いたことに、ケーブルを挿された途端、博士の体は小さく震えた。ひょっとして博士には、痛みを感じるだけの意識があるんだろうか？
「博士？」

僕が呼びかけると、博士がゆっくりと目を開いた。緑色の液体で遮られている上に、口元をマスクで覆われているからハッキリとは分からなかったけれど、博士は僕に向かって微笑みかけた――ように見えた。
――心配するな、少年。
その柔らかな眼差しは、僕にそう語りかけているように見えた。
　が、僕はそこで、博士がとんでもない「忘れ物」をしていることに気づいた。
（博士、眼鏡をかけたまま、装置に入っちゃった……）
そのことが、博士が機械の体になる過程で、どんな影響を及ぼすか分からない。それに、今さら眼鏡を外してやることも出来ない。僕はただ、経緯を見守るしかなかった。
　カプセルに入る前、博士は僕に、この装置がどのようにして人間を機械の体にしていくのかを説明してくれた。その内容に則って、博士の今の状態を説明すると……こんな感じだ。
　まず、カプセルの中に満たされた緑色の液体は、博士の皮膚組織を硬質化させる。博士の肌の色をしたプラスチックに近い特殊な外装に変化するのだ。この外装が、機械の体でありながら人間のような外観を維持しつつ、外装に隠された機械の体を保護する。
　また、博士の体に挿された幾本ものケーブルは、博士の体内組織を機械的なパーツに作り変える液剤を注入する。この液剤を投与されると、骨はカーボン製の人工骨に、内臓は機械の体の活動を維持するための様々な機械へと作り変えられる。
　博士からそんな話を聞かされた僕は、正直言って、そんなことが本当に出来るんだろうか？　と思った。が、僕のそんな思いを覆す事態が、カプセルの中でゆっくりと展開され始めた。
（あれ？　博士の体が……）
博士の肌が、人工的な艶を放ち始めた。緑色の液体越しとはいえ、その肌は人間の肌にはない硬さを有しているように見えた。どうやら本当に、博士の肌は特殊な外装へと変化しているみたいだ。
（何、あの線は？）
博士の体のあちこちに、線が浮かび始めた。何だろう？　と思いながらその線を見つめていた僕は、思わず声を上げた。
「博士の体が……切れてる!?」
肩や肘、股間や膝、手首、足首……線が浮かび上がった関節部分が、ぱっくりと裂けたのだ。その痛々しい見た目に、僕は思わず両手で顔を覆った。でも……指の隙間から、恐る恐る博士を見ると、
（血が……出ていない？）
関節部あたりの肌が裂けているのに、博士の体からは、一滴の血も流れていなかった。いや、それだけじゃない。そうして出来上がった裂け目からは、
（機械……？）
黒光りする円筒形の部品が現れたのだ。それはまるで、ロボットの関節部品。どうやら博士の体の中は、本当に機械になってしまったようだ。
　でも博士は、自分の体がそんな風に変化していることに気づいていないのか、目を開いたまま、カプセルの中を揺蕩っている。博士は今、何を考えているんだろう。いや、何かを考えることが出来ているんだろうか――そんなことを思いながら博士の顔を見つめた僕は、ふと思い出した。
（眼鏡は……どうなった？）

僕は目を凝らして、博士の眼鏡を見つめる。形状はまったく変わっていなかったけれど、眼鏡のつるは、こめかみから耳の辺りにかけて、顔の一部になったかのようにくっついてしまっていた。

……と、その時。装置からアラーム音が響いた。機械の体への変換工程が終了したことを告げる合図だ。やがて、カプセルの中を満たしていた緑色の液体が抜かれ始め、ケーブルを抜かれた博士が、カプセルの底にゆっくりと降り立った。

「……博士を出してあげないと」

博士が言うには、機械の体へと作り変えられた直後は、全ての機能が停止状態になっているらしい。だから、僕が最初にしなければならないことは、博士を「起動」させることだ。

「確か、このタブレットの起動ボタンを……これかな？」

前もって博士から渡されていたタブレットを手に取った僕は、そこに表示されていた「起動」のタブをタップした。すると――

「ひっ!?」

暗く沈んでいた博士の瞳が、緑色に光った。直後、博士はカプセルの中から、部屋の中を見渡した。首の動きが、明らかに機械的な感じになっている。そうして右、左と見回していた博士の眼差しは、僕に向けられたところで止まった。が、博士は僕を見つめたまま、全く動かない。

「あ、そうだ。カプセルを開けてあげないと」

僕は慌ててカプセルを開けた。博士がゆっくりとカプセルの中から出てくる。その体から、駆動音がハッキリと聞こえてきた。本当に機械の体になっちゃったんだ……僕は改めて感じた。

カプセルから出た博士は、規則正しい足取りで僕へと歩み寄ると、再び直立姿勢になった。僕は博士の口元からマスクを外してあげて、

「博士……僕のことが分かりますか？」

無表情で僕を見つめる博士に、僕はおずおずと尋ねた。顔の一部になった眼鏡の奥にあるカメラアイが、僕に焦点を合わせるかのように蠕動する。

『……記憶データからの抽出完了。あなたは、上野将人様です』

その声――いや、電子音声は、表情と同じように、感情が全く感じられないものだった。しかも、電子音声と口の動きが、明らかにちぐはぐだ。

「は、博士……？」

僕の中で、様々な違和感が湧いて起こる。でも博士は、僕のそんな様子など気にかけず、駆動音を響かせながら首を傾げた。

『当機の記憶データに、何か誤りがありますか？』

「え？　い、いや、間違ってない。間違ってないですけど……」

『了解しました。上野将人様、あなたが当機のマスターですか？』

「ま、マスター……？　それって、どういう……」

『当機の稼働には、マスター登録が必要です。上野将人様、マスター登録をしますか？』

どうしよう、博士が博士じゃなくなっちゃった……博士の返事を聞いて、気がおかしくなりそうになる。でも博士は、依然として、無表情で僕を見つめている。一体どうすれば――

「あっ、そうだ！」

途方に暮れかけた僕は、ふと思い出した。機械の体になった直後は人間としての意識が休止してしまっている、と博士が言っていたことを。それを解消するためには、タブレットで意識を覚醒させる必要がある。僕はすぐさま、タブレットをタップした。

途端、博士のカメラアイが、赤く光った。

『……コマンドを受信。当機は、モード「松渡彩奈」を適用します』

博士がそう口にする。モードを適用？　それはどういうことなんだろう……戸惑いながらも博士を見つめていると、不意に、博士の眼差しが変わった。僕が良く知っている、どこか得意げな眼差しだ。

「博士……？」

『おはよう、上野将人様！　どうだ？　装置は正常に機能しただろう？』

博士がニヤリと笑った。この笑顔、この話し方――間違いなく博士だ。

「博士！　僕のことが分かるんですね！」

『もちろんだとも、上野将人様。私が君のことを忘れるなど、決してあり得ないからな』

笑顔でそう答えた博士に、僕は胸を撫で下ろした――が。僕はふと、博士の話し方に違和感を抱いた。

「ねえ、博士。さっきからどうして、僕のことをフルネームで、しかも様付けで呼ぶんですか？」

『私が？　上野将人様を？　様付けで？』

「ほ、ほら！　今も呼んでますよ！」

すると博士は、不思議そうな表情をした。

『ふむ……それは恐らく、私が機械の体になったことで、人間である上野将人様を、無自覚に敬っているのかもしれないな。しかし、上野将人様は、以前から上野将人様のことを名前で呼ぶことを希望していたと、私の記憶データにあるが？』

「そ、それはそうですけど……」

実際に呼ばれると、何だか恥ずかしい。それに、博士が僕のことを「無自覚に敬っている」というのも、何だか嫌だ。

「……やっぱり、今までみたいに、『少年』って呼んで下さい」

『了解した……と言いたいところだが、今の私は、それが出来ないのだよ』

「えっ？　どうして？」

『機械となった私は、人間は敬うべき存在だと認識している。故に、私自身が上野将人様の呼び方を自ら変更することは不可能なのだよ』

「じゃあ、どうすれば……」

すると博士は、視線でタブレットを指した。

『そのタブレットを用いて、私に関する設定変更をすればいい。上野将人様の呼称を「少年」と変更するように、な』

「分かりました。じゃあ、早速――ん？　『変更出来ません』って表示されたんですけど」

すると博士は、『ああ！』と声を上げた。

『設定変更は、マスター権限のある人間しか出来なかったな。時に上野将人様、マスター登録はまだだろう？』

「え？　確かにしていないですけど……それって必要なんですか？」

『勿論。今の私は、人間に管理される存在だ。そんな私にとって、マスターは必要不可欠な存在だからな』

「でも……」
『マスター登録がされていないと、私は稼働出来ないのだ。上野将人様、是非とも、私のマスターになってもらいたい。上野将人様は信頼のおける人間であると、私の記憶データにも記録されている』
博士にとって、僕が信頼のおける人間――その言葉に、僕の心は大きく揺れた。博士は僕のことを、そんな風に思っていてくれたんだ……と。
　となれば――答えは一つしかない。
「分かりました。博士、僕が博士のマスターになります」
『おお！　上野将人様なら、そう言ってくれると信じていたよ！　では早速、私のカメラアイを見つめてくれ』
言われた通り、僕は博士のカメラアイを見つめた。その間――ほんの数秒だろうか。博士がおもむろに口を開いた。
『虹彩登録完了。私は、上野将人様をマスターとして登録した』
意を決して博士のマスターになることを決めたとはいえ、実際にそう言われると、何だか気恥ずかしい。でもこれで、博士が僕のことを様付けで呼ばないようにすることが出来るようになった。
「じゃあ博士、呼び方を変えますね」
『了解した。……設定変更完了。どうだ、少年？　問題なく変更出来たかな？』
拍子抜けするくらい、あっさりと呼び方が変わったことに、僕は目を丸くした。しかも博士は、自分が僕の呼び方を変えたことを意識していない様子だった。
　ともあれ、博士から以前のように呼ばれたことに、僕は心底ホッとした。
「はい！　バッチリです！」
『そうか！　では改めて、よろしく頼むぞ。少年！』
博士の得意げな笑顔に、僕は笑みで応えた。

　僕がマスターになったことで、正常に稼働出来るようになった博士は、鏡に自分の姿を映しながら、博士は体中から駆動音を立て、機械の体に見とれていた。そんな博士に、僕は尋ねた。
「あの……そんな姿で恥ずかしくないんですか？」
博士は、カプセルから出てきたままの姿――要するに素っ裸のままだった。もっとも、関節から機械の部品が覗き見え、人工的な艶を放っているその体は、一目で人間じゃないと分かる代物だ。でも、博士の体を覆う外装は、博士の肌の色のまま。だから、人間じゃないけど人間っぽい。そんな博士の体は、僕にとって正視出来ないものだった。
　僕に尋ねられた博士は、顎に手を充てて、
『恥ずかしい、という感情反応は、今の私は検知していない。恐らく、機械の体へと変わったことで、私は人間のような感情が欠落してしまったのかもしれないな』
それはきっと、機械の体になったせいじゃないと思うんだけど――と、そこで僕は、あることを思い出した。
「あ、そういえば博士、眼鏡をかけたままカプセルの中に入っていたけど、眼鏡は……大丈夫なんですか？」
『眼鏡？』
機械になった指で、博士は自分の眼鏡の縁を触る。そして、その指をつるに滑らせたところで、『ほう！』と

声を上げた。
『これは面白いな！　私の眼鏡は、どうやら私の顔の一部となったようだ』
「えっ？　それじゃあ、博士はもう、眼鏡を外せないってことですか？」
『かもしれないな。まあ、眼鏡を外せなくなっても、特に問題はあるまい』
「でも、カメラアイなのに度の強い眼鏡をかけていたら、逆に視界が悪くなるんじゃないですか？」
『そちらは問題ないよ。恐らく、眼鏡のレンズを介した状態でも見えるよう、私のカメラアイが自動的に調整しているのだろう。さすがは私の開発した機体だ』
博士はまた、得意げに微笑んだ。それはそれですごいけど、ここで同調すると、博士を更に調子づかせることになりそうだから、僕は何も言わず苦笑いで応えた。
　それから博士は、機械になった裸体の稼働確認をするかのように、部屋の中を動き回った。そんな博士を横目に、僕は手元のタブレットを見つめた。
　このタブレットは、機械の体になった博士のリモコンのようなものだ。このタブレットを用いれば、僕は博士を自由自在に操れる。まあ、そんなことをして博士をロボットみたいに扱うつもりはないけれど。
「でも、色んなタブがあるんだなあ。……ん？　何だろう、これ？」
タブレットに目を落としていた僕は、ふと、そこにハートマークのアイコンが表示されていることに気づいた。ていうか、気づいたその直後に、指で軽く触れてしまった。途端、アイコンが小さく震えた。それに驚いた僕は、すぐさま指を離す。
「な、何だったんだ、今のは？　ねえ、博士。このハートマークのアイコンって――」
僕は顔を上げて、博士を見つめた。すると、さっきまで動き回っていた博士は、いつの間にかピタリと静止していて、僕へと視線を向けていた。
「博士？」
体中から駆動音を響かせながら、博士が僕の方へと歩み寄ってくる。気のせいか、歩きながら身をよじらせているように見えた。まるで、自分の体を魅惑的に見せるかのように。博士の様子がおかしい――そう感じた時には、博士はもう、僕の横に座っていた。いや、それだけじゃない。機械の体を、僕に摺り寄せてきたのだ。
『ふふふ……相変わらず、可愛い顔をしているな、少年』
つるつるとした感触の機械の手が、僕の頬を優しく撫でる。
「は、博士？」
『しかし少年、君も男だ。いずれは、少年から大人へと変わる……』
「な、何を……ひっ!?」
博士が僕の手を掴む。そしてその手を、博士は自分の乳房に充てた。艶々とした乳房の外装の感触が、指先に伝わってくる。硬くて冷たい、プラスチックっぽい乳房の感触が。
『どうだ？　私の胸部外装は？』
「は、博士？　ちょっと……」
『それとも、こちらの方がお好みかな？』
今までに見たことのない艶美な笑みを浮かべながら、博士は自分の股間に触れた。すると、カチッという音と共に、股間のハッチが開いた。中から、とろりとした透明な液体が零れ出る。

『私の機体は、如何なる人間にも性的満足を与えられるよう作られている。それはもちろん、君に対してもだ』
「は、博士……や、やめて……」
『さあ少年、私の機体を利用して、大人になるのだ』
博士が蕩けそうな表情で、僕に顔を寄せてきた。そのカメラアイの奥に、ハート形のランプが光って……ん？　ハート形？　これって、まさか――僕は手元のタブレットに表示されているハート形のアイコンを長押しした。すると、画面に《セクサロイドモードを停止しますか？》というメッセージが表示された。
（このアイコンって、そういう意味だったんだ）
僕はもちろん、《はい》を選択した。すると、博士のカメラアイからハート形のランプが消えた。
『……おや？　どうしてこんなところにいるんだ、少年？』
博士が不思議そうな表情で僕を見つめてきた。いや、あなたが僕のところに近寄って来たんでしょう――そう言い返すよりも前に、博士は僕の手元のタブレットに目を落とすと、『おや？』と首を傾げた。そして、僕に向かってニヤリと微笑み、
『……ほう。少年、これが気になるのかな？』
これ？　一体何のことだろう――僕は博士の視線の先を追った。
「あっ！　いや、これは……」
博士の《セクサロイドモード》を止めるためにタップした指を、ハート形のアイコンの上に重ねたままにしてしまっていたのだ。僕は慌てて指を引っ込めたけれど、博士は何かを納得したかのように何度も頷くと、
『恥ずかしがることはないぞ、少年。君も男の子だからな。こういうことに興味を持っても、決しておかしくない。いや、むしろ健全といっていい』
「あの……博士？」
『おっと失礼。そういえば、このアイコンについての説明がまだだったな。では改めて、説明――』
「い、いや、いいです。説明しなくて」
このアイコンのことは、もう十分に理解している。すると博士は、了解した、と何事もなかったかのように答えた。その直後、博士は自分の股間に目を落とすと、
『む？　私の股間部から、何やら液体が漏れているな。これは――』
博士は指で液体を拭うと、それをじっと見つめた。
『――これは人工愛液だな。しかし、どうしてこんなものが？』
博士の言葉に、僕は内心で驚いた。どうやら博士は、自分が《セクサロイドモード》に切り替わっていたことを認識していないようだ。
（どうしよう。言った方がいいのかな……）
言うべきか黙っているべきか――僕が迷っていると、博士は不意に立ち上がった。
『少年。君に、頼みたいことがある』
「頼みたいこと？　何ですか？」
博士は一つ頷くと、自分の股間を指して、
『私の機体から人工愛液が漏出した原因を探りたい。私の設計した機体に不具合が生じるとは考え難いが、しかし、万に一つの場合、というのもある。少年、手伝ってくれるかな？』

「えっ？　だって僕は、博士みたいに知識があるわけじゃないし……」
『君はもう、私のマスターだ。私の機体を管理することは、マスターである君の責務だよ』
そう言うと博士は、室内のベッドに仰向けになった。
『さあ少年。早く来たまえ』
博士の体の管理は、僕の責務――何となく気恥ずかしい言葉だったけど、確かにそうかもしれない。僕は意を決して、博士が横たわるベッドに歩み寄った。

　こうして、僕と博士の新たな日々が幕を開けた。

機械化メイドと僕

刈野　寧夢

僕の両親は、僕が幼い頃に他界してしまったけれど、大きな屋敷と、僕が生活していくには充分すぎる財産を残してくれた。

幼少の僕が、よその家に引き取られることなく暮らしていけたのは、両親が生きていた頃から身の回りの世話をしてくれていた庭師やガードマンたちがいたからだった。でも、彼らは僕の家族ではなかった。彼らには彼ら自身の家族があった。

僕にとって家族と呼べるのは、亡くなった両親を除けば毎日の食事を作るメイドのセーラさんだけだった。セーラさんは料理の腕前はもちろん、掃除や洗濯などの家事全般をそつなくこなす完璧なメイドだった。僕はそんなセーラさんが大好きで、小さい頃はいたずらで彼女の手を煩わせることもあったものだった。

僕は大きくなるにつれて若く綺麗なセーラさんに「坊ちゃま」と呼ばれるのが気恥ずかしくなり、自分から素直に甘えることはしなくなった。それでも一緒に暮らしているのを当然に思うほど、意識的ではないにせよ本心では大好きなのは変わらなかった。

僕がセーラさんに自分から声を掛けることは少なくなっていった反面、女性の体への興味は年相応に増していった。一番身近な異性なのだから、性的興味も彼女に向けてしまうのは当然のことだった。

僕は、ある日、洗濯前の彼女の服が置かれているのをたまたま見つけたので、つい手を伸ばしてしまったのだった。自分でもどうしようとしたのかは分からない、もしそのまま気づかれなければ匂いを嗅いでいたのかもしれない。自分の心臓の音がこれまでで一番大きく聞こえていた気がする。しかし、衣服に手が触れたその瞬間背後からセーラさんに声を掛けられたのだった。

僕は明らかに慌てていただろう、何かしら言い訳しようとする僕に、セーラさんはとても冷静だった。

「坊ちゃまも女性の体に興味を持つお年頃になられたんですね」

意外にもセーラさんは少し微笑むと、僕のズボンを脱がせはじめた。僕は罰を加えられるのではないかと身構えていたが、セーラさんが「坊ちゃまもお年頃ですから、我が家では我慢なさらないでいいんですよ。これも私の仕事ですから、お任せください」と言うのでおとなしく従うほかなかった。

彼女は固くなった僕のものを取り出し、握ると、前後にしごき始めた。僕はなぜそんなことをするのか分からなかったけれど、普段人に見せない、ましてや人に触られたこともないところを握られた恥ずかしさに僕の顔は赤くなり、動悸は速くなっていた。僕が息を荒げてもセーラさんは落ち着いた様子で、僕が白いものを出してしまった瞬間すら「大丈夫だから、しっかり出しきりましょうね」と言って、慌てる僕をなだめるのだった。

僕はセーラさんの手袋を自分の体から出たもので汚してしまったことを謝ろうとしたけれど、彼女は「『シャセイ』は恥ずかしいことじゃありませんから、したくなったらいつでも私に声をかけてくださいね」と、むしろ嬉しそうですらあった。

それ以来僕は、しばしばセーラさんにお願いして射精させてもらうようになった。その頃の僕は、それが性欲の発散なのだということすら分かっておらず、ましてや自分の手で射精させることなど思いもよらない

ことだった。

回数を重ねるにつれて僕も慣れてきた一方、セーラさんも様々な方法で僕を射精に導くので、飽きることはなかった。彼女が僕のものを口にくわえてきたときは、おしっこの出るところだからと止めようと思ったにもかかわらず、これまでとは違う感覚とセーラさんの一層落ち着いた様子に圧倒されて、セーラさんの口の中で果ててしまった。僕が出したものをそのまま当然のように飲み込む彼女にその味を尋ねてみたけれど、彼女は「坊ちゃまの味です」とはぐらかされてしまった。

あるとき、僕はとうとう我慢できずに、僕のものを咥えている彼女の体に手を伸ばした。彼女はすぐに察したのだろう、「そうですよね、私の体も気になりますよね」と言った。彼女は一旦手を止めて、服を脱ぎ始めた。そして、乳房を露出させた。

女性の裸は、成人向け雑誌やインターネットで見たことはあったけれど、セーラさんの乳房は、それらと一見そっくりでありながらも、それらにない上品さ、神々しさを持っていた。

「坊ちゃま、どうぞお触りください」

セーラさんの肌は艶があって、まるで乳房の方が僕の手に吸い付いてくるようだった。

乳房を揉む僕の手が、彼女の突起に触れると、赤い顔をしたセーラさんが聞いたことのない声を上げた。

「申し訳ありません、女性は男性に乳房を刺激されると声を上げてしまうものなんです。女性の体の扱いはまた後日練習することにいたしましましょう」

セーラさんは僕の手を乳房から優しく取り払うと、今度は両乳房で僕の陰茎を挟んで刺激し始めた。

「これはパイズリって言うんですよ」

彼女はまた僕の知らないことを教えてくれる。経験のない刺激に、僕は彼女の美しい肌を汚してしまった。

やがて僕の誕生日がやってきた。誕生日は我が家に勤めている人皆がお祝いしてくれるけれど、僕は毎年の豪華な料理以上の特別なプレゼントがセーラさんからあるのではないかと期待していた。

セーラさんは食事の後、僕と一緒にお風呂に入ると、体を洗い流してくれた。

「坊ちゃまも体が大きくなられましたね」

それでもセーラさんよりはまだ背が低い。僕は早くセーラさんより大きくなって、彼女を守れるぐらい強くなりたいのに。

風呂から出た後、寝室で僕はセーラさんに「せっくす」を教わった。上手にできたかは分からないけれど、セーラさんはものすごく褒めてくれた。

「セックスは自分が気持ちよくなるだけではいけません。相手の女性を思いやって、満足させなければなりません。もっと私と練習を積んで、上達しましょうね」

セーラさんは、性行為による感染症や、妊娠のリスクや、コンドームをつけなければいけないことも教えてくれた。

しかし、僕はセーラさんとのセックスでコンドームをしていない。セーラさんから返ってきた答えは、余りにも予想外のものだった。

「坊ちゃま、いえ、もう大人になられたのだから旦那さまとお呼びするべきですね。旦那さまにはお伝えしなければならないことがあります。私は、人間ではございません。人間そっくりの、アンドロイドです。性

行為をする機能はついていますが、妊娠することはありません」

僕には彼女の言葉が冗談にしか聞こえなかった。

僕は本物の女性の体に触れたことはない。だからセーラさんの体が本当の女性とどの程度違うのかは分からないけれど、少なくとも僕と同じ人間の身体のようにしか思えず、ロボットだという言葉をそのまま信じることはできなかった。

言葉で説明しても納得できない様子の僕に、セーラさんは体の中身の一部を見せてくれた。

普通の肌と変わらないように見えた腹部に突如切れ目ができ、皮膚の一部が浮かび上がって外れると、中には金属や人工樹脂でできていることがはっきりと分かる、機械が詰まっていた。

「これが私の人工膣です。旦那さまの精子を採取すると、解析して健康状態を把握するようになっております。これまでの射精で旦那さまの精子の受精能力に問題はないことが確認できております」

それを目にしてもなお、僕には自分の目の方が信じられないくらいだった。街で働くロボットを見かけることもある。しかしそれらの動きや機能はまさに機械的で、人間的なセーラさんとは対照的に思えた。

でも確かに、年老いる気配すらなく、いつ休んでいるのかも分からない彼女は、アンドロイドだとすれば納得できる部分も確かにあるのだった。

その日から僕は、セーラさんとセックスの練習をするようになった。

セーラさんから上達を褒められるのも、彼女が可愛らしい反応を見せるのも嬉しかった。

「旦那さまはずいぶんお上手になられました。いつ本物の女性とお付き合いされても安心ですね」

セーラさんはやはり僕とのセックスをあくまで本物のセックスのための練習として扱っている。

「セーラさんは僕とのセックスを練習だと言うけれど、僕は練習なんかじゃないと思ってるよ。だってセーラさんのことが好きなんだもの」

「旦那さまはまだお若いからそう思われているだけですよ。恋人ができれば、きっとお分かりになります。ロボットの私にですらこんなに優しくしてくださる旦那さまなんですから、素敵な女性とお付き合いできるはずです」

セーラさんの顔をじっと見つめる。彼女の容姿は、人工物だろうとどんな女性よりも美しいと思う。誰よりも献身的で、誰よりも僕のことを褒めてくれたのは彼女に違いない。この先彼女より美しく、献身的に僕を愛する女性が現れるとは思えなかった。

「だってセーラさんは僕のことを一番に考えてくれてるんだもの。僕だって、他の女性よりもセーラさんを一番大事にしたい」

「旦那さまは人間、私はロボットですから、旦那さまとは違います。私の存在意義は、持ち主である旦那さまのお役に立つこと。私はあくまでもオナホールやダッチワイフのような道具にすぎません。私とのセックスは、旦那さまの性欲を充足し、本物の女性との性行為の練習台になる以上のものではありません。

旦那さまにはもっと素敵な、人間の女性と愛し合うべきです。客観的に見れば、それが旦那さまにとって何より幸せに決まっています」

「他の人がなんと言おうと、セーラさんを幸せにすることこそが僕にとっての幸せなんだ」

「なにも旦那さまが結婚されたからと言って、一緒にいられなくなるわけではありません。今と同じように、旦那さまご夫婦の側でお仕えすることができれば、私は幸せです。そういう風に私はプログラムされている

んです。私の旦那さまへの愛も、所詮プログラムで再現された偽物の感情にすぎません」
「セーラさんの愛が偽物だなんて言ったら、僕の感情だって脳細胞に走る電気信号にすぎないよ」
「旦那さまの愛は、私のプログラムの心とは違う、正真正銘の本物です。ロボットの私に向けるのはもったいないことです。
どうぞ今夜はおやすみください。明日になれば旦那さまにも運命の女性との出会いがあるかもしれません。本物の愛を知れば、今夜のことなどお忘れになられますよ」

セーラさんの言うことは、徹頭徹尾業務的で、やっぱり人間とはほど遠いと言わざるを得ない。
それでもまだ、僕には彼女がロボットだというのをどこか信じ切れないでいた。もしかしたら、彼女は実はサイボーグで、生体脳で動いているのかもしれない。それなら彼女の機械的でない人間味のある反応にもうなずけるし、人間ならば僕と愛し合ってもいいはずだ。僕は頭ではそんなことはありえないとは分かりながらも、きっとそうだと自分に言い聞かせた。
僕は彼女に頭の中を見せてくれるように頼むことにした。何の躊躇もなく、彼女は快く自分の頭を開放した。人間らしさとはあまりにもかけ離れたその姿に、未だ気持ちが追いついていなかった僕は少なからぬショックを受けた。
セーラさんの頭蓋の中は、やはり電子回路の部品のようなものが一杯詰まっていた。しかし、僕はそこに予想外のものを見つけた。
透明なガラスケースのような容器。その中には、周囲の幾何学的なラインとは明らかに異質な握りこぶし大の物体、それこそ人間の脳のようなものが、細いケーブルに絡め取られながら液体の中に浮かんでいた。
「これは……？」
「それは人間の脳です」
セーラさんはやはり驚く様子もない。
「セーラさんはロボットじゃなかったの？　脳があるならサイボーグなんじゃないの？」
「いいえ、その脳は私のパーツとして組み込まれているだけで、私そのものではありません。私の思考は全て電子頭脳で行っており、その脳は人間らしい行動を真似るための補助記憶装置として搭載しているにすぎません。取外しても私の機能には何ら支障ありません」
彼女がサイボーグかもしれないという若干の期待を裏切られただけでなく、彼女の言っていることは僕には全く理解できない話だった。
「その脳はセーラさん自身じゃないってこと？　じゃあ誰の脳なの？」
「私に製造時から搭載されているパーツです。旦那さまのお気に召さなければ、パーツ交換をいたしますが」
「いやいや、そんなことはしなくていいよ」
僕の頭にはある不穏な考えがよぎった。脳があるならば、普通はロボットではなくサイボーグとして扱われるはずだ。でも実際にはセーラさんは戸籍も人権もないアンドロイドだ。
もしかしたら、セーラさんは、生身の人間を改造して作られたアンドロイドなのではないか。でも、彼女に尋ねてもその答えは分からないだろう。生きた人間をロボットに改造したとしても、死体の一部を回収して組み込んだにせよ、合法なやり方とは思えない。彼女のデータにはその記録はないようだし、下手にメーカーなどに問い合わせれば彼女が解体されてしまうかもしれない。

仮に彼女が人間を改造したアンドロイドならば、その脳は戸籍も人権も奪われた彼女の唯一残された人間の証となる。彼女の電子頭脳が脳をパーツとしてしか認識していないとしても、僕にはそれを安易に捨て去っていいもののようには思えなかった。

僕は、なんとかしてその脳の正体、ひいては彼女の正体を知りたいと思った。

僕がセーラさんとのセックスの時に彼女の名前を呼べば、彼女は喜ぶ。でも、それ以外のときは彼女はいつも、「旦那さまが私のようなロボットに熱を上げていると思われると、物笑いの種になりますから、早く運命の女性を見つけてくださいね」と悲しむ様子もなく語る。それが間違いなく今の彼女の本心であることが、僕にはこの上なく悲しいのだ。

もし彼女が人間だったら、自分の幸せを望むことができるだろう。それすら奪われてロボットに改造されてしまったとしたら、そんな酷いことはない。

僕はセーラさんに生身の女性の代わりとしてでなく、本気で愛して欲しかった。でもそれ以上に、人間としての彼女が僕を愛さないのであれば、彼女の望むようにしてあげたい。とにかく、彼女の幸せを取り戻してあげたかった。僕を愛そうが愛すまいが、どちらを選ぶにせよ、外から入力されたプログラムに従うのではなく、彼女の自由にさせてあげたかった。

「生体脳の記憶から、それが誰の脳なのかって分からないのかな」

脳を記憶装置としてしか利用していないということは、脳自体をもっとよく調べれば、分かることがあるかもしれない。

「私が搭載している生体脳は人間のほんの一部ですので、完全にその人物の記憶を読み取ることは難しいとは思いますが、残された部分に記憶されている部分に関しては、記憶や人格の解析が可能だと思います」

僕は、その脳がセーラさんが人間だったころのものである可能性に賭けることにした。

「旦那さま、生体脳の解析と記憶・人格の復元が完了いたしました。私に搭載されていた生体脳は、私の疑似人格プログラムのベースとなる人格の持ち主のものでした」

やはり、脳は彼女のものだった。セーラさんは人間を改造したロボットだったのだ。もっとも、生体脳を単なる記憶デバイスとして積んでいただけの今までの彼女が、人間の彼女そのものかと言われると難しい問題だが。

とにかく、人間としての彼女がどう思っているのか、知らなければならない。生体脳から復元した人格を起動するよう、頼んでみた。

「生体脳は、事故で亡くなった女性のものでしたが、残存部分が不充分で生体脳単体では人格を再現できません。私の疑似人格プログラムと結合して、人格を再現します」

一瞬、彼女の瞳から光が消え、すぐにまた元に戻った。

「旦那さま、私が生体脳の元の持ち主の人格、セーラです」

いつもと同じセーラさんの声、でも少し色めいて聞こえる気がする。

「人間の人格なのに旦那さまとお呼びするのは変に思われるかも知れませんが、私にはこうお呼びするほかありません。今の私は、自分がもうこの世の人間ではないことは分かっています。たとえ脳の一部があると

しても、私は電子頭脳で生かされているにすぎない、ロボットに宿った幽霊のようなものです。

人生の喜びを知らないままこの世を去った私が、今こうしてお話できているだけでも、旦那さまには感謝しなければなりません。何より、ロボットの部品となった私の脳から、人格を呼び起こしていただき、ありがとうございました。旦那さまが持ち主になられなければ、私の脳は朽ちるかパーツ交換されて、私の魂は完全に消え失せていたことでしょう」

疑似人格プログラムのベースとなった人だからか、電子頭脳と結合した人格だからかは分からないが、彼女は僕のよく知っているセーラさんでありながら、そうでないような気もする、不思議な気分だ。

「やっぱりセーラさんは人間だったんだ。脳が人間のもので、人格も生きていた人間のものだったら、戸籍や人権も取り戻せるんじゃない？　そうすればきっと、僕とだって……」

「いえ、それはできません。私は既に死んだ人間です。いくら科学の力でも、死んだ人間を生き返らせることはできません。私はあくまで人間そっくりのロボットです。生きた人間とは違うんです。

旦那さまが私を気に掛けてくださるのは有難いですが、お気持ちだけで構いません。旦那さまにこれだけ愛され、私はもう十分すぎるぐらい幸せですから、もう私のことは気になさらずに、旦那さまはご自身の幸せを探してください」

「セーラさん、いやセーラさんの脳は、それでいいと思っているの？　人間として僕と一緒になりたいとは思わないの？」

「私の生体脳は、旦那さまと添い遂げたいと思っています。でも、それが叶わないことも十分すぎるぐらい理解しているんです。私はロボット、この人格ですらそう理解しているんです。

私は、人としての幸せを知る前に命を落としましたが、こうして人に愛される幸せを十分に味わいました。こんな幸運はないと思います。

さあ旦那さま、命令してください。そうすれば私の人間としての人格は停止して、元通り完全なロボットのセーラに戻ります。私の人間としての人格は、最後に幸せな夢を見ることができました。もういつ消えても満足です」

僕はその時、寂しそうなセーラさんの表情を初めて見た。

「できないよ、僕はセーラさんに幸せになって欲しいのに」

「私はこの世のものではありませんから、もう一生分の幸せを使い切りました。旦那さまにはまだこれからの人生があります。それをロボットのために費やすべきではありません。

あくまで私はロボット、人間の旦那さまとは生きている時間が違います。長く一緒に過ごせば過ごすほど、別れは辛いものになることでしょう。今終わりにしてしまった方が、旦那さまは新たな幸せを探すこともできるはずです」

セーラさんの言う通りだ。僕は死ぬまで彼女と一緒にいることができるけれど、彼女はそうではない。僕を看取るという辛い経験を彼女に強いなければならない。しかも、一生を共に過ごした後で彼女の人格をオフにするのであれば、彼女はきっと僕の一生を自分のものにしてしまったことを後悔するに違いない。

僕は、ある思いつきを彼女に提案することにした。

「僕もロボットになれば、セーラさんとずっと一緒にいられるんじゃないの？」

「それはいけません。せっかく人間として産まれたのに、生身の身体を捨てて旦那さまが私と同じロボットなんかになっては駄目です」

「僕からセーラさんにあげられるものは何もない。でも、僕の愛を永遠のものにすることはできるんじゃない。今のセーラさんはたしかにロボットかもしれない、でも今セーラさんは不幸なの？」
「幸せでないとは言えません。だって、ロボットにならなければ事故で終わっていた私の人生が、こうして旦那さまと出会うことができたんですから。
　でも、私は人生の半ばで命を落としたからこそ、旦那さまには人生を味わい、人間としての幸せをつかんで欲しいのです」
「僕はセーラさんのことを愛しているんだ。愛している人と同じ道を歩むことが幸せでないはずがないよ。
　それに、僕のことをセーラさんは何でも知ってるのに、僕はセーラさんのことを何も知らない。僕の脳を電子頭脳に置き換えれば、少しでもセーラさんに近づいて、理解できるようになると思うんだ」
　じっと二人で見つめ合い、静かな時間が流れる。
「……分かりました。脳以外の全身と、脳の五〇％までしたら改造しても法律上人間と認められ人権を維持できます。また、五〇％が電子頭脳であれば、私のプログラムも十分処理して理解していただくことができると思います」
　「あのね、セーラさんにお願いがあるんだ。僕の改造手術は、セーラさんにやってほしいんだ。小さい頃は怪我するとよく手当てしてくれたよね。誰よりも僕のことを大事に思ってくれているセーラさんに、僕の生身の最後にも関わって欲しいんだ」
「最近は怪我も病気もなさらなくなりましたが、旦那さまの小さい頃はそんなこともありましたね。私には医療・看護用のプログラムも内蔵されていますし、手術に必要なプログラムも導入しますから、ご期待に沿えるかと存じます。他の方にではなく、私自身の手で旦那さまの手術ができることを嬉しく思うのも、生体脳のおかげかもしれませんね」

　――生身の身体を機械に置き換える手術が始まる。全身を機械に置き換える手術は、一部を置き換えるよりも単純だ。人間の脳を取出し、その一部を電子頭脳にコピーして交換した上で、それをロボットの体に組み込むだけだからだ。リハビリテーションも必要ない。機械の体を動かすのに必要なプログラムは電子頭脳に予めインプットされているからだ。
　一体のロボットが、一人の人間の、生身として最後の瞬間に立ち会う。ロボットは、人間の頭蓋を切り開いて脳髄を取り出すと、両手の上に載せて静かに口づけをした。そしてそのロボットは脳から電子頭脳にデータを移す作業を始めた――

ココロの重荷を捨てたくて

ロボイリス

「インターン先決まったんだ」

中庭で二人の女子学生が弁当を片手に話していた。黒いロングヘアに年齢の割に幼さを感じさせる髪飾りを前髪につけた女子学生がそう言った。

「そうなの!?　涼花、随分悩んでたみたいだけど、決まったならよかった！　で、いつから？」

「来月から」

「そっかー、じゃあもうあんまり会えなくなっちゃうね」

「そうだね……ちょっと淋しいし不安だな」

不安げに顔を曇らせた彼女は三坂涼花……本名は三坂涼介という。彼女は性別違和を抱え、中学生の頃から治療を始め、その後ずっと女性として生きて来た。家族や友人の理解があったとはいえ、同級生やあるいは教師からは偏見の目で見られ、いじめられることさえあった。精神的に不安定になることも多く、今でこそ大分落ち着いてはいるが、それでも不安に思うことは多く、ふさぎ込みがちになることもあった。女性的な身体に近づいているものの、しかし本質的に男性なのは変わらず、それ故の悩みも尽きない。

「大丈夫だって、涼花なら。ところで恭也には伝えたの？　インターンのこと」

「え？　うーん、言ったほうがいいのかなぁ。別に言うほどのことでもないかなって」

「メッセージくらい送ったら？」

「そうだね、そうしようかな」

涼花と話すもう一人の女子学生は朝倉美奈。高校時代からの友人である。美奈はクラスのリーダー的存在であり、男子からも女子からも少々距離を置かれていた涼花によく声をかけ、友人として支えていた。

「恭也もなにしてるんだろうね。大学、愛知だっけ。一人暮らししてるんでしょ？」

話題に上がる恭也は涼介とは保育園時代からの付き合いで、親友と言ってもいい。涼介が自らの性についての違和感を初めて話したのも恭也であった。話した後、急に恥ずかしくなり、「冗談だよ」と笑い飛ばそうとした涼介に真剣な顔で、

「お前、そんな冗談言えるやつじゃないだろ。俺が一番良く知ってる。親にも相談してみたほうがいい。もしお前の親が否定したって、お前の選択なら俺は応援してるからな！」

と言ってくれた。その言葉がなければ今も男性として生きていたかもしれない。だから恭也には随分と感謝している。

「涼花？」

「え？　あ、ああごめん。ちょっと考え事」

「そう？　まあ、何かあったら言ってね。力になれるかはわかんないけど」

「うん、ありがとう」

美奈と別れた後、家路につく涼花。しかし足取りは重く、家についても気分は全く上がらなかった。恭也に「来週からインターンです」とだけメッセージを送る。すぐに既読になったメッセージには「頑張れ！」

というスタンプだけの返信が来た。

「……ふふ」

恭也らしいな。涼花はそう思う。女として中学に通い始めても、恭也だけは今まで通り接してくれた。いまだって、悪友だった小学生の頃と何も変わらない。変わらずに接してくれることは嬉しくもあるが、同時に、少々の寂しさもある。恭也は自分のことをどう思っているのだろうか。……女として、見てくれているのだろうか。

「……っと、ダメダメ、考えない！」

一度考え出すと止まらなくなる。今までの関係性が崩れるのが嫌だった。でも……

「恭也ぁ……私、つらいよ……」

髪飾りをぎゅっと握り、涼花は一人呟いた。

※

インターン先は「シンセスティック・テクノロジー」という研究所だった。最先端の産業用ロボットやＡＩ技術の研究をしており、その技術は医療や介護、教育など多岐にわたる。涼花はその研究所で事務を中心とした仕事を行っていた。仕事量は多く、残業になることもしばしばあった。この日も上司から帰っていいよ、と言われたことには時計の針が一〇時を回っていた。こんなに多忙な仕事だとは思っていなかった。涼花はぼんやりと廊下を進んだ。

「あれ？」

気付くと、薄暗い廊下の真ん中に立っていた。まっすぐ玄関に向かったつもりが、逆方向だったらしい。踵を返そうとしたとき、ふと、機械の動くような音が聞こえた。涼花は気になり、その方向に向かう。音は段々と近くなり、その音が聞こえる部屋の前で立ち止まった。涼花はおそるおそる扉を開けた。

「……え？」

そこには、ロボットが一体佇んでいた。この研究所内でロボットと言えばいわゆるロボットアームのような単なる装置、といった感じだった。しかし目の前のロボットはどうだろうか。金属製のボディであるとはいえ、明確に人型である。しかも顔は人間のそれをそのまま取り付けたかのような造形で、目にあたる部分にはカメラアイが光っている。

「……すごい……」

思わず感嘆の声を上げる。そのロボットはキュインと音をさせ涼花にゆっくりと近づいてくる。機械的な動きではあるが、人間にかなり近い。動く度にする音は先程涼花が聞いたものと同じだった。

「あ、あの」

涼花は後ずさりながら声を掛ける。ロボットは涼花を壁際まで追い詰めると、腕を伸ばしてくる。

『……ﾀｽｹ、ﾃ』

「えっ!?」

「おい！　誰かいるのか!?」

部屋の電気が付く。開け放したままの扉に目を向けると、インターン担当の職員・川崎が驚いた様子で立っていた。

「三坂くん!?　何をしているんだ！　こんな遅く……に……」
　川崎はロボットと涼花を交互に見る。そして、血相を変えて近づいてくる。
「なぜここにいる!?」
「あの、えっと、ロボットの、音が聞こえて、気になって……」
「なんだって!?」川崎は激昂する。
「まあいい。このロボットのことは忘れなさい」
　川崎はそう言うとロボットの首筋のスイッチを押し込んだ。ロボットはすぐに目の光を失い、うなだれた。
「さあ、三坂くん。玄関まで送っていこう」
「きゃっ」
　川崎に腕を捕まれ、涼花は無理矢理に引っ張られる。その瞬間、髪飾りが落ちたことに涼花は気づかなかった。
　川崎とともに廊下を歩く。無言なのがなんだか辛い。
「あの……」
「……なんだ？」
　何を言うべきか。涼花は悩んだ。
「……ロボットっていいですよね。無感情で悩みもなくて。生まれ変わったらそういう機械になりたい……私はそう思います」
　涼花は性別のことや様々なことで悩み、辛い思いをし、精神的にも随分追い詰められていた。そんな思いからふと出た言葉だった。しかし川崎は足を止め、
「……三坂くん」
と静かに言った。
「はい……」
「……そうだな、……してしまえば、口を割ることはないか……納品も待たせているし……」
　何やらブツブツ呟いた後、涼花に向かっていう。
「明日は休みだが、午前一〇時にここに来られるかね？」
「え？あ、はい」
「よし、じゃあ決まりだ。一〇時にまたここに来なさい」
　涼花に有無を言わせない口調で言う。
「は、はい……」
　そう返事をするしかなかった。

※

　川崎に連れられ、研究所の奥へと向かった涼花は、ある部屋の前に立つ。
「ここだ」
　涼花は中に足を踏み入れる。部屋は薄暗く、殺風景なコンクリート打ちっ放しの部屋に手術台や薬品棚などが見える。そして奥には人影が見えた。

「ドクター・ジグラ。三坂涼花を連れてきた」

川崎はそう言う。ドクター・ジグラと呼ばれた人影はゆっくりとこちらに向かってくる。

「ヒヒヒッ、君が三坂君かね」

ジグラ博士は六〇代後半と思しき高齢の男性であった。白衣を着込み、目の下には深いクマがあり、モノクルをかけた、いかにもマッドサイエンティストといった風貌だ。

「あの……えっと……」

涼花が戸惑っていると、ジグラ博士はヒッヒッと笑いながら告げた。

「ようこそ、吾輩のラボへ。早速だが、君はロボットになりたいのだとそこの川崎が言っていたが、事実かね」

「え……？」

確かに涼花は昨日そんな話をしたが、なぜここでその話が出てくるのか理解できなかった。

「どうなんだね」

ドクター・ジグラは涼花に詰め寄る。

「えっと……はい……」涼花がおずおずと答えると、ジグラ博士は大きく笑った。

「ヒヒッ！　そうか、そうか！」

そう言って大笑いする。そして奥にいたロボット……昨日涼花が見たもの……を呼び寄せる。

「どうかね？　ＭＨＲ―００、通称〝ゼロ〟じゃ！　どうじゃ！　すごいじゃろう!?」

「は、はい」

涼花はそう答える。この怪しげな博士が何を言いたいのか、全く理解できなかった。

「ヒヒヒっ、そしてこのロボットがどうすごいのかと言うとな、なんと人間を改造したのじゃ‼　ヒヒッ！」

「!?」

涼花は驚愕する。人間を改造した、ロボット……そんなことが……？

「ＡＩだのなんだのは随分発達したが、ロボットを動かすのにはまだ至っておらん。じゃからの、人間を改造してロボットにすることによってそのへんのすべてを解決したのじゃ‼　そして三坂くん！　喜ぶのじゃ、君は貴重な実験体として、このＭＨＲシリーズ七号機として生まれ変わるのじゃ！　どうじゃ？嬉しいじゃろう!?　ヒヒッ！」

「え、あ、その……」

涼花は混乱した。人間を改造したロボット……そんなことが……。しかし……突然のことで頭がうまく回らない。確かにロボットのような無感情な存在になりたいという話はしたが……。

「ん？　なんじゃ、嬉しくないのか？」

「えっと……」

嬉しいかどうか。そんなことは分からなかった。ロボットになることが、人間を捨てることが……。涼花は口ごもった。しかし、ハッと気づいたようにジグラ博士は続ける。

「そうか！　外見が気になるのじゃな!?ヒヒヒっ、何！しっかりと雌の機体（からだ）に作り変えてやるわい！　機械に性別などないんじゃが、ま、見た目の問題じゃな！」

その辺に無造作に置かれたディスプレイに３Ｄ映像が映し出される。メタリックな外観はそこにいる〝ゼロ〟と変わりないが、全体に丸みを帯びた女性的な姿が表示されていた。

「こんな、感じに……」
「そうじゃ！　今なら希望も受け付けるぞ！　吾輩は今日、気分がいいのじゃ！　ほれ、なんでも言ってみなさい」
　ジグラ博士は相変わらずヒヒヒと気味の悪い笑い声を上げながら言う。
「あ、あの……」
　涼花は意を決したように口を開く。ヒヒッと笑いながらジグラ博士は先を促す。
「ん？　なんじゃ？」
「も、もう少し胸を大きく……」
「ふん、乳か？　どうせカチカチの金属になるんじゃが、それでも？」
「は、はい……」
「ヒヒヒ、肉体は雄でも心は雌なんじゃものな！　もちろんかまわんぞ！」
キーボードを叩くと、３Ｄモデルが涼花の要望に応えるように変化した。
「ほれ！　こんなでよいかの!?」
「あ、ありがとうございます……これです！　これがいいと思ってたんです！」
　それはまさに涼花にとって理想的な体型だった。平均よりかなり大きめな胸、程よくくびれたウエストからヒップへのライン。メカニカルでありながらそれは美しかった。機械的な身体も強くありたいと願う涼花には理想のものに思えた。
「ヒヒヒ、それではの、早速取り掛かるとしようかの」
　涼花はなにかに取り憑かれたかのようにフラフラと手術台に向かう。服を脱ぎ、手術台に横になると、ジグラ博士が近づいてくる。
「では始めるぞい」
　そう言うと涼花の腕にチクリとした痛みが走った。麻酔の注射がひんやりと感じられ、徐々に意識が遠のいていく。
「ヒヒッ！　目が覚めたらもう君はロボットじゃよ……ヒヒ……」
（ああ、家族や恭也、美奈にも言わずに来ちゃったけど、大丈夫だろうか。ロボットになったら、もうみんなと会えなくなるのかな……それはちょっと寂しいな……）
　薄れる意識の中、そんなことを考えていたが、やがて完全に意識は途切れた。

※

「ドクター・ジグラ。わかっていますよね」
「ヒヒヒッ。もちろんだとも。人格は消去し、〝商品〟にするのだろう？　吾輩は改造さえできればよいのだ！　そして改造した後のこやつをどうしようと、お主の勝手だ。好きにするがよい！　ヒッヒヒヒッ！」
　ジグラ博士と川崎は言葉を交わす。ジグラ博士は楽しそうに、川崎は淡々と。
「しかし最近、改造に手間を掛けすぎでは？随分と費用が掛かっている。少しは自重していただかないと……」
　川崎がジグラ博士を諫めるように言う。

「うるさい！　改造くらい吾輩の好きなようにさせてもらおう。より強靭で、より美しいものにするためには時間と費用がかかるのだよ。川崎！　お主もそれくらい分かるだろう!?」

ジグラ博士は鼻で笑って答えた。そして川崎は冷めた表情でこう言った。

「存じておりますよ……ですが……」

「今まで吾輩が改造してきた連中を、お主がいくらで売っているか、知らないと思うておるのか!?　ヒヒッ！　吾輩が改造した連中の〝商品価値〟はお主が一番良く知っているはずだ！」

ジグラ博士は川崎の言葉を遮る。

「……確かにそうですが、しかし……」

「ふん！　まあいいわ！　とにかく！　改造が終わるまではこやつは吾輩のものじゃ！　ヒヒヒッ、しかし女子の姿をした雄とは……腕が鳴るのう！」

ジグラ博士は不敵に笑い、涼花の裸体を眺める。川崎は小さくため息を吐く。ジグラ博士が川崎の注意を素直に聞くことはない。改造さえできればジグラ博士は満足するのだから、放っておけばいいだろう。彼はそう考え直すことにした。

「ではドクター、任せましたよ」

川崎はそういうと研究所を後にした。

ジグラ博士は、涼花の寝るベッドの前に立つ。既に麻酔で意識を失った身体に電極をつけ、改造作業を始めた。

「ふんふんふん〜っ！　んふ〜」

ジグラ博士の鼻歌が研究室に響き渡る。躊躇することなくメスでズバズバと涼花の身体を切り裂いていく。並外れた正確さ、淀みない動きで涼花を解体していく。涼花の身体からは血液が流れ出し、作業台の上に溜まっていく。

「ほほう、しかし、雄だというのに、随分と……いや、人間の身体というのは不思議なものじゃ……しかし、ヒヒヒッ機械にしてしまえば、雄も雌もないがな！　ヒヒヒッ！」

ドクター・ジグラは涼花の身体をまじまじと見つめながら呟く。長年の治療により女性化の進んだ身体。胸は膨らみ、シルエットも女性といって差し支えない。下腹部の一点だけが本来の性別が男性であることを主張していた。

「せっかくじゃから、色々機能をつけるかの、ヒヒヒっ」

つぶやきながらもジグラの手は止まらない。腹の中から無駄な臓器を摘出する。臓器はしっかり保存しておかないと商品価値がどうのと川崎がうるさい。冷蔵のパックにぐちゃぐちゃと詰め込んでいく。

金属の骨格、そして筋肉の代わりにモーターやアクチュエーターを取り付ける。身体がひと段落すると今度は頭部に取り掛かる。

「ふん、顔はこのままでも十分女子として通じるじゃろ。さて、あとは……」

頭蓋骨を専用の器具で切り開いていく。そして脳にブスブスと電極を突き刺す。

「ヒッヒィッ！　楽しいなぁ！」

ドクター・ジグラは満足げに笑うと、手元のスイッチをひねる。電極から電気が脳に流し込まれ、涼花は白目を剥いてビクビクと痙攣を繰り返す。

「ヒヒッ！　貴様の脳はただの計算装置となるのじゃ！　人間らしく振る舞う必要はないからのう！　あ

とは……」

脳の一部を取り除きながらそこに様々な機械類を詰め込んでいく。

「ふん、この辺もいらんか……まだ入らんのう……ヒヒッ」

ジグラ博士は、涼花の肉体に様々な機械を取り付けては外していく。その姿はまさしくマッドサイエンティストのそれであった。

「ヒヒヒッ、完成じゃ！　ＭＨＲ―０７「アークティア」よ！　目覚めるのじゃ！」

ポチっという音と共に、元は涼花だったソレは目を開く。「アークティア」は平坦な声で言葉を紡いだ。

「起動しました。私はＭＨＲ―０７「アークティア」です。よろしくお願いします」

アークティアは淡々と述べ、ゆっくりと立ち上がる。ジグラ博士はそれを見て満足げに笑う。

「ヒヒッ、成功じゃな！　今までで最高の作品じゃ！」

メタリックなボディは明確に女性的な体型を描いており、涼花のそれよりも随分と盛られた乳房は、豊満でありながらも硬質で、金属の光沢を放っていた。「ボディに損傷なし。四肢および神経接続をチェック」

アークティアは初回起動プログラムに従い、作業台の上で腕を動かしている。直線的な動きでありながらもスムーズな動きを見せ、動作に支障はないようだった。

「神経接続完了。四肢動作異常なし」

ジグラ博士は満足げに呟く。

「ヒヒヒッ、いいぞ……見事だ！」

ドクター・ジグラは興奮気味に手を叩く。

「手放すのも惜しいくらいだが、貴様の改造でまだまだ改善すべき点が見つかった。次の改造に活かしていかなければな、ヒヒッ」

ジグラ博士はアークティアに語り掛けるようにいう。ジグラ博士が手元の端末を操作すると、涼花、いやアークティアは「停止命令を受諾。保管ボックスに入り、スリープ状態に移行」と言って、作業台の横に置かれていた箱に自ら入り、動作を停止した。

※

涼花と連絡がつかなくなった。そんな連絡を涼花の妹、花（はな）から受けた恭也はいても立ってもたまらず、涼花の通う大学のある関東近郊の街へと降り立った。久しぶりに再会した恭也と美奈は、最後に向かったと思われるインターン先のシンセスティック・テクノロジーへと向かったが、担当者の川崎は「こちらも連絡がつかない、何かあったら連絡する」

の一点張り。最後には「こちらも突然出勤しなくなって迷惑しているんだ！」と怒鳴られた。

「一体、どこにいるんだ……」

「涼花、身体のことで随分悩んでいたもの。もしかして……」

美奈は最悪の想像をして俯いている。「そ、そうだったのか？俺には随分立ち直っていたように見えていたが……」

「はぁ、涼花はあんたにはだけには心配かけまいとしてたんでしょ。無理して笑ってたんだよ。気づかなかったの？」

美奈は呆れ気味に言う。
「そ、そうだったのか……でもどうして」
「……恭也、気付かないの？」
その言葉は先程とほとんど変わらなかったが、恭也はその言葉の意味がわかってしまった。美奈から目を逸し、小さく「すまない。だけど……」と呟いた。
「はぁ、自分の気持ちに素直になれないところはそっくりね……」
その美奈の言葉は小さく、恭也は聞き返したが、美奈はもうそれ以上恭也には何もいわなかった。
「とにかく、まずは少しでも情報をあつめないと。美奈も手伝ってくれ」
「もちろん。涼花のこと、絶対見つけ出すんだから」
二人は決意を固めて歩き出した。

※

「ティア、そっちの書類を取ってくれ」
『はい。優斗様。この書類でよろしいでしょうか』
夜。湾岸部の高層マンションの最上階。広いリビングの隅に置かれたデスクに座る男性、その傍らにアークティアはいた。
「ああ、ありがとう」
優斗と呼ばれた男性は書類を受け取ると目を通していく。
『お飲み物は如何でしょうか？』
「ん？ああ、頼むよ」
『かしこまりました。ホットのハーブティでよろしいですか？』
「ああ、お願いするよ」
篠崎優斗は新興の IT 系ベンチャー企業の社長である。若くして一財産を為した彼は、この広いマンションの一室に居を構え、その有り余る資金で最新鋭の人型ロボットを購入した。
「しかし、すごいもんだなぁ」
アークティアの背中を見ながら一人呟く。
とある取引先の大手企業の社長の自宅で見た銀色の男性型ロボット。それはＭＨＲ―０２・ダリウスと名乗り、人間に近い動きで応対をしていた。篠崎はそれに惹かれ、その社長から購入先を聞き、すぐに連絡を取った。相手は「シンセスティック・テクノロジー」の川崎と名乗った。話を進める中で研究の都合で納品時期は未定と言われ、またビジュアル……ロボットの容姿は決められない、とのことであった。だが、篠崎はそれでもよかった。思いの外早くロボットの完成連絡が来たのは先週のことで、数日前からこの篠崎の自宅で稼働している。

『優斗様、ハーブティが入りました』
そんなことを考えているうちにアークティアの声で我に返る。デスクの上には湯気を立てるカップが置かれていた。

「ありがとう、ティア」
『いえ、当然のことをしたまでです』
「……しかし、本当によくできたロボットだよなぁ……」
　ＭＨＲ―０７「アークティア」。シンセスティック・テクノロジー製の多目的ロボットである。人間に近い柔軟な思考や行動が可能なこのロボットは、家事や雑事だけでなく、秘書や護衛としての役割にも使えるそうだ。
「ティア、この書類は別のファイルに入れておいてくれ」
『かしこまりました。優斗様』
　動きは直線的で、どこかぎこちなさを感じさせるが、十分にスムーズだ。だが動きよりもなによりも曖昧な指示を的確に理解し、忠実に動くその姿。時によっては先ほどのようにのどの渇きを察して飲み物を用意してくれたり、部屋が散らかっていれば何も言わずとも掃除もしてくれる。それはまさに理想のロボットといっても過言ではない。
「しかし、女性型とは思わなかったが」
　ダリウスのようなかっちりした男性のようなビジュアルのロボットをイメージしていた篠崎にとって、このアークティアのような女性らしいフォルムは篠崎にとって少々意外であった。
『……何か問題がありましたでしょうか？』
「いやいや、そうじゃないよ」
　慌てて否定するとアークティアはペコリと頭を下げた。
『そうですか。申し訳ありません』
　その姿もどこか愛らしく、違和感なく生活に溶け込んでいた。無機質で人形のような雰囲気ももちろんあるが、時折見せるちょっとした仕草……例えば今のような謝罪など、その仕草がなんだか妙に人間臭い。
「……まあ、いいか」
　時折そういうふとした動作に違和感を覚えることもあるが、高性能ゆえのことだろうと、篠崎は納得することにした。
しばらく仕事をこなす。アークティアは篠崎の指示やあるいは自発的に手伝いをしていく。
　一冊のファイルをアークティアが篠崎のデスクに置く。
「助かるよ、ティア」
『いえ、優斗様のお役に立てたなら光栄です』
　相変わらずの無機質で平坦な口調だが、篠崎はその声の響きにどこか暖かみを感じた。それはおそらく気のせいなのだろうが、そんな些細なところが心地よかった。
「さてと……」
　そうしてしばらく優斗の仕事は続き、夜も更けてきた頃にアークティアに声をかけた。
「もうそろそろ寝ようか」
『はい。かしこまりました』
　優斗は寝室に入り、ベッドに横になる。寝室までついてくるのは少々気になるのだが、以前に聞いたら『優斗様がお休みになるまで確認いたします』などと言い始めたので、もう好きにさせておくことにした。
『おやすみなさいませ』

「ふぁ……おやすみ……」

あくびをかみ殺す。疲れた身体はすぐに眠りへと引き込まれていく……。アークティアはその様子を確認したのち、

『優斗様の就寝を確認しました。メンテナンスモードに移行します』

と呟いてメンテナンス用の保管ボックスへと戻っていった。

※

失踪した涼花の捜索は難航を極めていた。足取りを追ってみてもどう考えても「シンセスティック・テクノロジー」へ向かったことまでしかわからないのだ。

（あの研究所が何か隠している？）

恭也は再び研究所へと向かった。深夜、裏手から研究所へと忍び込む。警察に言ったって「捜査中です」の一言で相手にしてもらえないのはわかっている。ならば……。

深夜とはいえ、一部の部屋には明かりが灯っている。まだ人はいるのだろう。だからこそ、警備システムが作動していないはず……。その予想は的中した。

「やっぱりな……」

研究所内を歩き回り、時折、鍵のかかっていない部屋の扉を開け、中に入る。

「ん？」

視界に輝くものが映る。

「これは……どうしてここに」

昔、涼花に渡した髪飾りだ。女子として学校に通い始めた涼花に何かの折に渡したものだ。まだ持っていたのか。しかし、これで涼花がここでなにかに巻き込まれた可能性が高くなった。恭也はポケットにそれを入れ、部屋を出ようとした。

「ん？」

何か物音がする。

恭也は扉から頭だけ出し、音のする方を覗き見る。

「あれは……ロボット？」

メタルボディのロボットが機械音をさせながら歩いている。そのロボットは恭也が今までに見たことがないほど精巧で、人間に近い外観だった。

突然そのロボットが恭也の方を向いた。

『侵入者発見』

「やばっ……！」

ロボットは恭也の隠れている物陰に近寄ってくる。慌てて逃げようとしたが、既に遅かった。

「くっ……」

ロボットはあっという間に恭也を追い詰めた。そして、恭也の首筋に突き付けられた指先から電流がほとばしる。

「がっ……！」

恭也はその場に崩れ落ちた。身体が言うことをきかない……。ロボットはそんな恭也の首根っこを掴むと、ズルズルと引き摺りながらどこかへ運んで行こうとした。

その時

「恭也ぁ!!」

美奈がロボットの後ろから飛び掛る。ロボットは受け身を取れず、ガチャンと床に倒れこんだ。

「美奈……」

「大丈夫!?」

恭也は倒れこんだロボットから這い出して、なんとか立ち上がろうとしたが、身体にうまく力が入らなかった。そんな恭也を美奈は支える。

『ガピッ！　アガＧＧＧ！Ｏオレ・俺は・いった……ｉ』

ロボットが突然わけのわからないことを話し出し、恭也と美奈は顔を見合わせる。

「だ、大丈夫ですか」

「ちょ、ちょっと恭也!?」

恭也は自らの手を見つめ驚いている様子のロボットに声をかける。

『ｏｒｅ・は、ＭＨＲ―００……いや！　ちがう俺はチガウチガウ』

ロボットは何やら混乱しているようだ。頭を抱え、「俺は何なんだ？」などと言っている。

「恭也！　ロボットを心配してる場合じゃないでしょ!?」

「……あ、ああっ！」

恭也は美奈の言葉に我に返ると、ロボットの頭部に手をかける。

「な、何してるの!?」

「いいから！」

そんな声を無視して恭也はロボットの頭、スリットの入っている部分をこじ開けた。

『がっ!?　ガッ！　アガガ……アガァ……』

ロボットはガクガクと震え、そのまま動かなくなる。

「……やっぱり」

そんな恭也の呟きを美奈は聞き逃さなかった。

「どういうこと？」

「見ろよ」

こじ開けた頭部には様々な機械が詰まっていたが、よく見ると人間の脳のようなものが透明なアクリルケースに包まれ、取り付けられていた。

「このロボットは人間なんだ……。おそらく……」

「う、うそでしょ？」

「もしかすると、涼花もここでこういうロボットの素材にされてしまったのかも……」

恭也のその言葉に美奈は顔を青くした。

「そ、そんな……！　だって！　もしそれが本当なら、涼花は……っ！」

「美奈、落ち着け。まだ決まったわけじゃない」

「でも！」

そんな中、廊下の向こうから騒がしい声が聞こえてきた。
「やばい、美奈、逃げよう！」
「う、うん！　わかった」
二人はなんとか裏手から逃げることに成功した。
「これからどうするの？」
「警察に……言ってもわかってもらえないだろうな……。とにかく、まずは涼花が本当にここでロボットの素材にされてしまったかどうか確かめたいけど……」
「でも、もしこの研究所の中にいるのなら手出しできなさそうね……」
「ああ……」
二人の間に沈黙が流れる。その沈黙は重く、息苦しくさえ感じた。

※

「恭也！」
事態が動いたのはしばらくしてからのことだった。涼花と同じくインターンに向かった学生に話を聞いたり、警察へ連絡をしたりしたが、やはり手掛かりはなかった。そんな中で美奈が見つけた画像投稿ＳＮＳへの書き込み。それはとあるパーティでの一コマだった。その写真の背景に小さく涼花のような人物が映っている。
「これ、涼花よね？」
「ああ……おそらく」
その画像は不鮮明で、はっきりとはわからないが、確かにそれは涼花のように見えた。しかし、身体はロボットのように銀色に光っていた。
「恭也、これ……行ってみる？」
「……ああ」
そうして二人はその投稿をした人物ーーある企業の社長の元へと向かったのだった。

※

門前払いされるかと思った二人だったが、その予想に反して、その社長、篠崎は割とすんなりと二人を受け入れ、社長室へと案内してくれた。
「えっと、会社見学かなにかだって？」
篠崎はまだ三〇代半ば、若い社長だ。
「いえ、その……」
恭也は言葉に詰まる。涼花のことをどう切り出せばいいのか……。しかし、美奈がそんな恭也の思いを察したのか、話し始める。
「……篠崎さん、この写真について伺いたいのですが……？」
「え？」

美奈がスマホに表示させた画像を篠崎に見せると、彼は少し驚いた様子を見せた。
「ああこれは、先月のホームパーティーだね。取引先との懇親を深めるためにやっているんだが、それがどうしたのかな？」
「いえ……この写真に写っているのが私の友人に似ていたので、もしかしてと思いまして」
美奈は上手く話を繋げる。恭也はただ黙って二人のやりとりを聞いていた。
「この奥の……ああ、映ってるな。まずいな……で、この子がそうなのかい？」
「……何がまずいんでしょうか」
篠崎は少々困った様子で頭をかいた。
「いや……あまり言いたくないんだけどね、私の信用に関わることだから」
「話してください」
有無を言わせない口調で美奈は話す。篠崎はその圧力に負けたのか、「仕方がないな……」
と口を開いた。
「実はこのロボット、周囲に口外しないでくれと言われているんだ。まだ研究段階のものだそうでね。気づかなかったとはいえ、SNS 上にアップしてしまったのは不味かったなと思ってね」
「そのロボットはもしかして、シンセスティック・テクノロジーのものでは？」
「そ、そうだが？　なぜ知っているんだ？」
篠崎のその反応に美奈と恭也は目を合わせる。つまり、この写真に写っているロボットは涼花の可能性が高いと……。
「このロボットにあわせてくれませんか？　私達の親友の可能性があるんです！」
恭也と美奈の話を聞き、篠崎は困惑したように言う。
「人間をロボットにするなんて、そんな非常識的な……。しかし、……いや、例えばその涼花という子がロボットのモデルになった可能性はないのかな？そのほうがまだしっくりくるのだけど」
篠崎はそう呟く。しかし、美奈と恭也にはそれは考えにくいことであった。なぜなら……。
「涼花は……そのロボットが篠崎さんの家に納品される直前に失踪しているんです」
篠崎から聞き出したそのロボットの納品日は涼花が失踪した丁度三日後のことだった。
「たしかに……それは偶然の一致とは考えにくいな……」
篠崎は口元に手を当て、何かを考えている様子だった。恭也と美奈もその様子を見つめていたが、意を決したように話し始める。
「お願いです。会わせてください」
「お願いします！」
そんな二人の懇願を受け、篠崎はしばらく考えた後、こう切り出した。
「……わかりました。ひとまず、ティアに会ってもらいましょうか。話はそれからです」

※

「りょ、涼花なの？」
篠崎のマンションで恭也と美奈はアークティアと面会する。美奈の言葉に目の前のロボットは一瞬首を傾

げ、
『私はＭＨＲ―０７・アークティアです』
と言い放った。その声は涼花によく似ていたが、淡々としたその口調は空虚で、ロボットらしいと感じさせる。
「本当に涼花じゃないの？覚えていない？」
　美奈がそう訴えるとアークティアは
『申し訳ありません』
と一言だけ言った。
「そんな……」
　そんな様子に落胆する二人を見て篠崎は申し訳なさそうに言う。
「やはり、ただのロボットだと思うのですが……、涼花さんというのは親友なのでしょう？　なら流石にお二人のことを認識できないのは不自然ではないでしょうか？」
　篠崎の言葉に恭也と美奈は再びアークティアを見る。その目にはなんの感情も宿っていないように見える。
「そんな……」
　恭也と美奈はうなだれながら、篠崎に促され、篠崎の部屋を後にしようとした。
「ティア、お二人を送って差し上げて」
『はい、優斗様。かしこまりました。……キョウヤ様、ミナ様、玄関までお送りいたします』
　はっとして視線を上げた恭也は、アークティアのその一言に違和感を覚えた。
「今……キョウヤ様って言わなかったか」
「えっ？」
　この部屋に入ってから篠崎も恭也たちも名前を告げていないはずだ。それなのに、なぜアークティアは恭也たちの名前を知っているのだろうか？
「ティア、どういうことなんだい？」
　篠崎もアークティアのその言葉に驚いたのか、そう尋ねる。
『視覚情報や声帯情報を私のデータベースと照合、その結果、人物データが登録されていましたので、その名称でお呼びしました。間違っていたでしょうか？』
「い、いや……でも、そのデータはいつ登録されたものなのかな？」
　篠崎はアークティアに冷静に尋ねる。しかし、その声は微かに震えていた。
『はい。ミナ様のデータは五年八ヶ月前、キョウヤ様のデータは……申し訳ありませんが明確な情報が取得できませんでした』
　作られてからまだ数ヶ月しか経っていないはずのアークティアが、どうやってそのようなデータを登録できるのだろうか。篠崎も気づいたようで、
「まさか、君たちの言っていることは本当に……」
　篠崎はそう言うと、アークティアにデータケーブルを接続し、ＰＣのキーボードを叩き始めた。
『エラー。データベースの外部からの閲覧は禁止されています。エラー。データベーｓ』
「うるさい！」
　篠崎はそう言い放ち、しばらくＰＣをいじったあと、無言でケーブルを抜き取った。そして……。

「……君たちの言うことはどうやら本当のようだ」
「え？」
篠崎のその言葉に美奈が反応する。しかし、篠崎はそんな美奈を無視して話を続ける。
「購入した当初から、少々人間臭いと言うか、違和感はあったんだ。でも仕様というか、そういうものかと思ってね。でも、違ったんだね」
篠崎はアークティアの髪を優しくなでる。
「この子は君たちの言う通り、涼花という子なのかもしれない。……だが、研究所で作られたロボットは他にもいる。この子が７号機なわけだからね」
「……他に、少なくとも六人がそのロボットにされているってことですか」
恭也が尋ねると篠崎は頷いた。
「ああ、そう考えるのが自然だろう。……人間をロボットに改造して売り払っているなんて、許せないよ」
篠崎は拳を強く握りしめる。その目には怒りが宿っていた。
「どうにかして、あの研究所を告発できればいいのだが……しかし……」
篠崎はアークティアの方を見た。証拠として警察に引き渡すべきか悩んでいるようだった。しかし、アークティアを警察に引き渡せば、どのような扱いを受けるのかわからない。篠崎にとっても恭也や美奈にとってもそれは避けたい事だった。
「篠崎さん、あの……」
恭也は研究所で見たロボットのこと、そしてその頭部に取り付けられた脳のような部品のことを篠崎に話した。
「……なるほど、それさえ確認できればってことか……」
だが、アークティアの頭部を見るとあのロボットよりも緻密にカバーが組み合わさっており、普通の工具では開けることができない構造のようだ。
「無理やり開けて、その脳の部分に損傷を与えてしまえば、どうなるかわからないな……」
篠崎はアークティアの頭部を見つめながらそう呟く。
「どうにかして開けることさえできれば、このロボットが涼花だって警察にも証明できるかもしれないのに」
美奈は悔しそうに唇を噛む。篠崎も「そうだな」と呟き、しばらく考え込んだ後……。
「任せてくれないか。これでもＩＴ企業の社長だ。そういったプログラムに詳しくはないが、時間さえあればなんとかできるかもしれない。それまで待っていてくれないか」
「だけど……」
恭也は篠崎にそう訴えかける。だが、篠崎は首を振った。
「君たちの気持ちもわかる。しかし、何とかしてティアの……涼花さんと言った方がいいかな？　彼女を救いたい」
篠崎は恭也の肩にポンと手を置いてそう言った。その目は決意に満ちていた。恭也はそれ以上なにも言うことができなかった。
「わかりました。……お願いします」
「ああ」
篠崎はそう頷き、恭也たちは彼の元を後にした。

※

数日後のこと。

「……なあ美奈」

「何？」

「このままでいいのか？俺達は何もせずに……」

恭也は美奈に訴える。しかし、美奈はすぐに首を横に振った。

「私もそう思う。でも……私達は所詮ただの学生よ」

「それはそうだけど……」

そんな時である。突然スマホの着信音が鳴り響く。

「はい」

「恭也君か？」

篠崎であった。

「篠崎さん？　どうしたんですか？」

「ああ、ティアのシステムをハッキングできないか試してみたのだが、やはりそう上手くはいかないな」

「そうですか……」

恭也はがっくりと肩を落とす。

「何か鍵が……ヒントさえあれば……」

篠崎は呟く。鍵……ヒントか……恭也は考える。

（やはり、あの研究所に行くしかない！）

「お、おい!?恭也君？どうした？」

恭也は無言のまま電話を切った。

※

シンセスティック・テクノロジーの研究所へ再度侵入した恭也は、ひっそりとした研究棟を進む。監視カメラもあるのだから発見されていないわけがない。静かすぎるその状態はかえって不自然とも言えた。

「ここか？」

以前ロボットがうろついていた廊下まで来る。その奥には階段が。真っ暗な地下に向かって伸びるその階段は、まるで地獄へと続いているかのようだった。

恭也はゴクリと息を飲むと、ゆっくりと下っていく……。

「この奥か？」

鋼鉄でできた扉に手をかけ、力をかける。予想に反してその扉は開いていく。

暗闇の中、恭也は伸びてきた手に気づかない。

「ぐっ!?」

バチバチとスタンガンの音が聞こえ、恭也は倒れ込んだ。意識はなんとか保っているが、身体は動かなか

った。
「飛んで火に入る夏の虫とはこのことかな」
　男が言う。
「か、川崎、っ？」
　恭也が初めてこの研究所を訪れたときに応対した人物、川崎がそこに立っていた。
「ああ、名前を覚えていてくれたのか。光栄だな。その後は会ってはいないが、うちの貴重なロボットを破壊してくれたこともあったな。その礼もしたいと思ってね」
　川崎はそう言うと、スタンガンの出力を上げる。恭也は苦痛に顔を歪めた。
「な、なんで……こんなことを？」
　なんとか口を動かし、恭也が聞くと川崎は表情一つ変えずに答える。
「こんなこと？　それは人をロボットにしていることかな？それともロボットを売って金儲けしていることかな？」
「……っ」
　恭也は川崎を睨む。しかし、そんな恭也のことなど気にする様子もなく、彼は続けた。
「まあどちらでもいいか。……そうだな。強いて言うなら金のためかな？　研究所というのは何かと金がかかるからね。それに……」
「な、なんだ……？」
「いや、なんでもないよ」
　そう言って川崎は笑う。その笑顔に恭也はゾッとした。
「さて、おしゃべりもここまでにしようか。ゼロ、彼を運ぶんだ」
『かしこまりました』
　ゼロは恭也を抱え、作業台へと連れていく。
「何をする気だ!?」
「君にはロボットになってもらう。研究所の秘密を知ってしまったのだから、当然だな」
「そ、そんなっ！　……ぐっ!?」
　ゼロは作業台に恭也を固定する。
「さて、ドクター・ジグラを呼んでこないとなぁ」
「くそっ！」
　その時、扉がばたんと開いた。
「何だ!?」
「恭也くん！」
　研究室へ入ってきたのは篠崎とアークティア、そして美奈だった。
「篠崎社長、これは……どういうことかな」
　川崎が怒気を孕んだ声で尋ねる。篠崎は「はあ」とため息を一つついた後、口を開いた。
「まさか、こんな、非人道的な実験をいているなんて、思っても見ませんでしたよ」
「篠崎社長、貴方も知ってしまったのですか……仕方ない、アークティア、コード９９、こいつを拘束しろ！……おい、アークティア!!」

川崎の言う事にアークティアは従わない。
『コード９９の優先命令権は現在使用できません。制御システムにエラーが発生しています。再度お試しください』
　そう繰り返すだけだった。
「ゼロ！　お前がこいつを拘束しろ！コード９９だ！」
『コード９９の優先命令権は……』
ゼロも直立不動のまま、同じ言葉を繰り返す。
「流石に完全に解析はできませんでしたが、貴方たちが何らかの制御システムを組み込んでいることまではわかりました……なのでそのあたりを妨害するプログラムをインストールしまして」
　篠崎がそう説明する。川崎が歯ぎしりをする。
「く、くそっ！　だが、どうしてゼロまで！」
「アークティアは非常に優秀ですね……彼女の機能を使って、この研究所のシステムをハッキングさせていただきました。無論警備システムも含め、すべてね」
　川崎は篠崎を睨みつけると、「くそっ！」と叫ぶ。美奈は恭也のもとに駆け寄り、拘束を外そうとした。
「させるか！」
　川崎は近くにあったメスを恭也に向かって投げようとした。
「な、なに!?」
『危険です。やめてください』
　いつの間にかアークティアがその手を押さえていた。
「アークティア！　離せ！」
　川崎が命令するが、アークティアは動かない。
「川崎さん、観念したほうがいいのでは」
　篠崎が憐れむように言う。
「ええぃ！　まだだ！　人間を改造したなどという証拠はどこにもないのだからな!!」
「川崎さん、先程言いましたよね、アークティアは警備システムも掌握していると。あなたが恭也君の前で言ったセリフもすべて記録されているんです。……言い逃れはできませんよ」
　篠崎が冷静にそう諭すように言う。川崎は「くそっ！」と吐き捨てる。
　その時、奥の扉を開き、ジグラ博士が現れた。
「ドクター・ジグラ!!　こいつらをどうにかするんだ！　はやく！」
「……ヒヒヒヒ、川崎よ。君は吾輩にこの研究室と被験体を提供してくれた恩がある……だが、もう潮時ではないかね」
「な、何を言っている？」
　ジグラ博士は静かに首を振った。
「ゼロ、拘束を解いてやりなさい」
「……ドクター・ジグラ、どういうつもりですかな」
　川崎が驚いた顔で言う。しかしジグラ博士は戯けた口調で続ける。
「ふん！　貴様が連れて来た被験体のうち何人が自らの意思でここに来たというのかのぅ？　……ここに

いるゼロと、そこのアークティアくらいだろう？　吾輩がそのことを知らないとも？」
「ぐっ……、そ、それは……」
　川崎は悔しそうな表情で言う。ジグラ博士の言っていることは事実のようだ。
「……吾輩の理論の実証のために様々手配してくれたのは、この研究所の資金……いや、貴様の懐を潤すためだったのだろう？」
「な、何を！　そんなわけが！」
　川崎は憤る。
「ヒヒっ、まあよい。貴様に不都合な人物、貴様に借金のある人物、研究所や貴様の秘密を知る人物……そういった人間を連れてきては吾輩の被験者にしたのだろう？　吾輩も改造ができるならと気にしないことにしたが……こうなったら覚悟を決めるべきじゃ。なあ？　川崎よ」
　川崎は「くっ」と歯を食いしばり、俯く。
「吾輩は逃げも隠れもせん。吾輩の理論の実証のために機械化の実験をしたのは事実じゃからの、ヒヒヒ」
「……っ!!」
　美奈はジグラ博士に殴りかかろうとする。しかしそれを恭也が止めた。
「やめろ美奈！　……すまない、ジグラ博士」
「ヒヒッ、少年、君が謝ることなどないんじゃよ。さてと……」
　ジグラ博士は篠崎の方に向き直ると話しかける。
「……それで？　吾輩をどうするのかね？」
「まずは警察に連絡させていただきます。そのあとは、しかるべき法に則り、罪を償っていただきます」
「ふむ……まあよいだろう。ヒヒッ……」
　ジグラ博士は笑った。その笑いにはなにかから開放されたような、そんな清々しさが感じられた。

　その後、警察が到着しジグラ博士と川崎は逮捕され連行された。最後まで川崎はジグラ博士を睨みつけていた。
　恭也と美奈は警察から事情聴取を受けた後、解放された。結局、アークティアやゼロは証拠物件として警察に押収された。

※

　この事件は大きく報道された。八名もの人物が非人道的な実験に使われ命を奪われロボットに改造。その上、研究所の資金、一部はは川崎の私腹を肥やすためとして売却されていたのだ。世間の注目は当然集まった。研究所は非難を浴びたが、ジグラ博士と川崎の共謀により勝手に行われていたものだとして、研究所は無関係であると主張した。川崎はジグラ博士が勝手にやったことと取り調べで話しているが、改造された者の多くが川崎の利害関係者であったり、川崎に金を貸していたりしていたことも判明している。また、川崎は被害者から摘出した臓器の密売にも関わっているとして、近く再逮捕される見込みらしい。
「……以上が事の顛末だよ」
　担当の刑事から説明を受け、恭也と美奈は「ふう」と息をついた。

「涼花……やその他の改造された人はどうなるんですか？」
「涼花？　ああ、三坂涼介君だね？　彼も含め改造された者は警察で回収しているが……」
　刑事は少々言いづらそうに続ける。
「人間に戻すのは当然不可能として、科学者からは使われている技術があまりも高度なため、手出しできないという話があった」
「そんな……！」
「ただ……」
　恭也は刑事の次の言葉を待つ。
「ドクター・ジグラ……本名は辻倉典次といってれっきとした日本人だが……が、取り調べで興味深いことを語っていてね。少々の調整さえすれば、ロボットの人格自体は戻せると」
「本当ですか!?」
「とはいえ、八人を改造した張本人だ。信用できるかという部分もあるが、彼に任せざるを得ないかもしれない。なんならボディも人間に近いものを作ることもできるそうだ」
「ボディ……」
　美奈が呟く。ロボットのボディ……アークティアの姿を思い浮かべる。機械の身体ではあるが、外見をより人間に似せるということだろう。
「まあ、少し先のことになるだろうけどね」

※

　テレビではロボットに改造されたという人物が、ジグラ博士による非人道的な実験の話をしている。川崎の悪事、ジグラ博士の非人道的な研究……。テレビでそれを語る人物の姿は、どうみても人間そのものの姿をしていた。もしかすると機械的な部分が服に隠れているだけかもしれない。
「恭也？」
「……ああ」
　テレビに映る人物は他の被害者と協力して研究所を訴えるというような話をしている。改造された人物、全員が全員、こうやってメディアに出ているわけではない。八人のうち、メディアに出ているのは三人だけだ。この女性「蒲谷珠音」の他、サイボーグ YouTuber「セリーナ」として活躍する「宇田瑞子」、元の生活に戻ろうとするダンサー「亀中聡」。その中に「三坂涼介」はいない。

　あの後、裁判所などからの特別な許可を得て、ジグラ博士はロボット化された人物の〝復元〟を始めたらしい。復元と言っても人間に戻すのは不可能だ。今まで消去されていた人格や意識を復元し、人間に近いボディを用意する。そうすることで元の人間に近い生活を送れるようにする……それがジグラ博士の考えだそうだ。とはいえ「セリーナ」のように機械的な身体のままを希望する人も中にはいるそうで、その場合は今までの機械的なボディをそのまま使うらしい。
「恭也、またぼーっとしてるよ」
「そうかな」

「……涼花のこと、考えてたんでしょ」
「……ああ」
　他の人物の話は聞くものの、涼花は一向にその姿を現さなかった。最初は順番待ちなのだろうと恭也は考えていたが、あまりに時間がかかっているため何度か警察に問い合わせた。しかし、警察にも未だ連絡は来ていないらしい。
「実家にもまだ連絡来てないみたいだし……」
「……大丈夫さ」
　そんなある日のこと、恭也の元に電話が来た。
「中条恭也さん、ですね。三坂涼介さんのことでお話があります。来ていただけますか？」
「えっと、俺、だけですか？　他の……家族や友人……美奈、は？」
「恭也さんだけに会いたい、ということです」
「!!　もしかして涼花が!?」
「はい……ですが詳しいことはお電話では……」
　恭也は指定された場所へと向かった。警察関係らしいその建物はしんと静まり返っており、案内役の警察官と恭也の足音だけが響いていた。
「こちらです。私はここまでで」
「あ、はい……」
　警察官が開けたドアの中へと入る。病室のようなその部屋の中央、ベッドに寝た人影に恭也は声をかけた。
「涼花……？」
　人影は機械的な動きで、恭也の方へ顔を向けた。以前見たときと同様の無表情のまま、彼女は言う。
『恭也、様』
　感情の乗らない合成された彼女の声が、恭也の鼓膜を震わせる。
「涼花……なのか」
『私は……』
　そう言って彼女は俯く。
「どういうこと、ですか」
　窓際で外を見ていたジグラ博士に恭也は声を震わせながら尋ねる。
「どうして、涼花は、アークティアのまま、なんですか」
　目の前のベッドに仰向けになっている彼女は寸分違わず、あのとき見たアークティアの姿のままで、ベッドに横たわっている。
　ジグラ博士は振り返る。その表情はなんとも複雑なものだった。
「ヒヒっ、それはのぅ」
　そう言って彼は語り始める。
「彼、いや彼女と言うべきか……の意識や人格はもちろん復元した。したのじゃが……どうも……つまり、ロボットでいたいと考えておるようなのじゃよ」
「そんな……！　お、お前がなにかしたんじゃないのか!?」
　恭也はジグラ博士に詰め寄る。しかし彼は相変わらず複雑な表情のまま、恭也の目を見つめた。

「ヒヒッ、吾輩はなにもしておらんよ……それにのう……」
　ジグラ博士はちらりとベッドに横たわる彼女を見る。
「……これはあの子自身が望んだことじゃ」
「う、嘘だ……！」
　恭也はベッドへと駆け寄る。
「涼花!?」
『恭也様、私は……ロボットでいたいのです』
「な、なにを言って……!?」
　恭也は涼花に訴えかけるが、彼女は無表情のまま淡々と続ける。
『私は……悩みすぎました。人間でいる以上、身体のことや性別からは逃れられません。私は……そのことがとても嫌だったのです。そして、そんな悩みから解放されたいと、ずっと思っていたのです」
　涼花の淡々とした告白は恭也に衝撃を与えた。
「そんな……俺は……」
　恭也の前では笑顔でいることが多かった涼花。随分と立ち直ったのだとそう勝手に解釈していたが、それは違っていたのだ。
『恭也様、私は……もう何も考えたくないのです。……機械でいることは理想的です。なにも考えず、ただ命令に従う。……私は、それがとても心地いいのです』
　涼花は淡々と続ける。
『恭也様、貴方は以前、私の選択は何でも応援してくださると、言ってくださいました。……機械でいるという選択も応援してはいただけませんか？』
「そ、そんな……こと」
　恭也は言葉に詰まる。昔、涼花が女性として生きたいと言った時に恭也が応援したことは事実だ。だが……。
『恭也様、私はもう、なにも考えずに生きていきたいのです』
　涼花は機械的な動きで恭也の手を握る。
『私は……ロボットでいたい』
「あ……」
『恭也様、どうか私の選択を理解して、いただけないでしょうか』
　淡々としたその言葉の中に、涼花の切実な想いが感じられた。
「涼花……俺は、俺は……」
　恭也は言葉に詰まるが、やがて絞り出すように言葉を発した。
「辛かったんだな、涼花……。苦しかったんだな……」
『恭也様……』
　恭也は涼花の手を握り返した。
「わかった……俺は……応援するよ」
『ありがとうございます。恭也様』
　その言葉を聞いた涼花の表情は、どこか嬉しそうだった。

『ところで、恭也様。……お願いがあります』「ああ、なんでも言ってくれ。……とは言っても俺にできる範囲でだけどな」
『大丈夫です。恭也様でしたらきっと』
　そう言うと涼花は一瞬言葉を切って、
『私の所有者に……なっていただけませんか？』
「……え？」
『恭也様、私は貴方のものになりたいのです』
「……で、でも」
　恭也は躊躇う。元々人間である涼花を所有物として扱うのは流石に気が引けるんだが……。
「ゴホン、あー、その子はの、つまり君とずっと一緒にいたいと言っとるんじゃよ」
　ジグラ博士が咳払いをしてそう説明する。
「ずっと……？」
『はい……私は貴方の所有物……いかがでしょうか』
　つまりそれはきっと
「あ、ああ、うん、涼花、俺は……」

※

「と、いうか、アークティア、涼花の人格が戻されているなら、そういえばよかったのに」
『ジグラ博士が説明しておりましたが？　意識と人格を復元したと』
　引越作業をしながら、恭也とアークティアはそんな会話を交わす。相変わらずアークティアは淡々とした様子であるが、少々嬉しそうだ。
「でもあんな、話し方だと……」
　あの部屋で恭也が話したのは復元された涼花の人格だったと聞いたのは少し後のことだった。随分淡々とした口ぶりで話すものだから、涼花の意識や記憶が復元された〝アークティア〟の人格が話しているものだと思っていたのだ。
『確かに現在は私「アークティア」としての人格によりキョウヤ様と会話しておりますが、施設での再会時の会話はすべて涼花の復元人格が行ったものです。……「本当の気持ち」を伝える必要がありましたので』
　涼花は〝ロボットとして過ごす〟ことが望みだった。ジグラ博士の手によりあの後、涼花の人格は再び眠りについた。と言っても現在のアークティアの人格は涼花の記憶や意識に強く結びついているため、今のアークティアも涼花の一部と言えるだろう。
「そのうちひょっこり、涼花くんの人格に切り替わっているかもしれんがの、ヒヒヒ」
　ジグラ博士はそんな事も言っていた。あるいは人格が混濁し、どちらともつかない人格が形成されていくのかもしれないとも。それはジグラ博士にもわからない。
「本当の気持ち、ね」

　あの後、様々なことがあった。涼花の家族への報告……ロボットになった涼花を見た家族は言葉を失って

いた。しかし、妹の花だけは「おねぇちゃん、ロボットになっても美人だね」と目に涙を溜めながらも笑っていた。アークティアは何も言わず、その頭をそっと撫でていた。美奈も「涼花的には恭也と一緒になれて万々歳かもね」なんて茶化していたが、複雑な気持ちを押し殺しているようにも見えた。篠崎のところに報告をしに行った際には、「そうか」と一言言った後、

「ティアは随分高かったからなぁ。もちろん買い取ってくれるんだよね？」

と笑顔で言ってきた。「えぇ……」という反応に困る恭也を見て、彼は大笑いしたのだった。

そして……

「アークティア、ちょっといいか？」

『はい』

引越作業の手を止め、アークティアは恭也の方を向く。

『なんでしょう？』

淡々としたその様子は涼花とは違う。だが、その仕草の一つ一つには、どこ涼花らしさがある。そんな気がした。

「これ……」

恭也はポケットから髪飾りを取り出した。

『ありがとうございます、キョウヤ様。……つけていただけませんか？』

恭也はアークティアの前髪にその髪飾りをつける。アークティアの見た目とは少々チグハグなそれを見て、彼女はなんだか満足したような様子で鏡を見ている。

「俺な、お前のこと、好きだよ」

『……』

恭也の言葉にアークティアは振り返り、目をぱちくりさせている。顔の表情は変化に乏しいものの、その仕草からほんの少しの感情の動きのようなものを感じ取れるようになったのはつい最近のことだ。

「もちろん人間だった頃の涼花のことも好きだけど……今のアークティアだって好きだ」

『ありがとうございます』

無機質ながらも嬉しそうな声で彼女は言った。機械的な動作と声音だが、そう感じた。

「涼花には、直接その気持ちを伝えることができなかった。だから……伝えておこうと思ってな」

『……はい』

恭也はアークティアを抱き寄せる。人間だった頃の涼花とは少し異なるその感触に、どこか愛おしさを感じながら、彼は囁くように言った。

「愛してる」

『ええ、私も』

口づけしようとした瞬間、気配を感じた恭也はバッと振り向いた。

顔を真っ赤にする花とニヤニヤする美奈が居た。

「どーしてやめるのよぉ」

美奈が不満げに言う。

「い、いやな……」

恭也は花の方をちらりと見るが、花はさっと視線を逸らし、
「ふ、ふつつかものの姉ですが、よろしくお願いししします……」
と囁くように言った。
「い、いや……まぁその……」
「ほれ、ぶちゅっとやっちゃいなさいよ」
「んな、お前な……」
『恭也様？　美奈様からのご指示です。継続を希望します』
アークティアは唇を突き出すような姿勢で静止する。
「おま、お前まで……」
二人のからかいに恭也はたじたじだ。
『恭也様、どうぞ』
「いや、だから……」
『どうぞ』
「……わ、わかったよ」
恭也は観念してアークティアを抱き寄せる。そして……。
「愛してるよ」
『はい、私もです』
二人は口づけをする。ヒューヒューと囃し立てる美奈の声も、掌で顔を隠しながらも指の隙間からじっくり見ている花の視線も、今の恭也には気にならなかった。アークティアは恭也の腕の中で、そっと微笑んだ。

あるレーシングヒューマロイドの少女の朝

ハカソシ

朝の優しい日差しが部屋を照らす。清潔感のある白い壁紙にポップな可愛らしい柄のカーテンが揺れている。ベットの上にはクッションがいくつか並べられていた。ベッドのヘットボードにはレーシングマシンのミニカーと小さな写真立てが置かれていて、どこかのサーキットでレーシングマシンとともに楽しげな表情を浮かべる少女の写真が飾られていた。

ベッドの隣には書き込みや付箋でいっぱいの教科書やノートがきちんと並べられた学習机が置かれている。机の上には可愛らしいペン立てや文房具、ミニサイズの観葉植物が並んでいて少しだけ散らかった感じが部屋の主の性格を表していた。その側に置かれた本棚にはマンガ本や小説本の他にキャラクターグッズが所狭しと置かれている。壁に掛けられたカレンダーには赤丸で予定が書かれ直近の日付には「冴羽 HRGP 本戦‼」と大きく書かれていた。

反対側の壁には高校の制服が掛けられていた。その制服や部屋の雰囲気から女子高校生の部屋であることが分かる。しかし、その中で異彩を放っていたのがベッドの側に置かれた装置だった。装置には一人の少女が立ったままの姿勢で固定されていた。少女は眠っているのかまぶたを閉じたままピクリとも動かない。

その姿は部屋の雰囲気とは不釣り合いだったが少女の出で立ちも異彩を放っていた。細くしなやかに伸びた手脚、程よく膨らんだ胸の双丘、美しくくびれた腰回りなど、全身にフィットしたゴム質の素材によってそのボディラインが露わになっていた。まだあどけなさを残す 12 代特有の少女の顔からは生気が感じられず、まるで人形のような印象を感じる。それを更に強調するのが、彼女の顎先から耳の位置までを覆う樹脂製のパーツであり、そのパーツは耳の位置にあるアンテナ上のパーツと一体化している。

暫くすると少女の瞳がパチッと開いた。焦点の合っていないカメラアイの瞳に無機質な光が宿り合成音声が部屋に響き渡る。

『システム起動中……。メインプロセッサーオンライン。人格ＯＳ バージョン 5.2.14 をロード中……。ハードウェア設定初期中……。センサーキャリブレーション……完了。全パフォーマンスチェック……問題なし。システムオールクリア、SH360RH0423MS はパーソナルモードで起動します』

部屋に響くスピーカーを通したような合成音声の声は抑揚に乏しく感情は感じられない。少女が発したソレはシステムメッセージそのもので、彼女が人間とは異なる存在であることが伺える。

手脚を装置に固定するロックがエアーの抜ける音とともに解除されると少女は装置から降りて腕を伸ばして伸びをした。

『うぅぅっっ……ん、ふぅ……』

思いっきり伸びをして身体をほぐすと息を吐いた。まるで作り物の人形のようだった少女の顔に生気が宿ると、クローゼットの扉に取り付けられた大きな姿見の前に立った。球体レンズと高性能センサーで構成さ

れた機械仕掛けの瞳が、姿見に映る少女の姿を捉える。少女の身体は、つま先から指先、首元までの全身にゴム質の素材がぴったりフィットしていた。それが外皮と呼ばれもので、白色と桜色のシンプルなカラーリングで纏められていた。朝倉でんき、丸満図書、フラワーながさわ、ミツバ模型……。少女の身体をレーシングスーツに見立てたように、身体の各部に様々なスポンサーロゴが直接入れられていた。

カメラアイのレンズのフォーカスが機敏な動きで瞬時に頭部に合わせられると、繊細な指先で髪を整え表情をチェックする。姿見にはポニーテールに髪を結った少女が、笑ったり怒ったりする姿が映し出された。

『よしっ、ＯＫ！』

納得したのか満足げな表情を浮かべる。その声は先程と違って抑揚がハッキリとあり意志が感じられる。カメラアイの瞳が次に捉えフォーカスを合わせたのは壁に掛けられたセーラー服だった。

セーラー服には刺繍で名前が入れられている。

櫻井まどか

それは、彼女が〝人間の少女だった頃〟の名前だった。そして、レーシングヒューマロイドであるSH360RH0423MS にとっては自身の改造素体となった少女の名前にすぎない。

手を伸ばし、夏用の軽やかな白いセーラー服に袖を通していく。セーラー服は白いトップスに水色の襟があって青色のリボンが胸元で美しく結ばれていた。トップスの襟にはアクセントとして白いラインが涼しげに入れられていた。プリーツスカートも襟と同じ水色だ。白色と桜色の手脚がトップスの袖先、プリーツスカートの先から露わになりスポンサーロゴが見え隠れしている。いくつかのスポンサーロゴはセーラー服の上からも透けて見えていたが彼女にとって特別な意識の対象ではなかった。

鏡に映る自分の姿を見つめる少女のカメラアイの瞳にはわずかに戸惑いが混じっていた。セーラー服の胸元に刺繍で刻まれた「櫻井まどか」という文字を見る度に彼女の機械化脳が過去の人間だった頃の記憶を呼び覚ます。櫻井まどかがレーシングヒューマロイドの素体としてその身を捧げたのは三ヶ月ほど前のことだ。たった三ヶ月前のことなのに遠い過去の記憶のように感じる。

人間だった頃の自分、笑顔を浮かべて友達と過ごした日々。けれど今の彼女はもうその櫻井まどかではない。SH360RH0423MS、レーシングヒューマロイドとしての自分が現実だ。

心の奥底にわずかな揺らぎを感じながらも、少女はその名前を確認することで再び自分の役割を再認識した。櫻井まどかでありながら、櫻井まどかでない存在。彼女の中に残る人間の記憶や感情とレーシングヒューマロイド、ロボットとしての現実が今の彼女を形成している。

「櫻井まどか……」

彼女は静かに名前をつぶやいた。

「……いや、違う。私は SAKURA Veloce 所有のレーシングヒューマロイド SH360RH0423MS。櫻井まど

かじゃない。私は自分の意志でレーシングヒューマロイドになったの。櫻井まどかは私の素体名。私は櫻井まどかの意思を継いでレースに勝つレーシングヒューマロイド」

少女は視線をセーラー服から引き、再び鏡に映る自分の姿を見つめた。彼女の視界には日付、時間、通信状態、身体の状態などの情報が常に表示されており、考えるだけでそのアイコンを操作して様々な情報にアクセスすることができる。その表示越しに見える風景が彼女にとっての日常だ。

深呼吸を一つしてから少女はプログラムされたかのようなブレのない規則正しい足取りでゆっくりと部屋を出た。

視界の片隅に表示された情報を確認しながら足を運ぶ。木製の手すりに手を軽く添え、ゆっくりと一段一段降りていく。古い木製の階段は微かに軋む音を立て少女の体重をしっかりと支えていた。彼女の機械仕掛けの足音は、普通の人間のものとは異なり、少し硬質な響きを持っていた。

階段を降り切ると、少女は視界に広がる店内の風景を捉えた。自宅の一階にある喫茶店「サクラベローチェ」だ。元レーシングヒューマロイドの母親が引退後に開いた喫茶店だ。店内はまだ開店前で、母親がカウンターの準備をしている姿が見えた。店内の一角には母親の現役時代の写真やトロフィー、そしてサーキットでの栄光を物語る数々のメダルが飾られていた。

レーシングヒューマロイド SH200RH1014SS。櫻井咲良という素体名をもつ彼女は櫻井まどかの母親にして SAKURA Veloce という個人チームを立ち上げ数々のレースで活躍したレーシングヒューマロイドだ。

『おはよう、まどか。今日も元気そうね』と咲良が微笑む。

カウンターのテーブルを拭く彼女はまどかと同じように全身をぴっちりとフィットする白と桜色を基調としたゴム質の素材に包まれそのボディラインを露わにしていた。まどかの外皮のデザインは母親である咲良譲りのものだった。外皮の上に直接エプロンを着ていてスポンサーロゴさえないものの肩にはチームロゴがプリントされていた。レーシングヒューマロイドの横顔と桜の花びらを組み合わせ SAKURA Veloce の文字が添えられたチームロゴはまどかの肩にもプリントされている。

『おはよう、ママ。今日は学校の後、まっすぐ神楽さんのところに行く予定だから』

『走行ユニットの調整でしょ？　麻里奈から聞いてるわ。遅くなりそうなら連絡入れてよ？』

まどかはテーブル席で咲良が作ってくれた朝食を食べながら、視界の中に表示されたアイコンからテレビ視聴のためのアプリを立ち上げる。日付、時間、通信状態、身体の状態など様々な情報が表示された視界の中に新たに小さなウインドウが開くと朝の情報番組が映し出された。

『はーい。ねぇ、ママ。やっぱり、朝ご飯は食べないと駄目？』

『ダーメ。まどかがヒューマロイドになるための条件、もう忘れたの？』

『朝の行動ルーティンに朝食を取ることが設定されてるんだもん。忘れるわけ無いじゃん。でもさ、私達ヒューマロイドは人間だったときみたいに食べなくても充電だけで生きていけるし、食べる機能はあるけどそのままゴミになるだけだからもったいない気がするの』

咲良はふっと息を吐き、カウンターに手をついた。

『まどか、あなたがヒューマロイドになるときにいくつかの条件を出したのは先にヒューマロイドになった私の経験からよ。食事は栄養補給のためだけにあるんじゃなくて、心の健康を保つためにも重要なの。私達、ヒューマロイドはロボットだけど人間を素体にしている以上、人間だった頃の記憶と心を持っている。これはヒューマロイドの大きな特徴よ』

まどかが自分の言葉をじっと聞いているのを見て咲良は更に言葉を続けた。

『ヒューマロイドになっても、心の成長は止まらないわ。あなたが感じる喜びや悲しみ、驚きや感動は、すべて人間だった頃と同じように大切なものなの。食事をすることは、その感情を豊かに育てる手助けをしてくれるの。だから、普段の生活はできるだけ人間だった頃と同じように過ごして欲しい。そして、三食ちゃんと食べること。これは、あなたの心を守るための大切な約束なのよ』

『うん……』

まどかが静かに頷くと、咲良は少し視線を鋭くしながら続けた。

『そして、まどか。私たちはレーシングヒューマロイドよ。レースに勝つためには心と体のバランスが非常に重要なの。食事を取ることで、心の安定を保つことができる。これは、最高のパフォーマンスを発揮するために欠かせないのよ。私も現役の頃、何度もこのことを実感したわ。心が乱れるとどれだけ身体が完璧でもベストなパフォーマンスは出せない』

まどかは真剣な表情で咲良の言葉を聞き入る。

『レースでは、ただ早く走るだけじゃなく心の強さと集中力も試されるの。食事をきちんと取って、心と体のバランスを保つことでレースのときに最高のパフォーマンスを発揮できるの。だから食事を怠らないで。充電だけでは補えない心の栄養が必要なのよ』

まどかは深く頷いた。

『うん、わかってる。最高のパフォーマンスを出すためにも、ちゃんと食べるね。ママ、ありがとう。これからも頑張るから、見守っててね』

桜はまどかの決意を感じ取り、優しく微笑んだ。

『それでいいの、まどか。食事を通じて心と体をしっかり保って今日も全力で頑張ってね。私はいつでもあなたを応援しているわ』

まどかは母親の愛情と教えを胸にしっかりと朝食を取ることを決意した。彼女は母親の期待に応えるべく、そして自分自身のために心と体の健康を大切にすることを誓った。

『そういえば、最近新しいメニューを考えているんだけど、試してみる？』

先程の真面目な雰囲気とはうってかわって咲良が問いかける。

『うん、どんなメニュー？』

まどかの目が期待に輝く。

『フルーツをたっぷり使ったパフェなんだけど、朝食にもいいかもしれないと思ってね。ビタミンたっぷりで、見た目も可愛いのよ』

『それ、すごく美味しそう！ 試してみたいな』

『じゃあ、明日の朝に作ってみるわね。楽しみにしていて』

咲良はそう言いながら、空いた皿を片付け、次の準備に取りかかった。まどかは満足げに食事を終えると、咲良に感謝の気持ちを込めて微笑んだ。

『ありがとう、ママ。今日も頑張ってくるね』

『行ってらっしゃい、まどか。気をつけてね』

※

朝食を終えたまどかはサクラベローチェの扉を開けてとそに出ると夏の朝の爽やかな空気がまどかを包みこんだ。商店街は朝の静けさの中で店主たちがそれぞれの店を開け始めている。商店街を通って学校に向かう途中、早速彼女はいつものように店主たちから声をかけられる。

「まどかちゃん、おはよう！」

『おはようございます、朝倉さん』

　最初に声をかけてきたのは、商店街唯一の電気屋の店主だった。店の看板には青い電気メーカーのブランド名とその隣に朝倉でんきと店名が掲げられていた。白髪混じりの髪を短く刈り込んだ店主に対してまどかはにっこりと笑って応える。彼はまどかのスポンサーの一人だ。

「昨日のレース見てたよ。いい走りだった！　この調子で今シーズンも頑張ってくれよ！　それとなにか必要なものがあったら、いつでも言ってくれよ」

『ありがとうございます！　私、この調子でがんばりますね！』

「期待してるよ」

店主はニカッと笑うと親指を立ててまどかを激励した。

「おはよう、まどかさん」

　次に声をかけてきたのは物腰柔らかい雰囲気を醸し出す丸満書店の店主だった。店の入口には新刊のポスターが貼られ店内には本の香りが漂っている。

『おはようございます、丸山さん』

『新しい本が入荷したんだ。時間があったら見においで。特に君が好きそうな新刊がいくつかあるよ。それとこの間、頼まれていた本は午後には入荷すると思う』

『それは楽しみです。学校の帰りに寄らせてもらいますね！』

　まどかは目を輝かせて答えた。

「待ってるよ。今日もいい一日を」

　丸山さんはにこやかに見送った。

「まどかちゃん、おはよう！」

ミツバ模型の店主がシャッターを開けながら声をかける。店の外からも分かるようにディスプレイされたガラス棚にはミニ四駆や鉄道模型が並んでいた。

「おはようございます、三葉さん！」

まどかは元気に答える。

「そうそう、まどかちゃんの新しいグッズを考えたんだけどさ、これなんかどうかな？」

そう言って店主が一旦店内に戻り、自信気な表情で持ってきたのはサーキットで疾走するまどかの写真を使ったクリアファイルだった。

『おぉー。文字の感じとか凄くかっこいいです！ありがとうございます！』

「他にもいくつか作ってみたんだ。時間があるときでいいから今度見てもらえないかな？」

『いいですよー。でも今日は予定があるのでまた今度で。それでは！』

「いってらっしゃい」

まどかは軽く手を振ると学校に向けて歩き出した。商店街の店主達との朝のコミニュケーションは日課で、まどかにとって商店街の店主達は小さき時から自分を支えて応援してくれる家族のような存在だった。レーシングヒューマロイドとなった自分のスポンサーになってくれたのもこの商店街の店主達だ。

『やばっ、ちょっと急がないと間に合わないかも……』

少し駆け足で学校に向かう。まどかは商店街のみんなの期待に応えるためにも次のレースも頑張ろうとの決意を胸に学校に向かうのだった。

人造魔法少女　エスクティア

姫宮セリス

世界は侵略を受けていた。

突如宇宙から飛来した謎の隕石、そしてそこから現れる黒い人影。

それがいったい何なのかはよくわかっていない。ただ判明しているのは、その黒い人影は人間に敵意があり攻撃してくること、そして、同時期に誕生が確認された、魔法少女と呼ばれる者の攻撃のみが有効であることだった。

そして、この日も黒い人影……侵略者が現れていた。

「出たーっ！　今日も出たー！」

「向こうの信号機あたりに出たぞー！　逃げろー！」

昼のビジネス街に現れた黒い人影……侵略者に、人々は声を出しながら逃げ出していく。

侵略も日常的になってくると逃げる側も慣れるようで、みんな同じ方向にと走り出し、無駄なく避難が進んでいく。

そんな中、逃げる人々の流れとは逆を向いた二人の少女。

「いくよ、ミカ」

「ええいきましょう、アイ」

近隣の学校のセーラー服を身にまとった二人の少女、アイとミカ。

この状況下で避難をしない彼女たちこそ、隕石の飛来と同時期にその力を発現した魔法少女なのである。

お互いに顔を合わせて頷いた二人の少女は、線対称になるような動きで懐からコンパクトを取り出し、天に掲げる、その時だった。

「そこまでよ！　悪の侵略者たち！」

突如響き渡る、彼女たちとは違う少女の声。

上から響くその声に、アイとミカは声がした方……やや古めの雑居ビルの屋上へと目をやる。

そこに立っていたのは、ブレザー型の制服を身にまとったベージュ色をしたストレートロングヘアの少女、その右手には六角形をしたコンパクト大の緑のクリスタル。

「あの制服って隣町の……じゃない、あのクリスタル！」

声を上げるアイ。

彼女は、ベージュ髪の少女が手にしている六角形のクリスタルに指をさし。

「あのクリスタル、私たちのこれと同じような感じがする！」

「変身！」

アイの気づきとほぼ同時、勇ましい掛け声を上げたベージュ髪の少女はクリスタルを天にと掲げる。

次の瞬間だった。

クリスタルからまばゆい光が発せられ、彼女の身体が光にと包まれる。

着用していたブレザーが光の中で分解され、服の下から現れたのは艶やかな肌ではなく、銀に光る外骨格の機械の身体。その胸の部分が開き、内部の基盤やメーターといった精密機械が存在する中央部に彼女のク

リスタルが納まり、接続される。
「魔法少女エナジーシステム起動！」
　胸の中央部にはめ込まれたクリスタルに輝きが生まれ、メーターの数値が一気に上昇する。そして、繋がれた配線からエネルギーの光が機械の身体に流れ込む。
　そのままエネルギー光は機械の身体を覆うように彼女のコスチュームを形成していく。
　白を基調としたハイネックのハイレグレオタード、腰のパーツから横にと伸びる青いミニスカート、身体の各所にはスカートと同色の機械の装甲を纏っており、最後に胸元のパーツの中央が開き、クリスタルが露出する。
「システムオールグリーン！　人造魔法少女エスクティア見参！」
　くるっと一回転して決めポーズを取り、侵略者を指さし名乗りを上げる、人造魔法少女エスクティア。
「さぁ、侵略者たち、かかってきなさい！」

「あれは、魔法少女っ？」
　目の前で繰り広げられた光景に驚きの声を上げたのはアイ。
「あれはある組織が極秘に開発していたという、人造魔法少女……。完成していたのね」
　驚くアイとはうって変わって、冷静につぶやくミカ。
「人造魔法少女？　魔法少女じゃなくて？」
「魔法少女を研究する組織が、サイボーグ化技術で人工的に魔法少女の力を扱えるようにする計画よ」
「へー、そんなのあるの？」
　アイの言葉に、ミカは自分のコンパクトを見つめて。
「私たちはこの変身コンパクトの力を自分の意志で開放することができるじゃない、でもその開放を機械仕掛けでしてしまう、それがあの子よ」
　そういって、視線をエスクティアの方にと向ける。
「それって誰でも魔法少女になれるってこと？」
「そうね、でも流石に脳以外は全て機械に改造しているって聞くわ。そこまでしないと魔法少女にならないんじゃ、ちょっとどうかしらね？」
　ミカに言われ、アイは少し考えて。
「それだと、もう少女じゃなくてほとんどロボットじゃない？」
「そうもいかないのよ、知ってるでしょ？　魔法少女は最終的には心がモノを言うってこと、だからどうしても脳は生身じゃいといけないわけよ。そこばっかりは代用できないわね」
　その言葉にアイはうんうんと頷く。
　そしてミカはエスクティアの方をじっと見て。
「脳以外は人工物。だから、造形も思うがまま……。可愛いわね、食べちゃいたい」
　舌なめずりするミカを、アイは見て見ぬふりをして。
「あっ、動くよ！」

　アイとミカが視線を向けるその先、黒い人影の侵略者。

バスケやバレーの選手を思い起こさせるすらりとした長身であるが、まるで全身タイツを着ているかのように全くの黒であった。そして、髪も顔のパーツもない首部分をエスクティアの方に向け。

「わぁっ！」

その光景に声を上げるエスクティア。

侵略者は一度の跳躍で６階立てのビルの屋上にと飛んできたのだ。

「っと、来たわね！」

すぐさま態勢を整え、エスクティアは迎撃の構えを取る。

だが、侵略者もすぐに彼女を見据え、言葉も発さずに行動に移す。

文字通り、黒い人影の右腕が伸び、彼女へと襲い掛かる。

「っ！」

次の瞬間、彼女は右へと飛んだ。

同時に彼女の後ろにあった給水塔が直線的に伸びてきた侵略者の右腕に貫かれる。鋼鉄で出来ていると思しき給水塔を軽々と貫く力、普通であればたじろいでしまうところだが。

「もらったわ！」

一気に前にと駆け出すエスクティア。

伸びてきた右腕が戻る前に、彼女は一気に勝負を決めに来た。

胸のクリスタルが輝きを増すと同時に右腕が開き、供給されるエネルギーによって中のモーターが勢い良く回りだして放電を開始する。

「エスクティアマジカルスラッシュ！」

「――――！」

気合一閃、光に包まれた右腕を振り抜くエスクティア。

それは侵略者の胸を貫き、表情なき顔から声なき叫びをあげる。だが。

「くぅっ！」

エネルギーや放電に耐えれなかったのか、エスクティアの右腕も爆破を起こし、破損したフレームが飛び出しオイルが漏れ出す。

「試験運用しかしてなかったから、流石に実践だと違うわ……でもっ！」

のたうち回る侵略者に向かって彼女は再び走り出し、残った左腕も右腕同様、放電を開始する。

「滅びなさい、侵略者！　エスクティアマジカルスラッシュツヴァイ！」

振り抜いた左腕が、今度は侵略者の顔を撃ち抜く。

もはや苦悶の叫びも上げることなく倒れ込み、そのまま塵となって消えていく侵略者。これが侵略者と呼ばれている黒い人影の断末魔であった。

そして勢いよく駆け抜けたエスクティアは。

「あ、やっばーい！　とまらないー！」

侵略者の顔と、屋上の柵を貫き、地面に向かって落ちていったのだ。

「やっちゃったなー」

ため息交じりにエスクティア。

落ちた衝撃で左足は砕け、太ももから下は完全に破砕、そこからも破損した金属のフレームが飛び出し、オイルが漏れ出していた。

脳以外すべてを人工物に置き換えていたため、躊躇なく左足を犠牲にすることが出来て事なきをえたエスクティア、機械の身体のために痛みはない、しかしこの様子では立ち上がることすら難しい状態であった。

「システムチェック実行」

目を瞑った彼女の視界に、システムチェック項目が映し出される。

魔法少女エナジーシステム正常。両アームサーキュレーター負傷。左脚部損傷大。

「ダメかなぁ、回収呼ばないとかなぁ」

座り込んだ状態で破損部分をじっと見る。

そこに。

「大丈夫？」

声を掛けられ顔を上げたその先には、二人の少女。

青いミニスカドレス風の衣装を身にまとった魔法少女と、ピンクの同じデザインの魔法少女。それは、先ほどまで彼女のことを見ていたミカとアイであった。

本職の魔法少女である二人の変身後の姿である。

「だ、大丈夫でででですす」

慌てて声を出すエスクティア。

「声、震えてるよ？」

「だだだだだ、だいじょううううぶぶぶ」

彼女の顔を覗き込む、ピンクの魔法少女アイに、声がさらに震えるエスクティア。

それもそのはず、彼女は魔法少女に憧れを抱き、人造魔法少女となったのだ。その憧れを抱いた魔法少女が目の前に現れて自分の顔を覗き込んでいるのだから。

そして、混乱した脳の情報が機械の身体に影響を及ぼす。

瞳のレンズの焦点が狂い、何度も合わせようとモーター音を立てレンズが動く。

胸のコアユニットが必要以上に熱を持ち、内部のメーターが激しく上下する。

落下で受けたダメージ以上に、こちらの方が深刻なエラーとシステムプログラムは告げる。

「全然大丈夫じゃなさそうね？　うわさに聞いた機械の魔法少女、じっくりと見てみたかったわ」

青の魔法少女、ミカが覗き込む。

「じ、じっくり？　わ、私の身体をっ？」

憧れだった二人の魔法少女が目の前に揃い、さらに自分の身体をじっくりと見たいとか言われたエスクティア、そのドキドキは限界に達していた。

「そう、じっくり」

「ああっ！」

にこやかにほほ笑むミカ。その笑顔で限界を超えたエスクティアは、胸のクリスタルが納まったコアユニットがオーバーヒートし、機械の身体中から煙を吐きだし後ろに倒れる。

「あらあら、やりすぎちゃったかしら」

「ミカ、興奮させすぎー」

ジト目でミカを見るアイ。

しかしミカは。

「このまま放っておくわけにもいかないし、持って帰りましょ。もう少し、この身体見てみたいし」

「もう、ミカったら。また悪い癖ー」

あきれた様子のアイを尻目に、ミカは意識を失ったエスクティアを背負い。

「ふふ、楽しませてもらうわよ、あなたの身体」

怪しい笑顔を浮かべ、アイとともにその場から去っていった。

この光景を映し出すドローンに手を振り、拾った小石を一つ投げつけて。

※

ドローンが破壊されて画面が砂嵐となるところで、エスクティアの映像が終了、そして見ていたモニターが壁へと収納される。同時にそこへ現れたのは白衣の女性研究者であった。

「このように人造魔法少女計画は無事に成功した、が、肝心のエスクティアは魔法少女たちにお持ち帰りされてしまった。なので君は、その二号となるのよ」

にこやかに顔を覗き込む白衣の研究者。

「何、心配はいらないわ。エスクティアが成功したのだ、人造魔法少女サイボーグ化技術は確立されている」

動こうにも、身体は固定されて動けない。

同時に手術用の無影灯に光が点く。

「目覚めたら君は美少女サイボーグ魔法少女の二号機だ、とても可愛くなるわよ。名前は……それは、後で良いか」

そして研究者は、麻酔のスイッチを入れる。

「それじゃおやすみ、新時代の魔法少女君」

遠ざかる意識、次に目覚めたとき、その身体は新たなサイボーグ体、新たな人造魔法少女となる。